# 原人論 并講話

124
210

324-210

帝國圖書館藏

# 府人論講話

明治
43. 2. 6
内交

# 凡例

一宗密禪師の原人論は、人生問題の根本を起點として、佛教の大意を說述したる有名の論文なり。予諸方に本書を講ずること十數回、今其の手稿と筆錄とを校訂して本書を成す。もと初心の徒に示すを旨としたるが故に、婆說紛々たるを免れずと雖も、亦江湖門に入らんとするの士を資するあるを得ば幸甚なり。

一原人論の註解、古來宋の淨源が發微錄と元の圓通の論解とを以て双璧とす、我が國にては增上寺周鑑上人の續解、普門律師の羽翼ありて、畧ぼ備ると雖も、悉く漢文にして初學に便ならず、近年大內青巒先生の講義ありて世に行はるゝの外、通俗なるものなし、予は是等の諸書を參考し、

其の主要なるものは之れを篇頭に載せて讀者の參考に資し、本文は平易を旨としたる予の講述により、別に參照を加へて洩れたるを補ふ。

一宗密禪師の此の論は儒道二教の會通を要としたるが故に往々牽强の感あるを免れず、予が本書に於て科學、哲學を引用せる、讀者も亦附會の感あらんも、予は必ずしも佛說に會通せんと企てたるにあらず、此の機會に於て相發明するあらんことを期したるのみ、讀者請ふ之れを咎むる勿れ。

一本書は通俗平易を旨としたるが故に、漢文をも悉く和譯したりと雖も、尙ほ原論文の筆勢を減ぜんことを恐れ、卷頭に原文を揭げて讀者の參考に資せり。

一原人論は佛敎の大意を叙述したりと雖も、佛敎の玄旨は之れに盡くるにあらず、實大乘の幽妙なる尙ほ更に細述を要すべきもの少からず。天台、華嚴、禪、淨土、眞言の所說本論に於て云はざること多し、讀者若し大乘佛敎の玄旨を探らんとならば、更に高き經論に就て一段の研究あらんことを要す。

一附錄として揭げたる人生と修養の一篇は、予が演說筆記にして、所論の要旨は既に他の著書に於て發表したるものに過ぎざれど、本書の講說と相涉ること少からざるを以て殊に卷末に揭げて讀者が課餘の一讀を煩す。

庚戌十月、秋雨蕭々たるの日

後學　哲學堂　誠

# 目次

一、緒言（序文）……（一）
原人論は原宇宙論……人とは何ぞや……原人論と人生問題……宗密禪師
……序文……本論述作の主旨……儒道二教の迷執……學佛者の偏淺……
諸宗教の一致……宗教と道德……本論の組織……韓退之の原人論

二、斥迷執第一……（二五）
儒道二教の原人說……身の元由……虛無の大道……因緣……元氣……教
育と遺傳……鬼神說……經驗の誤認……天命……聖賢の教唆と天命……
哲學者の原人說……基督教の原人說……科學者の所說と宗教

三、斥偏淺第一（上）……（六一）
佛教の五等……人天教……三世……十善十惡……地獄餓鬼畜生……五戒
と五常……須彌山……天上界……四禪八定……三時の業報……業の根本
……人天教の淺劣……小乘教……四大……五蘊……諸行無常……刹那……

……諸法無我……我見と三毒……惑業苦……生老病死……成住壞空……我を分析ち……不可得……苦集滅道……無我觀望……八正道……阿羅漢果……小乘の涅槃……小乘教を詰る……宇宙開闢說……其の時間……原人並に原社會……小乘の開闢說と道教との異同

四、斥偏淺第二(下)……(一二五)

大乘法相教……八識……阿賴耶識の解……種子と現行……四分說……唯識所變……大乘破相教……一切空……夢想と夢物……大乘教と空……空を知るものは何ぞ……般若は虛妄を開くのみ……偏淺たるの理

五、直顯眞源第三……(一四七)

一乘顯性教……本覺の眞心……佛性……如來藏……長者窮子……佛と衆生……本覺と始覺……一塵大千を含む……成佛の途……無爲……原人の極致……漸教の修行……頓教の妙

六、會通本末第四……(一六七)

本末……一心二門三大……阿賴耶と阿黎耶……三細……六麁……唯一眞心……四有……中有……父母……胎內……細胞……引業と滿業……因果說……運命の否泰……運命觀……元氣と大道を會す……易の五重……十二因緣……內の四大、外の四大……始覺本覺……三身の說……心佛衆生……結偈

附錄　人生と修養……(二〇一)

三個の人生問題……死の問題……靈魂……死後の裁判……エルの話……ストアと儒教……エピクロスと莊子……近世哲學……死生と倫理……理想と現實……人生の常態……心を一にす……宗教……死生一如……人生の本務……毀譽……天を相手とす……主人公……主張と調和

「無貧唯不聽。無富貧亦足
萬古一醉骨。聞家迴歌哭」
「空山不見人。但聞人語聲。
返景入深林。復照青苔上。」



# 原人論序

終南山草堂寺圭峰蘭若沙門宗密述

萬靈蠢蠢。皆有其本。萬物芸芸。各歸其根。未有無根本。而有枝末者也。況三才中之最靈。而無本源乎。且知人者智。自知者明。我今稟得人身。而不自知所從來。曷能知他世所趣乎。曷能知天下古今人事乎。故數十年中。學無常師。博考內外。以原自身。原之不已。果得其本。然今習儒道者。秖知近則乃祖乃父。傳證相續。受得此身。遠則混沌一氣。剖爲陰陽之二。二生天地人之三。三生萬物。萬物與人。皆氣爲本。習佛法者。但云近則前生造業。隨業受報。得此人身。遠則業又從惑展轉。乃至阿賴耶識。爲身根本。皆謂已窮其理。而實未也。然孔老釋迦皆是至聖。隨時應物。設教殊途。內外相資。共利群庶。策勸萬行。明因果始終。推究萬法。彰生起本末。雖皆聖意。而有實有權。二教唯權。佛兼權實。策萬行懲惡勸善。同歸于治。則三教皆可遵行。推萬法窮理盡性。至于本源。則佛教方爲決了。

然當今學士。各執一宗。就師佛者。仍迷實義。故於天地人物。不能原之至源。余今遵依內外教理。推窮萬法。初從淺至深。於習儒教者。斥澄分迹。而極其本。後依了教。顯示展轉生起之

義。會偏全。四。而至於末。（末即天地人物）文有四篇。名原人也。

斥迷執第一。

斥偏淺第二。

直顯眞源第三。

會通本末第四。

# 原人論

終南山草堂寺圭峰蘭若沙門宗密述

## 斥迷執第一（習儒道者）

儒道二教說。人畜等類。皆是虛無大道。生成養育。謂道法自然。生於元氣。元氣生天地。天地生萬物。故愚智貴賤貧富苦樂。皆稟於天。由於時命。故死後却歸天地。復其虛無。然外教宗旨。但在乎依身立行。不在究竟身之元由。所說萬物不論象外。雖指大道爲本。而不備明順逆起滅。染淨因緣。故習者不知是權。執之爲了。今略舉而詰之。所言萬物皆從虛無大道而生者。大道即是生死賢愚之本。吉凶禍福之基。基本既其常存。則禍亂凶愚不可除也。福慶賢善不可益也。何用老莊之教耶。又道育虎狼胎桀紂。天顏冉禍夷齊。何名爲乎。又言萬物皆是自然生化。非因緣者。則一切無因緣處。悉應生化。謂石應生草。草應生人。人生畜等。又應生無前後。起無早晚。神仙不藉丹藥。太平不藉賢良。仁義不藉教習。老莊周孔何用立教爲軌則也。又言皆從元氣而生成者。則欲生之神。未曾習慮。豈得嬰孩便能愛惡驕恣焉。若

言欲有自然便能隨念受惡等者則五德六變恐能隨念而解何待因緣學習而成又若生是稟氣而欲有死是氣散而欲無則誰爲鬼神乎且世有鑑達前生追憶往事則知生前相續非稟氣而欲有又驗鬼神靈知不斷則知死後非氣散而欲無故祭祀求福典籍有文況死而蘇者說幽途事或死後感動妻子儻報怨恩今古皆有耶外難曰若人死爲鬼則古來之鬼塡塞悲路合有見者如何不爾答曰人死六道不必皆爲鬼鬼死復爲人等豈古來積鬼常存耶且天地之氣本無知也人稟無知之氣安得欲起而有知乎草木亦皆稟氣何不知乎又言貧富貴賤賢愚善惡吉凶禍福皆由天命者則天之賦命奚有貧多富少賤多貴少乃至禍多福少苟多少之分在天天何不平乎況有無行而貴守行而賤無德而富有德而貧逆吉義凶仁夭暴壽乃至有道者喪無道者興既皆由天天乃興不道而喪有道何有福善益謙之賞禍淫害盈之罰焉又既禍亂反逆皆由天命則聖人設教責人不責天罪物不罪命是不當也然則詩刺亂政書譏王道禮稱安上樂號移風豈是奉上天之意順造化之心乎是知專此教者未能原人

## 斥偏淺第二 習佛不了義教者

佛教自淺之深略有五等一人天教二小乘教三大乘法相教四大乘破相教上四在此篇中五一乘顯性教在第三篇中一佛爲初心人且說三世業報善惡因果謂造上品十惡死墮地獄中品餓鬼下品畜生故佛且類世五常之教令持五戒得免三途生人道中

〔註〕天竺世教儀式雖殊慈惡勸善無別亦不離仁義等五而有德行可修例如此國歛手而舉吐蕃散手而垂皆爲禮也不殺是仁不盜是義不邪淫是禮不妄語是信不飲噉酒肉神氣清潔益於智也

修上品十善及施戒等生六欲天修四禪八定生色界無色界天

〔註〕題中不標天鬼地獄者界地不同見聞不及凡俗尚不知末況肯窮本故對俗教且標原人今敘佛經理宜具列

故名人天教也據此教中業爲身本

〔註〕然業有三種一惡二善三不動報有三時謂現報生報後報

今詰之曰既由造業受五道身未審誰人造業誰人受報若此眼耳手足能造業者初死之人眼耳手足宛然何不見聞造作若言心作何者是心若言肉心肉心有質繫於身內如何速入眼耳辨外是非是非不知因何取捨且心與眼耳手足俱爲質礙豈得內外相通速動

應接同造業緣。若言但是喜怒愛惡。發動身口。令造業者。喜怒等情。乍起乍滅自無其體。將何爲主而作業耶。設言不應如此別別推尋。都是我此身心能造業者。此身已死。誰受苦樂之報。若言死後更有身者。豈有今日身心造罪修福。令他後世身心受苦受樂。據此則修福者屈甚。造罪者幸甚。如何神理如此無道。故知但習此教者。雖信業緣不達身本。二小乘教者。說形體之色。思慮之心。從無始來。因緣力故。念念生滅。相續無窮。如水涓涓。如燈燄燄。身心假合。似一似常。凡愚不覺執之爲我。貪此我故。即起貪（貪三名利以養我）瞋（瞋二逆情違恐我）癡（非理計校）等三毒。三毒發意。發動身口。造一切業。業成難逃。故受五道苦樂等身（別業所感）三界勝劣等處（共業所感）於所受身。還執爲我。還起貪等。造業受報。身則生老病死。死而復生。界則成住壞空。空而復成。

（註）從空劫初成世界者。頌曰。空界大風起。傍廣數無量。厚十六洛叉。金剛不能壞。此名持界風。光音金藏雲。布及三千界。雨如車軸下。風遏不聽流。深十一洛叉。始作金剛界。次第金剛雲。注雨滿其內。先成梵王界。乃至夜摩天。風鼓清水成。須彌七金等。滓濁爲山地。四洲及泥犁。鹹海外輪圍。方名器界立。時經一增減。乃至二禪。福盡下生人間。初有地餅林藤。後粳米不銷。大小便利。男女形別。分田立主。求臣佐。種種差別。經十九增減。衆前總二十增減。名爲成劫。議曰。空界劫中。是道教指之云。虛無之道。然道體寂照靈通。不是虛無。老氏或迷之。或權設務絕人欲。故指空界爲道。空界中大風。即彼混沌一氣。故彼云道生一也。金藏雲者。氣形之始。即太極地。雨下不流者。陰氣凝也。陰陽相合方能生成矣。梵王界乃至須彌者。彼之天也。滓濁者地也。即一生二矣。二禪福盡下生。即人也。二生三。三才備矣。地餅已下乃至種種。即三生萬物。此當三皇已前穴居野處未有火化等。但以其時無文字記載。故後人傳聞不明。展轉錯謬。諸家著作種種異說。佛教又緣通明。三千世界。不局大唐。故內外教文。不全同也。住者住劫。亦經二十增減。壞者壞劫。亦二十增減。前十九增減壞。有情。後一增減壞器界。能壞者是火水風三災。空者空劫。亦二十增減中。空無世界及有情也。

劫劫生生。輪廻不絕。無終無始。如汲井輪。

（註）道教只知今此世界未成時一度空劫。云虛無混沌一氣等。名爲無始。不知空界已前早經千千萬萬遍成住壞空。終而復始。故知佛教法中小乘淺淺之教。已超外典深深之說。

都由不了此身本不是我。不是我者。謂此身本因色心和合爲相。今推尋分析。色有地水火風之四。心有受（能領納好惡之事）想（能取像者）行（能造作者念念遷流）識（能了別者）之四。若皆是我則成八我。況地大中

復有衆多。謂三百六十段骨。一一各別。皮毛筋肉肝心脾腎。不相是。諸心所等亦各不同。見不聞。喜不是怒。展轉乃至八萬塵勞。既有衆多之物。不知定取何者爲我。若皆是我。我即百千。一身之中多主紛亂。離之之外。復無別法。翻覆推我。皆不可得。便悟此身但是衆緣假和合相。元無我人。爲誰貪瞋。爲誰殺盜施戒。知苦諦也遂不滯心於三界有漏善惡。斷集諦也但修無我觀智。滅諦以斷貪等止息諸業證得我空眞如。滅諦乃至得阿羅漢果。灰身滅智。方斷諸苦。據此宗中。以色心二法及貪瞋癡爲根身器界之本也。過去未來更無別法爲本。今詰之曰。夫經生累世爲身本者。自體須無間斷。今五識闕緣不起。根境等爲緣意識有時不行。悶絕、睡眠、滅盡定、無想定、無想天、無色界天無。此四大如何持得此身世世不絕。是知尊此教者。亦未原身。三大乘法相教者。說一切有情無始已來。法爾有八種識。於中第八阿賴耶識。是其根本。頓變根身器界種子。轉生七識。皆能變現自分所緣。都無實法。如何變耶。謂我法分別熏習力故。諸識生時變似我法。第六七識。無明覆故。緣此執爲實我實法。如患重病心惛見異色人物也夢見可知者患夢力故。心似種種外境相現。夢時執爲實有外物。寤來方知唯夢所變。我身亦爾。唯識所變。迷故執有我及諸境。由此起惑造業。生死無窮。喻如三悟解此理。方知我身唯識所變。識爲身本。不了之義前說一如夜所夢四大乘破相教者。破前大小乘法相之執。密顯後眞性空寂之理。

〔註〕破相之談。不唯諸部般若。徧在大乘經。前之三教。依次先後。此教隨執即破。無定時節。故龍樹立二種般若。一共二不共。共者。二乘同聞信解。破二乘法執故。不共者。唯菩薩解密顯佛性故。故天竺戒賢智光二論師。各立三時教。措此空教。或云在唯識法相之前。或云在後。今意取後。

將欲破之。先詰之曰。所變之境既妄。能變之識豈眞。若言一有一無者。此下却替彼唱破之則夢想與所見物應異。異則夢不是物。物不是夢。寤來夢滅。其物應在。又物若非夢。應眞物。夢若非物。以何爲相。故知夢時則夢想夢物。似能見所見之殊。事理則同一虛妄。都無所有。諸識亦爾。以皆假託。衆緣無自性故。故中觀論云。未曾有一法不從因緣生。是故一切法無不是空者。又云。因緣所生法。我說即是空。起信論云。一切諸法唯依妄念而有差別。若離心念。即無一切境界之相。經云。凡所有相。皆是虛妄。又云。離一切相即名諸佛。如此等文遍大乘藏是知心境皆空。方是大乘實理。若約此原身。身元是空。空即是本。今復詰此教曰。若心境皆無。知無者誰。又若都無實法。依何現諸虛妄。且現見世間虛妄之物。未有不依實法而能起者。如無濕性不變之水。何有虛妄假相之波。若無淨明不變之鏡。何有種種虛假之影。又前說夢想夢境同虛妄者誠如所言。然此虛妄之夢。必因睡眠之人。今既心境皆空。未審依何妄現。故知此教但

破執情。亦未明顯眞靈之性。故法華經云。一切空經是有餘說。（有餘者餘義未了也）大品經云。空是大乘之初門。上之四教展轉相望。前淺後深。若且習之。自知未了。名之爲淺。若執爲了。即名爲偏。故就習人云偏淺也。

## 直顯眞源第三（習佛了義實教者）

五一乘性教者。說一切有情皆有本覺眞心。無始已來。常住清淨。昭昭不昧。了了常知。亦名佛性。亦名如來藏。從無始際。妄想翳之。不自覺知。但認凡質。故就著結業。受生死苦。大覺慈之。說一切皆空。又開示靈覺眞心清淨。全同諸佛。故華嚴經云。佛子。無一衆生而不具有如來智慧。但以妄想執著而不證得。若離妄想。一切智自然智無礙智。即得現前。便舉一塵含大千經卷。喻塵況衆生。經況佛智。次後又云。爾時如來普觀法界一切衆生。而作是言。奇哉奇哉。此諸衆生。云何具有如來智慧。迷惑不見。我當教以聖道。令其永離妄想。自於身中得見如來廣大智慧。與佛無異。評曰。我等多劫。未遇眞宗。不解反自原身。但執虛妄之相。甘認凡下。或啻或人。今約至教原之。方覺本來是佛。故須行依佛行。心契佛心。返本還源。斷除凡習。損之又損。以至無爲。自然應用恒沙。名之曰佛。當知迷悟同一眞心。大哉妙門原人至此。

（註）然佛說前五教。或漸或頓。若有中下之機。則從淺至深。漸漸誘接。先說初教。令離惡住善。次說二三。令離染住淨。後談四五。破相顯性。會權歸實。依實教修。乃至成佛。若上上根智。則從本至末。謂初便依第五。頓指一眞心體。心體既顯。自覺一切皆是虛妄。本來空寂。但以迷故託眞而起。須以悟眞之智。斷惡修善。息妄歸眞。妄盡眞圓。是名法身佛。

## 會通本末第四（會前所斥同歸眞源皆爲正義）

眞性雖爲身本。生起蓋有因由。不可無端忽成身相。但緣前宗未了。所以節節斥之。今將本末會通。乃至儒道亦是。

（註）初唯第五性教所說。從後段已去。節級方同諸教。各如註說。

謂初唯一眞靈性。不生不滅。不增不減。不變不易。衆生無始迷睡。不自覺之。由隱覆故。名如來藏。依如來藏故。有生滅心相。

（註）自此方是第四教。亦同破此已前生滅諸相也。

所謂不生不滅眞心。與生滅妄想。和合非一非異。名爲阿賴耶識。此識有覺不覺二義。

（註）此下方是第三法相教中亦同所說。

依不覺故。最初動念。名爲業相。又不覺此念本無故。轉成能見之識。及所見境界相現。又不覺此境但從自心妄現。執爲定有。名爲法執。

〔註〕此下方是第二小乘教中亦同所說。

執此等故。遂見自他之殊。便成我執。執我相故。貪愛順情諸境。欲以潤我。瞋嫉違情諸境。恐相損惱。愚癡之情展轉增長。

〔註〕此下方是第一人天教中亦同所說。

故殺盜等心神。乘此惡業。生於地獄鬼畜等中。復有恐此苦者。或性善者。行施戒等心神。乘此善業。運於中陰。入母胎中。

〔註〕此下方是儒道二教亦是同所說。

稟氣受質、（會彼所說以知然本）氣則頓具四大。漸成諸根。心則頓具四蘊。漸成諸識。十月滿足生來名人。即我等今者身心是也。故知身心各有其本。二類和合。方成一人。天修羅等。大同於此。然雖因引業受得此身。復由滿業。故貴賤貧富壽夭病健盛衰苦樂。謂前生敬慢爲因。今感貴賤之果。乃至仁壽殺夭施富慳貧種種別報。不可具述。是以此身或有無惡自禍。無善自福。不仁而壽。不殺而夭等者。皆是前生滿業已定故。今世不因所作。自然如然。外學者不知前世。但據目視。唯執自然。（會彼所說自然爲本）復有前生少者修善。老而造惡。或少惡老善。故今世少小富貴而樂。老大貧賤而苦。或少貧苦。老富貴等。故外學者。唯執否泰由於時運。（會彼所說皆由天命）然所稟之氣。展轉推本。即混一之元氣也。所起之心。展轉窮源。即眞一之靈心也。究實言之。心外的無別法。元氣亦從心之所變。因前轉識所現之境。是阿賴耶相分所攝。從初一念業相分爲心境之二。心既從細至麤。展轉妄計。乃至造業。（如前敍列）境亦從微至著。展轉變起。乃至天地。

〔註〕即彼始自太易。五重運轉。乃至太極。太極生兩儀。彼說自然大道。如此說眞性。其實但是一念能變見分。彼云元氣。如此一念初動。其實但是境界之相。

業既成熟。即從父母。稟受二氣。與業識和合。成就人身。據此則心識所變之境。乃成二分。一分即與心識和合成人。一分不與心識和合。即是天地山河國邑。三才中唯人靈者。由與心神合也。佛說內四大。與外四大不同。正是此也。哀哉。寡學異執紛然。寄語道流。欲成佛者。必須洞明麤細本末。方能棄末歸本。返照心源。麤盡細除。靈性顯現。無法不達。名法報身。自然應現無窮。名化身佛。

# 原人論 終



# 原人論講話

加藤咄堂述

## 一、緒言（序文）

今回は宗密禪師の原人論に就て話をせよといふことで、早速承知はしたものゝ、サテ考へて見ると、此の原人論といふ書物は其の名は原人とあつて人間の根原を調べるといふのであるが其の實は生物の始原、宇宙の根底をも調べねばならぬ大問題に觸れ、且つ佛教各宗の教理を批判して終に其の最高眞理といふ所に入つて居るので、なか〳〵私如き淺學なものの充分に話の出來るとてはない、何故かといふに、試に人間が此の世に出來てから何年經つて居るかといへば、人類學者は、少くとも二三十萬年を經過して居るといふ、然らば二三十萬年前が人類の原始かといふと、生物學者は、直ちに進化論を持ち出してイヤそれは人類となつてからで、其の先は猿の樣なものであつたといふ、然ら

ば猿のやうなものが、人類の根原かといふと、イヤ其の前は蛙のやうなもの、其の前は芋虫のやうなもの、其のズット前は炭素と酸素と水素と窒素との寄り集つて出來て居る原形質これが始りだといふ、併し其の前には地球が出來て居つた、其の地球の本は太陽、太陽の本は星雲といふものであつたと漸次遡つて行くと宇宙の根原にまで入り込まねば原人の意義は解らないので、天文、地文、地質、物理、化學、植物、動物等の諸學科より人類學や社會學それに歴史までも參考せねば此の問題を解釋することが出來ない、否な是等の諸科學だけでは到底本の本たる宇宙の根原を尋ねることは出來ないので、此の上は實驗を離れて哲學上の思索に依らねばならぬといふことになるから、原人論は即ち原生論たり、原宇宙論たらねばならぬのであつて、到底精細に御話するといふことは出來ないが、こゝでは宗密禪師の原人論を基礎として聊か私の考を附加して贅げながら此の大問題に觸れて見ようと思ふのです。

先づ此大問題に觸れる前に豫め定ねばならぬのは、人とは何ぞやの問題です、人とは何であるか、人と他の動物との區別は那邊に在るか、昔の人は毛の有無や言語の有無で區別して居つたが、人にも毛がないのではなく獸類殊に高等動物には言語もあるといふのであるから、コンナ簡單なことで區別することは出來ない。或は心の有無で定めるといふ人もあるが、燒野の雉子、夜の鶴、彼等には子を思ふの情もあり、牛馬犬猫の如き家畜を見ても知覺の心的作用のあるのは誰にでも解つて居るのであるから人類以外に心なしなどといふ妄論は立たない、然らば那邊が人と他の動物との異る點だといふと、淨源の發微錄には「人の字に二釋あり、一には多思、二には多恩なり、涅槃經にいふ、多思を以ての故に盖し能く善惡を思量すること餘趣に異なるなり、若し多恩を言はゞ慈恩の德あること亦餘趣に異なるが故に」とある、即ち思慮の勝ぐれたのと恩を知ることの多きを以て人と他の動物とを區別し、村上博士は曾て七個條を擧げて人の資格を示されて居る。

一、智識ある者を人とす、
二、慈悲ある者を人とす、
三、禮義ある者を人とす、

法苑珠林の八人とは忍辱の人、世間に順逆の情能く安忍す、故に名けて忍と爲す。是婆娑論に五道人の驕慢、過ぎたるは人とあるは梵語。梵沙門(manuṣya)惡と、人中の所作志惡皆を先とするに由る

四、慚愧ある者を人とす、

五、恩を知る者を人とす、

此の五ヶ條は古人もいふて居るが、博士は更に、

六、國民的觀念ある者を名けて人となす、

七、宗教的觀念ある者を名けて人となす、

と云はれて居る、これは道德上の人類の資格として示されたのてあるが、人といふ字は道德上の意味に使つて「何某は人にして人にあらず」といふ時の後の人といふ字の義ばかりてはなく、前の人にしての人といふ義にも使ふのてあるから此の七ヶ條は後の人といふ義としては完全てあるが、前の人にしての人といふ義は今一層廣く横目縱鼻、五尺の身體、吾等と同じ形を爲して居るのて、其の他の動物と異る所は、他の動物が唯だ自然の衝動に逆れて何の目的もなく行動して居るのに反し、人類の行動には必ず何等かの目的がある、此の目的意識の有無を以て他の動物とを區別するといふのが今日一般に許されて居る考らしい併し唯だ目的意識を以て行動して居るといふだけては僅かに人と云はれるだけて、まだ眞の人と云はれる譯には行かぬ、眞の人となるには村上博士の云はれたやうな條件を具へねばならぬ、若しこれらの條件、殊に其の最後の條件たる宗教的觀念のないものには永遠の目的即ち理想といふやうなものを立ることが出來ない。人生五十年、夢の如くに生き夢の如くに死す所謂醉生夢死の人たるに終る、宗密禪師の原人論は之れを憫んて述作せられたものて、原といふは字彙に原は考なり窮なりとあつて其の本源を考へ究むるのてある、即ち此の書は人類の本源を考究したものて人生の根本問題の解決を企てたものだ。

かういふと人の此の世に生くる、唯だ人の人たる道を盡せば可なり、其の本源を尋ぬるの要はないといふ人があるかも知れぬが、此の本源を究めずして何うして人の人たる道が盡くされようと人は毎日々々額に汗を流して營々として働いて居る、それは何の爲めかといへば生きんが爲めてある、生きんが爲めに働いて終に死なきことを得るか、日々生きんが爲めに働いて日々死の方へ近づくのが人間の狀態てはないか、働くも死し働かざるも死す、生抑も何物

ぞ、死抑も何物ぞ、此の根本に於て其究むる所がなければ其の道に盡くすといふことも無意義になるのである、人は如何にして生くべきかは當面の問題であるが、此の當面の問題を解決するには是非如何にして生れ來りしかといふ原人の問題を究めてかゝらねばならぬ、如何にして生れ來りしかといふ原人の問題が究められて始めて死して如何になるべきかといふ未來の問題にも觸れるのであるから、原人のことは決して等閑視すべきことでなくて吾等の頭上に來つたる最緊最切の問題である。

此の書の著者宗密禪師は今から一千年の昔、唐の代宋の大曆十四年に生れられたので家は代々儒者であつたが、禪師年二十九、遂州の道圓禪師の許に法味に接し、禪宗の方では達磨大師の七祖荷澤宗の祖と云はるゝ荷澤神會の五世の法孫となり、華嚴宗の方では賢首大師の法子清涼澄觀の弟子にして敎、禪二門に通じ、著書九十餘卷、一代の碩學であつたので、此の書は有名な唐の韓退之が「原人」を著したが其の言ふ所天地兩間の者は皆な人なり、人は夷狄禽獸の主なり、主にして之れを暴らさば主たるの道を得ずといふに止りて未だ生命の根本、人類の始原を究めないから、禪師筆を執りて此の書を著はし、其の學殖を傾け內外の敎理を通觀して此の大問題を解決せんとして、立派な文章で書かれたものであるから、其の冒頭から既に氣焰萬丈だ。

萬靈の蠢々たる皆な其の本あり、萬物の芸々たる各々其の根に歸す、未だ根本なくして枝末ある者はあらざるなり。況んや三才の中の最も靈なるものにして本源なからむや。

といひて、凡そ此の世の中に靈あるものは數限りなく蠢々として春風來て地中の虫の出るが如くうごめいて居るが、それにも皆な其の本があり、雜艸の繁茂するが如く多くの芸々は衆多の貌萬物も各々其の根本に歸るので、其の本たるの生、其の歸する所の死もある、根本なくして枝末のあるのは何にもないのであるから天地人三才の中で最も靈妙だと云はれて居る人に本源のないことがあるべきぞといふのが劈頭の宣言である。三才とは天に運動の才あり、地

に生成の才あり、人に靈慮の才ありといふのて此の三才の中、人を以て其の中の最靈なるものとするのは、書經に惟れ天地は萬物の父母、惟れ人は萬物の靈とあるのに出たのて、文心彫龍には仰て吐耀を見、仰して合章を察す、高卑位を定む、故に兩儀といふ、儀既に兩あり、唯だ人之れに參つて性靈の宗とする所なりとある。

且つ人を知る者は智なり、自ら知る者は明なり、今我れ人身を稟け得て自ら從來する所を知らず、曷んぞ能く他世の趣く所を知らんや、曷んぞ能く天下古今の人事を知らんや、故に數十年の中、學に常師なし、博く內外を考へ、以て自身を原づね、之れを原づねて已まざりしに、果して其の本を得たり。

人を知るの智は自ら知るの明に如かず、自ら知らざるもの其れ何をか成し得ん。されば希臘の哲人ソークラテースは常に人に向て汝自身を知れと云はれたといふとて、萬物の靈長たる人間に生れながら我抑も何の所より來り、何の所へ趣くかを知らず、何處から來たかといへば父母、其の前はといへば祖父母、其の前は曾祖、其の先きは〳〵と遡れば先祖、其の先はといへば神だといふ其の神はといへば全智全能、得て人智の量り知るべからざる所だといふの外はなく、死んて何處へ行く墓場へ行く、それから何うなる、それは解らぬといふのでは生の從來する所、死の趣向する所を知らないのだ、既に自身が何處から來て何處へ趣くかも解らぬものが、何うして此の廣い天下、此の長い古今に起つた人事の善惡とか邪正とかいふ一切の事を知ることが出來やうぞ、口賢しく天下國家の政治を論じたからとて自身の事は解らず、古今の興敗を說いたからとて自家の運命が解らなくて何になる、これを智といふことは出來やうが、明といふことが出來るか、そこて禪師は數十年の間、誰れを師と賴むてなく、凡そ善いと見たものは皆な之れを師として博く佛典の目やら、佛敎以外の儒敎道敎やらいろ〳〵なものを考究して自身の根原を究め究め〳〵て已むことなく行住坐臥之れを忘れずに勉强した結果、終に其の本源を究むることが

定に坐亡す。定は靜と譯す。

人を知る智は自らの知るは明の譬は老

和漢三才圖繪に蟲魚類は和訓無久久女久の虫の動きは搖ぐなり芸子に出て芸夫道の經に德の物各其の根芸に蔭す根に蔭すは靜と靜ふを復ふ云々。



子の成文の用を其の道わしの德を經に知なる者人は智なり自ら知るは明なり。

玄宗の註に曾者は後に用て以て物を知る敵明者は敵て微照して微を以て照明るは知智ざ則ちあらは知ら則ち照明るは所ら所ら云々。

原人論解題は史には馬鳴菩薩傳を刑修め發れて煩ず雜揚著し竟を終に閱て投る如きに

明智といふべきかとて本末を棄てゝ末を棄てゝ本を求むるを笑ふ此例必ずしも當盤らずと雖も、天下古今の天地と自ら知りたるものい

つぎに四象は二、小、大の分れを以て八卦となり、八卦は三爻を重ねて六十四卦となる、天地萬物の變易此中に收るといふ風に說くのて、萬物も人も其の本を質せば唯だこれ太極の一氣あるのみとなるのが支那哲學の原人論たり原宇宙論たるのてある、佛敎の方はといふに、

佛法を習ふ者は但だいふ、近きは則ち前生に業を造り、業に隨ひ報を受けて此人身を得たり、遠きは則ち業又惑に從ひ、展轉して乃至阿賴耶識を身の根本と爲すと、皆な已に其の理を窮むと謂へり。而も實は未し。

近い所ては前生に業を造つて其の報ひて生れて來たのだといふ、即ち今生にコンナ人身を受けたのは前生に身て行ひ口て言ひ意で思ふた身口意の業即ちシワザが本となつたのてある、そんなら何うしてそんな業を造つたかといへば惑に本くといふ、惑はマヨヒて眞理を眞理と見ることが出來ず、却て非眞理を以て眞理とする此の迷ひによつて行つた業てあるから此の生老病死の苦みある人身を受けねのだと說明する、惑によりて業、業によりて苦、即ち惑業苦、惑業苦と展轉したのだといふのて之れを業感緣起論といひ、小乘佛敎の原人說だ。大乘法相敎に行くと此の惑の根本を定めて阿賴耶識といふものだといふ、阿賴耶は梵語(Araya)支那に譯して藏といふて一切萬物の種子は皆な此の藏の中に收つて居る、されば人間の身の本も此の識に外ならぬ、萬法は悉くこれ唯識の所變だと說くのて、これを賴耶緣起といふて權大乘の敎義て、大乘佛敎の眞實義てない、ソコデ皆な已に其の理を究むと謂へり而も實は未し」といふて宗密禪師の所謂其の本を究めたものはコンナものてはないと斷言した。

併し宗密禪師は孔子の說かれた儒敎や、老子の道敎、それに釋尊の佛敎まてを排斥するのが主旨ぢやない、文章こゝに於て一轉し、

然れども孔老釋迦は皆な是れ至聖なり、時に隨ひ物に應

じて教を設くるに途を殊にするも、内外相資けて共に群庶を利し、萬行を策勤して因果の始終を明し、萬法を推究して生起の本末を彰すことは皆な聖意なりと雖も、而も實あり權あり、二教は唯だ權にして、佛は權實を兼ぬ、萬行を策し、惡を懲らし善を勤めて同じく治に歸せしむるは則ち三教皆な遵行すべし、萬法を推し理を究め性を盡して本源に至るは則ち佛教方に決了となす。

と、書いて佛教の包容主義を明にした、由來佛教と基督教とを較すると一は包容主義で、他は排斥主義、排斥主義の基督教は火の物を焚くが如く他の異說異教を焚き盡さねば止ぬが、包容主義の佛教は水の物を潤すが如く漸次に異說異教を同化して自家藥籠中のものとする、それは基督教の方は一神教で他の神を排斥して自教の勢力とするが、佛教は汎神教といふて宇宙萬有悉くこれ神の顯現、佛の外はないといふので彼の異說異教といふも皆なこれ其の眞理の片影たるに外ならぬとするのであるから印度に於ては波羅門教を同化し支那に於ては儒教や道教を同化し日本に來つては神道をも同化して居る、此の包容主義の見地から孔子も老子も佛教の大圓眞理中の者で孔子は淨光童子、老子は摩訶迦葉の跡を支那に垂れたものだなどといふ揑造說も出たのであるが、ソンナ穿鑿はこゝに必要がないから略するとして、皆な共に聖人であるといふことは公平な觀察、皆なこれ聖人、天にある一輪の月影を萬機の器水に浮ふる如く時に隨ひ、物に應じて教を設けられたので、其の說く所は異つても歸する所に異りはない、大宮口から登つても吉田口から登つても乃至御殿場から上つても、登りつめれば同じ富士の頂だ、孔子は六經を本として仁義道德を以て世を訓へ、老子は道德經を說き寡慾恬澹、自然の大道を示して世を訓へ、釋尊八萬四千の法門も其の歸する所は衆生濟度にある、彼れよりするに便なるものは彼よりし、此れよりするに便なるものは此よりす、內外相資けて群庶を利すで、內といふたのは內典、外といふたのは外典即ち佛教の內外と見てもよく、內といふたのは、精神、外といふは身體、佛教は性相を辨じ心裏の內面に論ずる時の孔子は人根性況を因果を開示して方便を以て人を誘ふ、元來佛教は人性を見て、本來面目を指す、と爲す

入るから内。儒教は治國平天下、齊家修身を事とするから外。と見てもよい、兎に角儒道と佛教とが相資けあつて群庶を利すて、民を利するのを目的として居る、儒教と佛教とは決して仲の悪いものぢやない、日本の大儒といはるゝ大江匡房には日本往生傳などといふ佛教の著述があり、菅原道實は殊の外の佛教信者であつたことは今更ら事新らしく云ふまでもない、されば宇多天皇が醍醐天皇に御讓位の時の詔にも「道を有識に問ひ、治を六經に求めよ」と仰せられてある、有識に問ふべき道は佛典、治を求むべきは儒教といふ風に内外相資けて南北朝から足利時代にかけても儒佛の爭ひといふものは稀れて、却て儒教は僧侶の手によりて維持せられて宋學なども五山の僧から輸入せられたのだ、德川時代になつて儒學勃興して此に儒釋の爭が盛んになつたのだが、もともと相悖るべき性質のものではなく、俱に共に善を勸め惡を懲らすので儒教に於ては君臣、父子、夫婦の三綱、仁義禮智信の五常を說き佛教に於て五戒、十善等を示し其名目は異つて居るが、人間行事の法則たる道德倫理即ち萬行を策勤して善に向はしむるにあり、善因には善果あり惡因には惡果ありと因果の

朱子は權を輕重、秤物を、拜ふなり。

なるものは往來の中にあるものなり。

人の輕重を取るなり。

顯權は明らかに以て聖人の權を示す。

權を以て實を顯す。

權は聖人の權なり。

權は實を以て權を顯す。

趣旨は聖人の所為なり。

權を以て實を顯す。

權を以て實を顯す。

權を以て實を顯す

何を爲すこと同じかどうか。書に書いてあるとおなじ治に歸すると共に文を引用したのである。

「萬行を策し惡を懲し善を勸めて同じく治に歸せしむるは即ち三教皆な遵行すべし」で、實踐道德の上からいへば儒も道も佛も同じことだが、其の善惡の根底に遡つて善だの惡だのといふ差別を離れた理想の本源に入る宗教的信仰に入つては、儒や道には充分の說明がない、即ち、萬法と世出世の心境一切を推尋して宇宙の根本原理を究め、人類本然の性を盡して行くのは佛教に於て初めて決定了畢するのであるといふのが此の論の骨子だ、例せば世間の道德は河の流のやうなもので出世間の佛教教理は其の河の源となる山頂の泉のやうなものぢや、河には其の源に泉のあるものもあり、木の葉の下露が流れ流れて河となつたものもある、源に泉があつて滾々として迸り出てゝ止むことのない河は如何なる旱魃でも涸るゝことはないが、源に泉のない河は少しの旱魃にでも涸れてしまう、實踐的なる世間道德は三教皆な同じだが佛教は其の源に泉があつて盡くることがない」のである、凡そ宗教と道德との差はこゝで、道德だけでも間違はないが、時に涸れることがある、涸れることのないのは其の水源に泉のある宗教道德でなければならぬが如く、儒教でも道教でも此の世に於て人の人たる道を盡くせといふには異論はないが、何故人の人たる道を盡くさねばならぬのか、抑も亦人の道とは何ういふものかといふと自然であるとか五常であるとかの教はあるが、さて何が故に道を盡さねばならぬか、抑も亦人は何の爲めに生きて居るのかといふ根本問題に入ると、孔子も「未だ生を知らず焉ぞ死を知らん」と云はれた如く生の從來する所、死の趣向する所に就ては何等の答辯も與へられて居らぬ、此の生死の根本を究むるのは佛教の眼目で、道元禪師も「生を明め死を明むるは佛家一大事の因緣なり」とあつて此の生死の根本を明め、さて此の生より死に移る間の人の道を示すといふのが佛教の教化であるから佛教方に決了たりといはれたのだ。

發微錄に云ふ儒生は五常を執し、道

然るに當今の學士、各々一宗を執し、佛を師とする者に就ても仍ほ實義に迷ふ、故に天地人物に於て之れを原ねて源に至る能はず。

宇宙の理や遍滿、然も一を執て他を排し、儒者は五常の外に道なしといひ、道教の徒は自然なるのみと云ひ、其の一端を執て決定了畢の所に至らず、佛教を研

流を執し自然なる因縁に迷へり、釋子は縁起を迷て性起にし執起す。

究するもの丶中でも或は業惑縁起に執し、或は頼耶縁起に執し、末に走つて本を忘れ、權を旨として第一根底の大義に味きが故に、天地人物の根本を調へても其の源に至ることが出來ない、ソコデ

余、今還た内外の教理に依て、萬法を推究し、初めに淺より深に至り、權教を習ふ者に於て滯を斥けて通せしめ、而して其の本を極め、後には了教に依て展轉生起の義を顯示し、偏を會して圓ならしめ、而して末に至る。

と、余即ち宗密禪師は内は佛典を渉獵し、外は儒道の二教を究め、萬法を推究して最初に淺薄なるものより漸次深妙なるものに入り、身を修るを主とする儒道二教より心を治むる佛教に至り、其の佛教の中でも小乘とか權大乘といふやうな權教に滯り之れに執着するものを斥けて圓通無碍なる其の本源を究め、これら不了義の教でなく了義の教に從て其の本源から如何にして展轉して此の人身を生起したかの道理を示し一方に偏よれるものを集めて根本源泉たる大圓眞理を會得せしめ漸次に天地人物の末にまで及んで說明しようとするのが本論の組織である、眞理は一なり、刮眼を開いて諸宗教の說を見れば、おもしろや散るもみぢ葉も咲く花もおのづからなる法の御姿、て悉くこれ眞理界中のものたらざるはない唯だ白露のおのが姿をそのまゝに紅葉にお けば紅の露、て其機に應じ時に隨つて彩色が違つて居るのである、本論の主旨は普く各教の理を會して悉く此の大圓眞理の中に收めんとするのにある。

文に四篇あり原人と名く。

斥迷執第一。
斥偏淺第二。
直顯眞源第三。
會通本末第四。

斥迷執といふのは儒道を習ふものの迷執を付けたので、斥偏淺は佛教の中の小乘や權大乘即ち不了義の教を習ふものを斥けた、これら迷執てはないが、言ふ所が偏とカタヨリ、淺とアサイ、終に佛教了義の教を以て直に眞理の源泉を

顯はしたのが、直顯眞源、其の次ぎに此の眞源の本と儒道の末とを通じて共に同一眞理にあることを示し、先きに斥くる所のものも見來れば同一源泉に歸することを說いたのが會通本末、此の四篇が本論の組織であります、序辯が長くなりましたが、これからいよ〳〵本論に入つて淺より深に漸次に人類の本源を究めて見ようと思ひます。

（參照）韓退之の「原人」は、古來から此の論文述作の動機となつたと云はれて居るのですから參考の爲め此に全文を掲げる。

上に形する者、之れを天と謂ひ、下に形する者、之れを地と謂ふ、其の兩間に命ぜらるゝ者、之れを人と謂ふ、上に形するは日月星辰、皆な天なり、下に形するは草木山川、皆な地なり、其の兩間に命ぜらるゝは夷狄禽獸、皆な人なり、故に天道亂れて日月星辰、其の行を得ず、地道亂れて草木山川、其の平を得ず、人道亂れて夷狄禽獸、其の情を得ず、天は日月星辰の主なり、地は草木山川の主なり、人は夷狄禽獸の主なり、主にして之れを暴(しいた)げは其の主たるの道を得ず、是の故に聖人は一視にして同仁、近きに篤うして遠きを舉ぐ。

至極簡單なもので、宗密禪師が之れを攻擊する爲めに此の原人論を作られたなどといふのは間違で、此の論文は唯だ天地同根、萬物一體の趣を云ふただけで、敢て人類の始原を求めるといふのではない、併し此の文は有名なもので、「黃氏日抄」には、原人は兩間に命ぜられて夷狄禽獸の主たり、主にして之れを暴げば主たるの道を得ず、故に聖人一視にして同仁、近に篤くして遠を舉ぐといふ、此の說已に仁の全體大用を見る、漢唐諸儒の及ばざる所なり」とあるほどですから、其の淺薄を慨して本文述作の動機となつたかも知れません。

『父母所生の身を觀ずるに、猶ほ彼の十方虛空の中に一微塵を吹く
に、若くは存し、若くは亡きが如し、滔たる巨海に一浮漚を注して起滅
從ることなきが如し　（楞嚴經）
人命は譬へば、牛を牽きて市に屠るに、牛一たび歩を運せば一歩死地
に近くが如し、人一日を得るは猶ほ牛の一歩するに、命の流れ去るが
如し　（六度集經）』

村上科註原人論による羽翼原人論にもなし

## 二、斥迷執第一

これからいよ〳〵本文、其の初めが斥迷執、斥は排斥と續き、迷は惑ふて悟らざるの義、執は固く守て移らざるの義であるから、こゝには儒教道教を學ぶ者は、僅かに其の末を見て本源を悟らず、固く守て移らざるが故に迷執と云ふたのて此章は之を排斥して自己の所信を明かすのてある。

儒道二教の說には人畜等の類は、皆な是れ、虛無の大道より生成養育すと云へり、謂く道は自然に法とりて元氣を生じ、元氣より天地を生じ、天地より萬物を生ず、故に愚智貴賤、貧富苦樂、皆天に稟けて、時と命とに由る、故に死後却りて天地に歸し、其虛無に復す。

これは儒教並に道教に就いていふのてあるが、先きの序文に於ては主として儒教に就て論じたから、此所ては重に道教に就て論ずるのてある、其の攻擊の

要點は、第一は虛無の大道といふこと、第二は自然、第三は天命といふことで、彼の儒教や道教では、人間や畜生は其の本源は皆な虛無の大道より生育したと云ふが、さて其の虛無の大道とは何ぞやと云ふに、此の虛無の大道とは、老子の「物あり混成して天地に先きだちて生ず、寂たり寥たり獨立して改めず周行して殆からず、以つて天下の母たるべし、吾其の名を知らず、之を字して道と云ふ、強いて之が名を爲して大と云ふ」と云ふのから出たので、天地の未だ出來ざる以前は混成と云ふて、前の序文に混沌とあつたと同じく、何とも形容のしやうのない物があつた、それは何時出來たとも、如何なる形であるとも云はれず、寂たり寥たりで、寂はシヅカ、寥はサビシイと云ふ意味の字である、即ち何時如何にして出來如何なる形とも云ひやうのなき或る一物、それは有るやうで無い、無いやうで有る物にして、他の萬物とは全く無關係であつて、他の物が如何に變化するとも、此の物は少しも變化するやうな事がないから、所謂獨立して、改まる事もないが、されば云ふて何の作用もないかと云ふに、周行して殆からずで、周く行はれぬ所とてはなく、他の萬物と衝突するやうな殆い事もな



司馬温公曰く、道生ず一を、一は二を生ずと、二は一となりて、有りしは無しとなり

い物である、而して天地萬物は此の物から生じたのであるから、之を天下の母と爲す、かゝる物は全體何と名くべきであらうか、流石の老子も解らなかつたと見えて、之を字して道と云ひ、強いて名けて大と云ふと云ふてあるが、之れ即ち大道を指したので、此の大道が萬物の母にして、萬物は悉く之れから出來たのであると云ふて居る、之を儒教に當てはめて見ると、無極の太極と云ふやうなもので、此の大道が物を生成養育したと云ふ事は同じく老子道德經の中に、「道之を生じ、之を畜ひ、之を長じ、之を育し、之を熟し、之を養ふ」と云ふ文句のあるのに依つたので、畢竟萬物の本源を混沌たる虛無の大道より出來たと云ふのが、此の教の主眼である、然らば如何にして此の大道より萬物が生じたかと云へば、次の文句に「道自然に法りて元氣を生じ、元氣天地萬物を生ず」と云ふてあつて、大道自然の法則として元氣が出來、元氣から天地が出來、天地から萬物が出來たと云ふ順序である、之も矢張り出所のある文句で、老子に「人は地に法り、地は天に法り、天は道に法り、道は自然に法る」とあつて、即ち道が自然に法つて出來たものが元氣であるが、此の元氣なる語も同書に「道一を生じ、一、二を生じ、

二、三を生じ、三、萬物を生ず」とある、此の一と云ふは混沌の一氣で即ち元氣である、此の元氣から天地の二が出來、二から天地人の三才となり、さて後ち漸次に萬物が出來た、此の如く自然に出來たものであるから、人間の中に愚とか智とか、貧とか富とか、苦とか樂とか、凡て天然自然に出來たもので天命の外はないと云ふ、故に論語に「死生命あり富貴天にあり」とある如く、何事も凡て自然の運命であるから、死後は矢張り元の天地へ歸つて了つて虛無の大道に歸るのである、即ち人間は虛無より虛無に歸るので、貧富といひ貴賤といふは天命なりと解釋するのが、儒道二敎の原人說であるから、其の處世論も一種の諦らめ主義で、存亡は命なり進退は時なり、時に從て進退し、命を逐ふて存亡する、故に天に安んじて憂へず、命を樂んで喜ばず、と云ふやうな諦め主義となつた、されば死後の問題の如きも頗る簡單で、天地に歸し、虛無に復すとする、そこで人間の魂魄と云ふ者も、死すると魂は天に歸し、魄は地に歸して、所謂其の本源にかへると云ふの外何等の說明も與へられぬ。彼の莊子の雜篇の中に莊子が道に髑髏に逢ふて、我れ司命の神となつて汝を活かして遣らうかと云ふと、髑髏は答へて、死は上に君なく下に臣なく、又四時の別なし、從然として天地を以て春秋となす、南面王たるの樂しみと雖も、亦之に過ぐる事なしといふたといふことが出てゐる、儒敎なり、道敎なりの生前死後に關する思想はザット此の如きものであるが、是れて果して人類の根源が究められるてあらうか、これから宗密禪師が反駁を試みられるのてある。

然れども外敎の宗旨は但だ身に依て行を立るに在りて、身の元由を究竟するに在らず、說く所の萬物は象外を論ぜず、大道を指して本とすと雖ども、備さに順逆起滅染淨の因緣を明さず、故に習ふ者は是れ權なることを知らず、是を執して了となす、今略、擧げて之を詰せん。

外敎とは我が佛敎以外の宗旨、即ち儒道二敎を指す、此の儒道二敎は、專ら身を修むるを以て事として、身の根本を究めんとするのてはない、其の證據には孝經の中に「身を立て道を行ひ、名を後世に揚げ以て父母を顯はすは孝の終りなり。」とあるものは

り」とあり、又大學には「天子より庶人に至るまで、一に之れ身を修むるを以て事とす」と云ふてある、老子も亦「名と身と孰れが親しき、身と貨と孰れが親しき」などゝ云ふて、名と貨とは害物であるから、我が身に益する所なければ、得ると捨つるとは少しも心を勞するに足らずとなし、其の仁義を說き德行を說くも、皆な身に由て行ひを立てるので、一歩を進めて其の身の根原はと問ふと、これには確かな答辯を與へぬ、故に說く處の萬物象外を論ぜずて、形のあるものゝみて、形以外即ち現象以外の無形の問題、今日の實驗觀察以外の問題に就ては何等の論及する所がない、夫れ故に大道を指して本とした處は、如何にも其の當を得た所論のやうてはあるが、其の大道から天地萬物は如何にして生じたかと云ふ順序を明にして居らぬ、佛敎ては、是等の二敎の大道を云ふのと、畧、相似て居る眞如といふものを說き、更に其の眞如から漸次に萬物を生ずる因緣を明らかにして、順逆起滅染淨の因緣を說明して居るのてある、即ち佛敎は一面から見て因緣敎とも云はるゝほどて、眞如なるものより如何なる因緣て順となり逆となり、起り或は滅し、染とケガレ、淨と淸くなつたかのことを明にするのてある、此の順逆起滅染淨の話は後に至て述べるが、兎に角儒道二敎は、原因を明らかにして、因と果とは之を說くけれども、因より果を生ぜしむる手順たる、緣の事に就て少しも言はないのてある、凡そ物の生ずるのは、原因のみに非ずして、必らず其の原因を助けて結果を生ぜしむる所の緣と云ふものがある、種さへあれば米が出來るかと云ふに其の種を袋に入れてつるして置いただけては幾年經つても稻とはならぬ、之を地に下して雨や風や土やの緣を藉らねばならぬ、此の緣の事を明らかにして示して萬物發生の順序を說くのが佛敎の他敎に勝つて居る所以てある、然るに儒道二敎は此の肝要なる緣を說かぬから、其の云ふ所が何うしても明らかてない、此の不明なるものを以て了畢の敎としては、抑、大なる誤りてあると思ふ、何となれば因を說き果を說くも、其の因と果との關係として最も肝要なる緣を說かぬからてある、儒道二敎の缺陷は確かに此の點にある。

言ふ所の萬物皆な虛無の大道より生ずとあらば、大道即ち是れ生死賢愚の本、吉凶禍福の基なるべし、基本既に其

れ常に存せば即ち禍亂凶愚は除くべからず、福慶賢善は益す可らず、何ぞ老莊の教を用ゐんや、又道は虎狼を育し、桀紂を胎し、顏冉を夭し、夷齊を禍せり、何ぞ尊と名けんや。

之れは初めの大道といふことを攻擊したので、道教等の云ふ如く萬物が虛無の大道より生ずとしたならば、生死の本も、賢愚の本も皆な此の大道に由り、吉凶禍福も亦其の本は皆な此の大道に基いて居るものとするのであるから禍亂凶愚と惡いことが起つたからとて、人力では除く事が出來ず、福慶賢善も善いことを得やうとしても之を益す事は出來ぬ、既に禍除く可からず、幸福益す可からずとせば、老莊の教理は何の爲めに設けられて居るのであるか、凡そ聖人の教は、善を積めば福來り、禍を積めば惡來り、學を積めば賢者となり、學を積まずんば愚者となると說くのが教の本てはなからうか、今禍亂も福慶も常に存して改むることが出來ないとなれば、老子や莊子の教は立たなくなるのてある、此にいふ如く大道が人畜萬物を生ずるのてあるとせば、人類を害する虎や狼の如きも大道が育ふ事となる、若し大道が之を育ふとせば、大道なるものは

論解に曰く、若し萬物皆道所生なれば、是れ乃ち愚道所爲なり、何ぞ士君子賢を尊ばんや。

甚だ不仁な者となるのてはないか、天下の萬民を苦しめたる暴君夏の桀王や殷の紂王の如きも亦大道の中に胎りして生じたものとなる、さすれば、大道といふものは頗る無道なるものてはないか、大道の不仁無道は之れに止らず、孔子の弟子中ても、賢者と云はれ、仁者と云はれた、冉伯牛や、顏回の如きが夭死して周の武王を諫めて仁義の道を說いた伯夷叔齊の如き賢者をして首陽山に餓死せしめたのも亦大道の罪とせねばならぬ、老子や莊子の教ては此の大道を宗として居るのてあるが、若し大道に此の如き不都合があるとしたならば、これ決して尊ぶに足らぬものてはなからうか、こゝに桀紂を擧げたのは一切の惡人を代表せしめ、顏冉といふたのは一切の善人を代表せしめたので、何が故に善を禍し、惡を胎生するかとの義て、何ぞ尊と名くべけんやとは老子に「尊きを道とし、貴きを德とす」とあるによつたので、今既に惡を長じ、善を棄つ何の尊貴といふことを得んと難詰したのてある、一切これ大道より生ずとし、自然に從ひ時と命とによるといふのが此の教の考へと見へる、孔子の如き聖人も、顏回の死んだ折には「天我れを喪せり」と云ひ、伯夷叔齊の傳を書いた司馬遷も、

「天道は是か非か」と云ふて居る、これ果して正しき見解であらうか。

又言ふ萬物は皆是れ自然に生化して、因緣に非ずと云はば、則ち一切因緣なき處にも悉く生化すべし、謂はく石も草を生ずべく、草も人を生じ、人も畜等を生ずべし、又生ずるに前後なく、起るに早晩なかるべし、神仙も丹藥に藉らず、太平も賢良に藉らず、仁義も教習に藉らずんば、老莊周孔何ぞ敎を立て軌則となすを用ゐんや。

之れは儒道二敎の短所の自然といふことに就て論詰したので、我が佛敎では前にも述べた如く、一切萬物は悉く因と緣とに由て生じ、此の因と緣とを離れて自然に生ずるものは無いといふのである、然るに儒道二敎にては、大道は自然に生ずると云ふが、若し因緣がなくて自然に物が生ずるものとせば、其の生長變化には順序もなく、差別もない筈で、石が草となつたり、草から人間が出來たり、人間から畜生が出來たりする事になりはせぬか、又其の出來るのにも前後なくて百花一時に開き、萬事同時に成るといふ事になりはせぬか、然るに實際は之と反して、米の種子からは必らず米を生じ、麥の種子からは必らず麥を生ずるので、犬の子は犬、人の子は人、瓜の蔓には茄子はならず、茄子の枝に瓜のなつた例はない、瓜は瓜たり、茄子は茄子たり、茄子になるには茄子たるべき因の種子と、水土人工等の緣とに依るので、米でも瓜でも其通りである、これを生物學上の言を以て云へば、因となるべき遺傳と、緣となるべき境遇との二を離れては一物として生ずるものはなく、又變化する事もない、既に因たる遺傳と緣たる境遇に依るのであるから、因のみあつても緣が熟さなければ生ぜず、如何に緣があつても因がなければ出來ない、北風肅殺たる時に當り櫻樹を見て、此の樹に花ありやと云はんか、見る所一切花はない、然らば無いと云へるか、無いものなれば、何故春になれば花が咲く、これは花となるべき因があるが、まだ機がないのだ、されば こそ陽春四月春風駘蕩たるの緣が加ふれば、爛漫として咲き出づるのである、一朶の櫻花もこの因緣を離れては別にあるのではない、古歌にも「年毎に咲くやよしのゝ櫻花、木をわりて見よ、花のありかを」と云ふてあ

民、能く名を云ふ。遷つて入る。山なり。

抱朴子曰く、黄帝九鼎を鑄て丹を煉り、丹成りて龍に乗じて昇天し、群仙の卒に遂に黄帝に服する之を以て丹を煉り、丹一名を九轉丹と云ふ。

る如く、木を割つて見れば花らしき者はないが、花たるべき因があればこそ春に至りて爛漫と咲く、其の生ずるに前後あり早晩あるのも、因はよしあつても、之れを生ずるの緣の來ると來らぬとて遲速の差がある、これは唯だ一例てあるが一切の萬物は、皆な此の因と緣とを假りて初めて生ずるものてあるのに儒道二教にありては此の因緣の道理を無視して、單に自然と云ふて居る。若し物が自然に成るものならば儒道二教も亦其の所說の根底を危くするてはないか、何故かといふに道教に於ては神仙となるを目的とするのてあるが、其の神仙になるにも、自然になれさうなものてあるに、夫れには練丹靈藥の力に依らねばならぬと云ふ、抱朴子と云ふ人の道教の書には、黄帝が丹藥を呑んて神仙となつた話があり、又清靜寡慾にして私情私慾を去なければ神仙となる事が出來ぬと云ふてある若し私情人慾を去らねばならぬとし、又丹藥の力に依らねばならぬとするならば、決して自然と云ふ事が出來ないてはないか、即ち清靜寡慾を因とし、丹藥を緣として仙となると云ふことになるのてある、又儒道二教に於ては天下を泰平ならしむるは、聰明なる君上にあり、賢良なる臣、下にあつて、道德を尊び善を行はねばならぬといふが、若し自然に成ると云ふのてあるならば、此の賢良なる君臣を要する筈はないてはないか、即ち賢君良臣と云ふ因、善政を行ひ道德を尊ぶと云ふ緣があつて始めて泰平を致すのてはあるまいか、此の點からいふても、自然といふことは其の教義と矛盾する、更に論歩一段を進めて次に仁義も亦教習を假らずになることとなるてはないかといふ、凡そ人には皆な仁義の心があるとするも、教ふる事、習ふ事がなかつたならば、其の仁義も現はれるものてはない、現に儒道二教ても聖賢の道を習學せよと云ふては無いか、よし仁義の因ありとも教習の緣がなければ如何にして、これが實現せられやう、かくの如く見來れば一事一物として自然の物はなく、皆な因緣力の然らしむる處てある、されば、こそ老子、莊子、周公、孔子等が教を垂れて、人の行くべき道を示して居らるゝので、只た之れ自然であるならば、賢者は自然に賢にして、愚者は自然に愚て何等の教育も要せぬてあらう、國の政治上より云ふも、泰平は泰平にして戰亂は戰亂、只だ自然のなりゆきに任かす外はないのてある。かくの如くんば聖賢の教も亦いらなくなる、儒道二教は決



なるて仙云々、

とある。

第一節を三神の符丹、第二節を四神の丹、第三節を五靈の丹、第四節を六餌の丹、第五節を七錄の丹、第六節を柔丹、第七節を用丹と名ふ。

仙級尚書は學ばしむる人にあり、此の人には、慾を除き心を洗ふ法を教へ、内に泊然として、無爲にして、戒を守り、尸居反觀して、其の心を說く。

論語に曰く、五十にして天人を知る、是れ生れながらの聖人なり。下民學んで上を學ぶ、是れ學上なり。之を知るは下民の學なり。之を知らざるは下民の學なり。之を知るは上の學なり。之を知らざるは上の學

五常に五行、五行に木金火水土、五德に仁義禮智信、五倫に君臣父子夫婦兄弟朋友、五官に耳目口鼻心、五味に酸苦甘辛鹹、五穀に麻黍稷麥菽、五音に宮商角徵羽、五色に青黃赤白黑、五臭に膻焦香腥腐、五藏に肝心脾肺腎

より相續したるものにして、氣を稟けて欵ち有るに非ることを知るなり、又鬼神の靈知斷ぜざることを驗せば、則ち死後に氣散じて欵ち無なるものに非ることを知る、故に祭祀して求め禱ることと典籍に文あり、況んや死して蘇る者幽途の事を說き、或は死後に妻子を感動し、怨恩に報すること、古今皆な有るをや。

今までは教理に付て難詰したのであるが此度は事實に就て之を攻擊せんとするのである、元來支那人は儒道二教に依て其の思想を養はれて、生死を以て氣の聚散であるとしながら、古來より前生の事を見たとか、死んで蘇生して死後の事を物語つたとか云ふやうな信仰を有して居る、之れは單に俗間の信仰ばかりでなく、堂々たる史傳にも其一事實が掲げられてある、今は其の矛盾を難詰するのである、前生の事を錯達するとは前生の事を錯にかけて見る如く、明にゐに知る事である、往事を追憶するとは、過ぎ去つた過去の事を忘れないて、能く覺えて居る事である、原人論發微錄には、古書に依て二三の例が上げてある、今其の中を上れば、晉の羊祜と云ふものが五才の時に突然其の乳母に向て、自分の指輪を持て來よと命じた、乳母は大に驚きて、卿は指輪を持たれたことはないてはないかと、云ふと羊祜は、東の方の垣の邊りて桑樹の間に落ちてあると云ふ、乳母が、それならば卿自から行きて探してごらんなさいといふと、羊祜は走つて隣の李氏の家に至り、垣の桑樹の間に一つの指輪を得て來た時に李氏が此の事を見て大に驚いて之れは我が亡兒のものであると云ひ其の持ち去りしを責めた、乃て乳母が此の物語をすると李氏は更に驚き悲しみて、こはこれ予が亡兒の再生なりとて其の子を請ひ受けて自分の子としたと云ふ話がある、又晉書に、鮑靚と云ふものが五才の時、父母に語て、我は曲陽の李の家の子であつたが、年九才の時、井に落ちて死んだのであると云ふたので、其の子が尋ねて曲陽の李の家を求め、之れを聞くと果して其の言の如しであつたと云ふ、かゝる例は支那の書物には澤山ある是等の事例に依て見ると生れるといふのは欵ち氣の聚つたのでなく、何物か生前より相續して來た

書經に曰く、民は常に協はず、こゝに人鬼に仁なるあり、鬼神は常に人に降す。克くこゝに人鬼に仁なるあり、鬼神は常に人に降す。克くこゝに人鬼に仁なるあり、鬼神は常に人に降す。

ものがあると見るより外はない。死後に就ても之れと同じき例が澤山にある、鬼神の靈智斷ぜざる事を驗せばとは、原人論解に「泛く鬼神を言ふ者、多くは是れ古聖先賢忠臣義士、功を後世に流し澤を斯民に被らす、正直にして無私、英靈昧まざれば山川社稷を鎮し、或は善に福し淫に禍するを司る、祀典の榮を旌し、民禱祈の應を遂ぐる者之を正神と謂ひ、其の木怪、山精、强魂、厲鬼、有り、或は人の衰耗に乘じ、或は物に附して以て道を傳へ、閭閻を恐懼し、祭禱を邀求する者、之を淫祀と謂ふ、正邪異なりと雖も皆靈知を具す、若し死して氣散ずと謂はゞ其の神なる者誰れとかなす、」とあつて、鬼神の中にも正神と邪神とあるが、兎に角死後、鬼となつて其の靈妙なる知覺が斷絶せぬと云ふ事は、史傳にいろ〳〵な話がある。死んで幽靈となつて怨みを晴らした事等は古今東西に其の例に乏しくないのであるから死んだと云ふのは彼の二教の人々の云ふ如く氣が散じて欵ち亡くなつたとする事は出來ぬ。想ふに儒教の祖たる孔子は死後の問題に就ては局外中立の立脚地を取られたと見えて、子貢が孔子に向て、死する人知あらんや知無からやんとの問ふた時に孔子は、我死して知あるとを云はんと欲すれば、將さに孝子順孫の生を妨げ以て死に事へんとを恐る、我死して知なきことを云はんと欲すれば、不孝の子の其の父母を捨てゝ葬らざらんことを恐ると云ひ、更に子貢に向て、死する者の知と知なきとを知らんと欲するは今の急にあらず、後に將さに自ら之を知る晩からざるなりと云はれて、死後の問題は後廻しとして現在に重きを置き、生前死後に付ては、何等の解說をもなされなかつたが、死者を禮拜せられんのではない、古聖先賢が鬼神を祭祀して禱りを求められたことは、經傳の中に明文があつて、書經の金縢篇に、武王が病氣せられた時、周公が冊書を作つて、太王、王季、文王の靈に身を以て武王の命に代らんことを祈られ、其の翌日に至り武王の病が頓に癒えたと云ふ事あり、禮記には、祭法祭統祭儀等の諸篇がありて、其の祭統の中に「凡そ人を治むるの道は、靈より急なるはなし、靈に五經あり、祭より重きはなし」とある。若し死後は氣が散じて欵ち無きものならば、祭祀祈禱等の必要あるべき筈はない、然るに儒道二教に於て尊ぶ所の經典にも其の文のあるを見れば、死後は氣散じて欵ち無しと云ふ事は出來ないことになる、更に事實を擧げて之を云ふなら

原人論解說は人の途説、典籍、彼、叔、釋氏、儒教、之、侍、者、を、を、を

ば、一度死んだものが蘇生して幽途即ち死後の世界の事を說き又は死後夢寐の間に現はれて妻子を感動したとか、怨に報いたと云ふやうな話が甚だ多い、古い處では、左傳の中に宣公の十五年に晉の魏武が、秦の杜回と戰ふた時、魏武の妾の父の幽靈が原野に草を結んで敵の進行を妨げ、以て娘の怨みに報したことあり、又晉の干寶が搜神記、陶淵明が搜神傳記を始め、多くの書にかゝる例が少なくない、此くの如きは單に支那のみでなく、我が日本に於ても小野篁が一度地獄へ行つて來たとか、希臘のプラトーンの書いたものの中にもエルと云ふ將軍が、一度死んで蘇り、死後の事を記憶して物語つたと云ふが如き話があり、各國とも其の例に乏しくない、併しこゝに宗密禪師が云はれたのは、必らずしも是等の荒唐不稽の事を信じて幽靈談を以て儒道二敎を攻擊せんとしたのではない、彼等が一面に獄、生獄有と云ひ乍ら、然かも他面に於ては此の如きことを信じて居るのを取て、難詰の料に供せられたに過ぎぬのである。

外難して曰く、若し人死して鬼となならば、則ち古來の鬼、巷路に塡塞して見る者あるべし、如何ぞ爾らざるや、答へて曰く、人死して六道あり、必らずしも皆な鬼となるに非ず、鬼死して復た人等と爲る、豈古來の積鬼常に存せんや、且つ天地の氣は、本と無知なり、人無知の氣を稟けなば、安ぞ欻ち起りて知ることあらざるや。

斯く論じ來れば、外敎の徒即ち儒道二敎の徒は難詰して云ふてあらう、若し人が死して皆な鬼神となるならば、昔から無數の死者の鬼神と云つたものが巷路と云ふて町や野路に充ち滿ちて居て、誰れの目にも見へる筈である、然るに見るものゝないのは如何なる譯かと、此の質問は急所を突いたやうで一應は面白いが、佛敎より云へば何んでもない、直に解釋する事が出來る、平易な質問である、しば〳〵いふ如く佛敎は生前死後に亘つて居る敎て此の三世に通じて、其の生るゝ所を天上、人間、地獄、餓鬼、畜生、修羅の六道に分ちて、生きとし生け

る者は皆な悉く鬼となるのではない、其の業因に由て或は天上、或は人間、或は地獄、或は餓鬼等と、恰も車の輪の廻はるが如くに生れ變り死に變り轉するのであると說くのであるから、人が死して鬼となるとしてもそれ切りではない其鬼又人間とか畜生とかに生れるのであるから、古來よりの多くの鬼神か、何時までも其の儘に殘るべき筈はなく、輾轉變化して止まぬのである、此の六道輪廻の事は、後に至て詳しく說くから、茲には唯だ死んで後ち鬼となるのみでないと云ふことをのみ說くに止めて置く、尙ほ一つ見るものあるべき何ぞ然らざる」と云ふて見えないから無いといふのも亦充分攻擊の價値がある、凡そ人間の見る所には限りがある、此の限りある見聞に由て出來るのが人間の智識であるから、人間の智識にも亦限りあるは當然である、此の限りある知識を以て、限りのない天地萬象の事を論斷せんとし、自己の見る能はざる事を以て直に無なりと斷じ去つて非眞理なりと排斥するのは大なる誤りである、著者は此の事に就ては別に論難はせぬが、見る事無しと云ふ例は、決して宗敎上の論議に用ゆべきものでない、今日の科學者が見聞覺知に基く經驗說に依て宗敎を攻擊するのも之れと同一筆法で、有限の知識を以て、無限の宇宙萬象を論定せんとするの誤謬より生じたのである、形而下とて見聞覺知し得べきことは經驗を以て論ぜられるが、形而上とて見聞覺知すべき形質のないものに就ては之れを用ふることは出來ない、若し有限なる形而下の經驗を以て、無限なる形而上の事を判斷せんとするものあらば、そは恰も昔噺に、伊豆の大島の人と、飛彈の高山の人とが江戸で同宿して、大島の人は太陽は海から出て海に入ると云ひ、高山の人は、山から出て山に入ると云ふて、互に自分の經驗を本として、盛に議論をして居た、すると其處へ宿屋の小僧が來たので、二人は小僧を呼んで、小僧さん、太陽は山から出て山に入るのか、海から出て海に入るのかと尋ねると、此の小僧は江戸に生れたものであるから不思議さうな顏つきで、二人を眺めて居たが、頓て、太陽は山から山に入るのでもなく、海から海に入るのでもない、屋根から出て屋根に入るのであると說明したと云ふと同じ事である、之れ自己の乏しき經驗を以て一切の事を判斷する人の誤りで、此の誤は多く目前の事に馳せて、或は山或は海或は屋根など、云ふて、却つて其の根本た

る地球が太陽を廻はりつゝあるを認めぬからである、故に只だ、見るものあるべきに如何ぞ然らざる、と云ふ難詰は毫も痛痒を感ぜぬ駁擊である。

さて宗密禪師は更に論歩を進めて、天地の氣と云ふは、本と知覺思慮のあるべきてない、人が若し此の知覺思慮なき氣を受けて、欵ち生じたとすれば、何うして人に知覺思慮があるか、天地萬物は皆な氣を受けると云ふが、草木も土石も、皆な此の氣から出來た筈てある、然し此の氣から生じた、人間に知覺思慮があるとすれば、草木にも土石にも亦之れある筈てはないかと論難せられて居る、これは儒道二教が人も草木も禽獸も等しく一氣より出たものと見て、其の間に差別を生ずる因緣を說かぬからの攻擊て、何故人にのみ知あるかといふのてあるが我が佛教の根本思想より云へば、萬物皆な心あり、一草一木として心なきものはないのてあるが、其の心といふにも差等がある、草木には人間の如き知覺思慮がないが、併し太陽の光線に向て葉を繁らし、營養分のある方へ根をはびこらすのも、全く心なき運動とは云へないが、これを以て犬や猫の行動と同じものとはいへない、犬や猫の行動には多少の知覺や思慮はあることはあるが人間のやうな完全なる意識を有して居るのてはない。先きに涅槃經を引て云たが如く多思を以て人と爲すて、人間の知覺思慮は、萬物中最も發達したるものてある、今日の學說ては、人間の肉躰が生物中最も進歩して居る如く、其の精神も最も發達して居るのて、是等は皆な久しい間の遺傳と境遇とに依て進歩し發達し來たものて、佛教の語にいへば因緣の力に外ならないのて決して欵然として人間となり草木となるのてはない、即ち同じ混沌たる一氣より生を稟けたとするも、此の因緣に由て千差萬別となるのてある、然るを唯だ忽然と云ふと、無知の氣から有知の人を生ずるといふやうな窮したことになる、今日の學說ては生物は遺傳と境遇によりて諸種の差別を生ずるといひ、佛教ては因緣力を以て人は人、草は草、木は木の區別が明らかに確立するとするのてある。

又貧富貴賤、賢愚善惡、吉凶禍福、皆天命に由ると云はゞ、則ち天は命を賦するに奚んぞ貧は多く富は少く、賤は多く貴は少く、乃至禍は多く福は少きことあるや、苟も多少の

分は天にあらば天は何ぞ平にせざるや、況んや行なくして貴く、行を守りて賤しく、德なくして富み、德ありて貧く、逆は吉、義は凶、仁は夭、暴は壽、乃至有道のものは喪び、無道のものは興ることあるをや、既に皆天に由らば、天は乃ち不道を興して有道を喪す、何ぞ善に福し謙に益するの賞、淫に禍し盈を害するの罰あらんや。

之れは天命に就て攻撃したのである、佛教では貧富貴賤、賢愚善惡、吉凶禍福、皆な天命に由るといふ儒道二教と異りて、これ皆な因緣力なりと云ふ、これ其の相違點である若し二教のいふ如く天命に由るものとしたならば、天の分け前は、貧乏人が多くて、富貴の者の少く、賤しき者多くして貴き者少く、禍多くして福の少ないのは如何なる道理か、抑も天といふものは公平でなければならぬものである、然るに多少の分ちがあるとすれば決して公平と云ふ事は出來ないではないかよし多少の分あるは致方なしとするも、それには必らず善行をしたものは貴く、惡行をしたものは賤しく、從つて德あるは富み、德無きは貧しと云ふのであるならば、尙ほ公平を欠くことはないが、實際の狀態は全然之れに反して、夏の桀王や殷の紂王の如く暴逆なる行ひを爲しながら、然かも身く、孔子や孟子の如きは、善行がありながら常に苦しみ、又齊の景公の如きは、馬千駟ありといふて金滿家であつたが死するの日は民の德として稱するものがなかつたといふ、これ德なくして富める者にして、孔門の賢者と云はるゝ顏回の如きは、一簞の食一瓢の飲、陋巷に處して貧に安んじた、之れ德ありて貧しきものである、さて又此の顏回は仁者でありながら夭死し、盜跖といふものは其の名の如く惡虐のものであつたが尙ほ且つ長命をした、このやうに道ある者が喪びて、道なきものが興れる例は、古今東西の史上に決して少なからぬ事である、楠正成は大忠臣でありながら事成らずして湊川の草の葉の露と消え、足利尊氏は逆臣でありながら生命を全うし且つ其の子孫が十三代も繼續した、これらのことを皆な天なりとしたならば、天が道なき者を興して、道ある者を喪すものと云はねばならぬ、書經には「天道は淫に禍し、善に福す」とあり、易經

には「天道は盈るを欠いて謙を益す」とあつて、自分の私情を恣にするの淫、矯り慢ぶる盈を罰し、身を慎しみ心をヘリクダル謙を益すると云ふのが、古聖の教てあるのに此の如く不道を興し、有道を喪すならば、天道の賞罰なるもの抑も那邊に存するや、實に疑ふべき次第である、佛教に於てはこれを天命なりとせず皆な因縁なりと説き其の因縁を見るも、只だ現在一世のみてなく、現在より以前の過去と現在より以後の未來とに通じ、現在に於て善を爲しながら禍多く、惡をなしながら然かも福ある如きは、悉く之れ過去の宿因てあると説明して行くから、此の問題を解決するも頗る容易てあるが、單に天命と見たのみては如何にも解決する事は難いのてある、更に論歩を進めて

又既に禍亂反逆も皆天命に由らば、則ち聖人教を設くるに人を責めて天を責めず、物を罪して命を罪せず、是れ不當なり、然らば則ち詩に亂世を刺り、書に王道を讃し、禮は安上と稱し、樂は移風と號するも、豈に是れ上天の意を奉

論語に「詩に亂を刺り、政を刺り、風俗人倫を傷なはるのは詩人の責任である」とあるのは、詩人の責任である

じ、造化の心に順するものならんや、是に知る此の教を專らにする者は未だ人を原ぬる能はざることを。

斯く何事も天命〳〵と云ふて國家の興るのも亡ぶるのも禍といろ〳〵なる天災地妖の生ずるのも、亂と暴徒一揆の起るのも反逆と謀叛人の出るのも悉く之れ天命とするならば、聖人が教を授けて禍亂反逆の起るのは、人の罪てあるとして、王者が仁ならざるが故に禍亂が起ると云ふたり、政治の方針が惡いから、反逆が生ずるといふて人を責めて天を責めず、人を罪して天を罪せぬのは、抑も當らざるの甚しいてはないか、此に物を罪すといふたのは天地人の三才を除いて、他のものを云ふたのて毒蛇虎狼の類てある、然るに聖人君子の教を見ると、皆な人を責めて物を罪して居らぬ、詩經には亂政を刺り、書經には堯舜等の王道を讃美し、孝經に、上を安んじ民を治るは禮より善きはなしといひ、風を移し俗を易るは樂より善きはなしといふ此の詩書禮樂が即ち聖人の教てあつて、聖人は實に此の詩書禮樂に由て教を設けて居ると云ふてあるが、若し禍亂反逆が悉く之れ天命てあるとせば、かゝる教を垂るゝは上天の意を

奉じ、造化（造化とは天の異名、能く萬物を造るが故なり）の心に順ふものと云ふ事は出來ない、されば其の天命といふは前後倒着の論である、如上の次第であるから、此の儒道二教に於ては、人間の根本を尋ねると云ふ事は出來ぬ、是れ唯だ現在一世だけの教と云ふの外はない、佛教の是等の教に異るのは、單に現在のみを說かずして三世に亘りて說く處にある、昔、廣瀨淡窓が、孔子と老子とが立つて、其の前に釋迦が拜伏して居る圖を畫いて、大含と云ふ和尙に贊を求めたずると大含和尙はにこりと笑ふて、孔老三世を知らず、釋迦腹を抱いて笑ふと書いたと云ふ話があるが、孔子や老子が三世を知らぬ譯もなからうが、兎に角儒道二教の徒は現在一世を說くのみに力を盡して三世に通じて詳說することがない、故に人間の根本をいふにも物足らぬ所があるのである。

（參照）已に述る如く、宗密禪師は今より一千有餘年前の御方であるから、斥迷執として論ぜられたのは、儒道二教のみであるが、今日から見ると、此の他に尙有力な原人說がある、希臘の哲學に於ても、早くから此の事に眼を注いで、宇宙の原始を說くと共に人種の始源を說いて、哲學の鼻祖と云はれたタレースは水から出來たと云ひ、アナキシマンデルスはト、アペイロンといふ固性なく際限なきものから出たといひ、此のト、アペイロンから寒暖乾濕の反對なるもの生じ、太初は濕にして寒なるものが、乾にして暖なる、火に包まれて居つたが、其の火、分裂して天躰の諸量となり、其の濕にして寒なるものは、火に照らされて蒸發し、遂に水陸分れて人類の住する大地を生じ、吾等人類も其の初めは魚介の如く水澤の中に住し、漸次今日の形體を具へて陸上に接むやうになつたのであるといひ、アナキシメネスは空氣が本だといひ、ヘラクライトスは火が本だといひ、下てエムペドクレースに至りては萬物は地、水、火風の四元素より成るといひ、生物の本は地中より手足等の個々の部分別々に生じ、後に結合して諸種の生物と成ると云、アナキサゴラスは、空中にある所の生物の種子、泥土の中に入りて人類其他の生物を生ずと考へ、デモクリトスはアトムといふ原子より成るといひ、ピタゴラスは萬物は數より成るとし、人間の靈魂に就ては輪廻轉生の說を持つて居つた、有名なソ

クラテース、其の門より出ててて更に精緻なる哲學を大成したプラトーンに至ると、其の說頗る佛敎に似通ふて、宇宙を以てイデア即ち理想の顯現とし、人も亦此のイデアより出て來りしものといひ、吾等の靈魂は未生以前より存在し、死後に至りても滅するものにあらずといひ、吾人が現世に肉體を得るのは、前生に於て吾人の靈魂がなせる惡行の應報にして、現世に於て善行を奬みなば、死後には高等の存在に入ると示す。基督敎は猶太敎の系統を引きて神を以て創造主とし、天地も人類も皆な神の造りたまひし所といひ、舊約全書創生記には、神が六日を費して天地萬物を造り最後に己れの身に模して人類を造つたことを示して居る、此の基督敎の所說とプラトーンの哲學とが抱合したのが、中世の哲學で、基督敎の神學といふものは其の時代から高尙なものとなつた、併し基督敎の原人論は、何處までも創造說で、回々敎も矢張其の原人論は、基督敎と同一系統で、す、近世に至りて科學が勃興し、ことに生物進化論の發見は、基督敎等の所謂神造說をやぶり、人類は神の特に造りしものにあらずして、他の禽獸と其の祖を同じくし、漸次進化したものであるといひ、生物の原始を以て單細胞にありとし、斯學の泰斗ヘッケルは細胞中に核を有せざるモチラ(單虫)こそ全生物の原始にして、此のモチラ分化して二となり、一はヅーモチラ(動物性無核虫)となり、一はフイモチラ(植物性無核虫)と變じ、こゝに動植物の祖をなすといふ、實驗と觀察とを事とする科學の進步は、尋ね尋ねて吾等が祖先に至り終に此のモチラに朔したりといへども、さて其のモチラなるものは如何にして生ぜしや、抑も一切生物の生命の本となるべきものは何ぞ、進化論の唱首ダーウインも、其の自著中に明言して、根本の精神的精力及び生命の根源に就ては終に何等の意見をも有せずといふて居る。たゞ近代の化學者は之れを自然の過程と信ずるの外はない。自然の過程ありと信ずるのは、其の語こそ異れ、之れを神の力なりといふと何の異る所があらう、科學の研究は精確である、此の精確なる研究によつて人類は神の特に造つたものでなく、他の生物と其の祖を同うするものだといふことは明になつたが、其の祖たるモチラは如何にして生ぜしといふ、根本に至ては未だ何等の解決も與へられぬ、それは其の筈で科學は實

驗し觀察し得らるゝ範圍に限らるゝもので、其の以外に思索を廻らして行くのは哲學なり宗教なりの領域である、此の原人論は科學以上に向つて思索を廻らしたる佛教の所說を示すので、單に其の祖を尋ねてモヂラに至り、こゝて止むものではない。併し又科學の所說に背反しては其の立脚地を危くするのであるから、超科學たるべし反科學たるべからずといふのが宗教の科學に對する態度でなければならぬ。されど此の宗密禪師は最後の會通本末に於て先きに排斥した儒道二教をも、自己の大圓眞理の中の一部分とせられて居る、今日若し宗密禪師が居られたれば、科學の所說と自己の教理に會通せらるゝことであらう、科學の原人論は其の末をいふので、此の原人論は其の本に遡るのである。

## 三、斥偏淺第二上（佛の不了義教を習ふ者）

### （一）人天教

これまでは儒道に就て論じたのですが之からいよ〳〵佛教に入るのです、同じ佛教の中でも、其の教理が一方に偏したり、且つ淺近なるのを排斥したのが此の斥偏淺で偏は圓に對する語で圓かならずして欠けたる所のあるもの、又中に對して一方にカタヨルこと、淺は深に對する語で深くない淺い事である、前の章に於て述べた所は、迷執とて、迷見に執着して居る佛教以外の教義を排斥したのであるが、今は既に佛教であるから迷執とは言はぬが、只だ淺とアサクなるのであるから偏淺といふて此の偏とカタヨリ、淺とアサク淺劣なる教義を眞の佛教と考へて居るのはこれ亦仝じく迷執と云はねばならぬ、今はこれを論駁せんとするのである。

佛教は淺より深に之くに、略して五等あり、一には人天教、二には小乘教、三には大乘法相教、四には大乘破相教（上の四は此篇）

中にあり五には一乘顯性教、第三篇中にあり

佛教は其の淺より深に至るに、大畧五等ある、而して其の第一が人天教、これは人間と天上との果報を得る方法を說いたので、佛教の門前で、まだ堂奥に入つたものではない、佛教の堂奥へ入ると、其の教に二た通りある一を大乘といひ他を小乘といふ、小乘とは名の示す如く小さな乘物で、其の教理も淺く、且つ人を悟らすと云ふ事はなくして、自ら悟ると云ふ事を目的として居るのである、大乘とは、矢張り其の名の示す如く、大なる乘物で、自分一人が悟るのではなくて、他をも悟らせやうとするのである、否な寧ろ自利よりは利他を重ずるのが大乘である、小乘が佛教の極致に至る自轉車の如きものとするならば、大乘は多くの人數を乘せて行く事の出來る汽車、汽船の如きものである、さて又此の大乘の中にも權と實とがあつて、權ばかりでまだ佛教究竟の道理ではない、眞に佛の本懷佛教の根本思想はと云ふに、そは實の大乘である、こゝには二に小乘教、三に大乘法相教、四に大乘破相教とあるが、此の三と四とはまだ權大乘の域にして、實大乘と云ふ事は出來ぬ、實大乘とは即ち第五の一乘顯性教である、此の斥偏淺では人天教より大乘破相教までを說き、第五の一乘顯性教は後の直顯眞源の所に說くのであるから、今は人天教より其の順序により小乘に入り、小乘より權大乘、此の權大乘にも法相と破相とあり、此の破相の權大乘より一乘顯性の實大乘と進んで說明して行くのである、それらの各々の區別は之れから本文に就て順次に說明するから此には畧することとする。

佛教は其の宗旨を明らかにする立場のことを、教相判釋といふ、佛教各宗開祖の其の立脚地にあつて、天台宗は一代の教を判釋して、小乘教、方等部、般若部、法華部、涅槃部の五時に居るとし、法華に家の宗旨を明らかにするに、其の立場として、小乘教、始教、終教、頓教、圓教の五教を立てるのである、

一には、佛初心の人の爲めに且く三世の業報、善惡の因果を說き王ふものなり、謂く上品の十惡を造れば、死して地獄に墮し、中品は餓鬼に、下品は畜生に墮すと。

此の一段は先づ第一に人天教を排斥するので、本文は初めに人天教の大意を叙し、次て善惡因果の道理を說明したのである、抑も此の人天教といふは、佛が初めて佛道に志したものゝ爲めに說かれたので、其の教ゆる所は實に佛教の眞髓ではなく眞實了義の教に入らせんが爲めの方便楷梯として說かれたものである、されば之れ佛、初心の人の爲めにしばらく三世業報善惡因果を說

きたまふとある、此の三世とは、過去、現在、未來を云ふのて、此の世界に於ける時間の上の區劃てある、年を以て云へば去年は過去、今年は現在、來年は未來、月て云へば去月は過去本月は現在來月が未來、日て云へば昨日が過去今日が現在明日が未來て尙ほ之を小にして見ると、一分一秒の上にも過去現在未來の三世はあるのてあり、之れを大にして見ると生れる前が過去、生れてから死ぬまては現在、死んてからが未來てす、かくの如く佛敎ては三世を說くのてすが或る學者の如きは、現在とは實になくして過去と未來の二世のみてある、世は流々變遷して一分一秒も靜止して居る事はない、されば過ぐれば過去、來らざれば未來て、現とは所謂過去と未來との交叉點てあつて、未來が漸次に近いて來て、頓て現在となつたと思ふ間もなく直ちに過去に落謝し去るのてある、と云ふて、其の區劃は立ち難いがしばらく生前死後に亘つて見て行くのが便利てす、さて此の三世に善惡因果を乘けて人天敎は立つのてあるが、さて其の善とは何ぞや、惡とは何ぞやと云ふことになると、これは、餘程難解かしい問題て、唯識論の中には、能く此の世と彼の世とを順益するを善と云ひ、此の世と彼の世とを

破相は此の中には入るる大乘莊嚴經論や起信論等の顯敎と同敎とし て居る。

論解に今中いふ、品鬼品畜生品下は主として雜論に故に、此の作すの、般若の二地に則ち以て中間を鬼畜生と餓鬼を爲す。

違逆するを惡と名くと云ふて、即ちこの世に於ても彼の世に於ても爲になる事をするのが善て、之に背くのが惡と云ひ、本業瓔珞經には法性に順ふが善、背くが惡なぞとの說もあるが、それは大乘佛敎の上の話、こゝては解し易く具體的に十事を擧げて善惡の標準が示してある、一體吾等の善なり、惡なりを行ふのは身て行ふか、口て言ふか、心て思ふのてす、そこて此の三つに就て身に三つと、口に四つと、意に三つとある身に三とは殺生と偸盜と邪婬、口に四とは、惡口と兩舌と妄語と綺語、意に三とは貪慾と瞋恚と邪見とてあつて、之を合せて十惡と云ひ、此の十惡を犯さゞるを十善といふ、此の十善は、天然自然の道理に由て、宇宙の大法に順ふたものて彼の本業瓔珞經の中には、法性に隨順して心を起すを善と云ひ、法性に違逆して心を起すを惡と云ふとある通り、法性自然、即ち吾等の本來受け得た所の心の性に順つて行くのが此の十善て本來生得の心の性に背いて行くのが十惡といふのてす、先づ第一に殺生と云ふ事に就て見るに、吾〳〵人間其の他一切の動物は、生存の欲望と云ふものがあつて、殺されることを嫌ひ、生命を惜しむといふことがある、已に自分の生命が惜しいと

云ふ事が本來の性ならば、凡そ生きとし生けるものは皆な生命が惜しいと云ふ事は知れきつた事である、されば其の本來惜しむべき生命をとる殺生は、法性自然に違ふて居る惡なることは云ふまでもない、次ぎの偸盜とは、偸も盜もヌスムと云ふ字で他人のものを奪ひ去ることである、これも亦た云ふまでもなく、吾々には本來所有欲と云ふものがあつて、自分のものを他人に奪られるのは厭やである既に自分のものを奪られるのが厭やであるならば、他人のものを奪るのが理に背く事は勿論である、今一つの邪婬とは、邪はヨコシマで、婬は男女の交接である、男女の關係は人倫の大本であるから、正しき夫婦の關係を正婬と云ひ、此の正婬に反對して、他人の妻女に對して猥らな行ひのあるのを邪婬と云ふのである、其の惡たるとは別段說明するまでもなく、自分の妻を盜まれ、自分の娘をきづつけられては、誰れも快くないのが人の情であるならば、他人の妻女を辱かしめる事の惡いと云ふのは、今更繰り返す程の事もあるまい、これだけが身三であるが、口は禍の門とも云ふ程あつて、四つある、第一に妄語とは妄はミダリといふ字であり、もせぬことをあるやうに、あることをないやうにいふたりして他人を欺き僞る事で、惡口とは人を罵り誹る事、綺語とは何の役にも立たぬ惡洒落を云ふ事で、慈雲律師の十善戒略說には、

不綺語戒世にかる口と云ふもの是れなり、例を擧げて云はゞ、時鳥の歌に、「唯有明の月ぞ殘れる」と云ふは語正なり、其れを世の俳諧者流が「ひと聲は月が啼たか時鳥」と云ふが如きは綺語なり、此綺語は大人の德をそこなひ、天地の道にもそむくなり、天地の道にたがふが故に綺語の人は世に在て其身に幸ひなきためしなり、其れも小臣侍女の戯れ猿樂などを見聞するは咎なし、唯だ戯れに過ぎぬを要とすべし、萬國尊重し其勅詔に違ふことなき、此戒の德なり、

とある、兩舌とは、俗に云ふ二枚舌を使ふと云ふことで、人と人との間を離間したりするのは、多く此の兩舌によることである、これらの惡いことも亦說明を要しない、次ぎに意に三つとは、第一に慳貪とて、慳はオシム貪はムサボルで自分の氣に入つたものを猥りに欲しがつて執着を起す事で、此の貪慾が本となつて偸盜や邪婬も起り、甚しきは殺生などすることになるのである、次に瞋

悪とは、瞋も悪もイカルといふ字で自分の氣に入らぬ事に對して、徒らに腹を立てる事で、諸種の罪惡これより生じ或は惡口ともなり殺生ともなる第三に邪見とは、物事の道理を正しく會得することの出來ぬのを云ふのである、以上は十惡であつて之に反對す此の十惡を犯さぬのが十善である、されば何人も守らねばならぬ戒法として不殺生、不偸盗、不邪婬、不妄語、不惡口、不兩舌、不綺語、不慳貪、不瞋恚、不邪見の十善戒といふものがある此の十善十惡にも、上品中品下品の三つがあつて、品とは品等の品の字で、上等中等下等と云ふのも同じ事である、惡から云ふと、同じ人を殺すにしても、自分の父母を殺すは上品の方で通常の人を殺すは中品、畜生などを殺すは下品であると云ふやうに、これは境に約すと云ふて、相手に付て云ふたのであるが、心に約しても、非常な惡念を以てなしたのが上品で、ふとした心でやつたのが下品、其他が中品と云ふやうにも云へる、兎に角上中下の三つがあつて、其の上中下に就て各々其の結果として受ける業報が異なるのである、業とはシワザで、英語のアクションと云ふやうな意味、報はムクヒ即ち結果である、されば上等の十惡の行爲――業――を造れば死んで地獄へ落ち、中等のものは餓鬼に趣き、下等のものは畜生へ墮ちるのである、と說くのが此の人天教の說だ、さて茲で其業報たる地獄、餓鬼、畜生の事に就て少しく說明せねばならぬ、地獄は梵語で那洛迦と云ひ、漢譯して苦器又は苦具と云ふので、われ〳〵衆生が惡業の結果として種々の苦業を受けるの苦具と云ふ事である、凡そ是等の地獄とか天上とか云ふことは、釋尊が新に說き出されたのではなく印度在來の說であるのを、便宜上借り用ゐて敎理の說明に交へられたので、印度に於ては地獄とは地下四萬由旬の所にあるなど〻云ふて其の數、一百三十六、あつて皆な罪の大小輕重に依て、落ちて行く處も異なるのである、而して其の最も下にあるのが無間地獄で、これは大惡人の趣く處、即ち火の中にあつて無量の苦を受けると云ふのである、惡臭を嗅ぎ、五體は爛れて、骨肉は挫け、毒蛇に噬まれ獄卒に責められ、山に推され石に打たれ、劒に貫かれ熱湯に煮られ、何億萬年と知れぬ長い間の大苦惱を受けると云ふので、苦の最も甚しい處を形容したのである、餓鬼といふのは、鐵圍山の間なる日月の光の見へざる處に住んで（此の鐵圍山の事は後に詳しく說明する）

一由旬とは六町に四十里程にて一里に當るといふ

食を得ることが出來ないて苦しんて居るのてある畜生とは、お互に目に見る事の出來る禽獸虫魚のことて、互に相呑噬して爭ふて居る境界てある、此の三つは三惡道といふて苦しい所て、極惡のことをしたものは此獄に落ち、中等なのが餓鬼、下等は畜生に墮ちると說いたのてあるが、何にも之を地下四萬由旬とか、鐵圍山の間の日月不到の處とかに求めるには及ばぬ。行誠上人の歌に、

恐ろしき地獄の底の鬼とても
おのが吹きだすものと知らずや、

とある如く、恐痴の最も强烈なるものが地獄て、貪慾の念盛にして心に少しも安樂のないのが餓鬼、互に相爭ふて瞋恚の念禁じ難いのが畜生と見れば此の三惡道を何にも遠くに求むるに及ばぬ、吾等の心一たび迷へば其の中に直に此の三惡道を現ずるのてある。香樹院語錄に面白い話がある、幕府の儒官林大學が香樹院上人に遇つて地獄は實にありやと問ふた、其の時、上人は必ずあることなしと答へた林が曰くそれては自語相違てはないかと、いふと上人は罪なきものには此の世の獄屋もなし、罪の輕重によりては無量無邊の地獄あ

三途、地獄は火途、餓鬼は刀途、畜生は血途なりといふ

りと地獄の如きも亦實に自己の罪惡より造り出すのてある、此の道理を心に入れて、佛敎を聞かんと大いなる誤を生ずるのてある。

故に佛且く世の五常の敎に類して、五戒を持たしめ、三塗を免るゝことを得て、人道の中に生ず。

註。天竺の世敎の儀式は殊なりと雖も、惡を懲し善を勸むることは別なし、亦仁義等の五を離れずして、而も德行の修むべきあり、例せば此國は手を斂めて擧げ、吐唾は手を散して垂るゝも皆禮となすが如し、不殺は是れ仁なり、不盜は是れ義なり、不邪婬は是れ禮なり、不妄語は是れ信なり、酒肉を飲啖せざれば神氣淸潔にして智を益すなり。

吾々人間と云ふ結構なる果報を受けて居りながら、自ら惡業をなすが故に地獄餓鬼畜生の三惡道に生ずるので、佛は如何かして此の苦患を除かしめ、人の人たる人を正しく行はしめんが爲めに世間の敎と同じやうに五戒と云ふものを立て、之をさへ守れば三途(三惡道のこと)を免れることが出來ると示されたのてある、世間の敎即ち支那の儒敎に於ては、仁義禮智信を以て五常と云

ひ、人の常に行ふべき所と示してある、今や佛教には在家の戒法としては常に五戒といふことを說く其の五戒の第一は不殺生戒とて、一切物の命をとるまいと云ふ戒め、之れは消極の方から云ふたのであるが、更らに積極の方から云へば、生あるものを哀れみ救ふと云ふこと、即ち儒教で云ふ所の仁、第二が不偸盗戒他人のものを私に奪るまいと云ふ戒めて儒教の所謂義に當る、義は宜なりて、各々其の分を守り、敢て他を犯さゞるの意である、第三は不邪婬戒て、凡そ他人の婦女を犯すまいとの戒て、夫婦は人倫の大本、これを擧げて一切の禮を立てたのて第五は不妄語戒と云ふて、虛僞を言はぬと云ふ事て、其の裏は眞實を語れと云ふ事になる、之れ即ち儒教の信、以上の四は人間の本來具ふる處のものであるから、之を名けて性戒と呼び、第五は不飲酒戒て、酒を飲むものを戒めたもの、酒は酒其物に害はないが、之を飲んて智慧を昧まし、遂に心を昏迷せしむるから戒めたのて、之を遮戒と云ふてあるが、此の不飲酒戒は即ち智て五戒と五常とは、其の名異にして其の義も必らずしも一つてはないが、大體に於ては同一てある其の異るのは所が變り、時代が變るにつれて變化を免れぬのて宗密禪師は自註の中にも、天竺の世教儀式異なりと雖も、惡を懲らし善を勸むるに至つては異なる處なし云ふて、天竺に行はれて居る世間の教は、其の儀式は多少支那とは異なつて居るが、其の惡を懲らし善を勸むるといふ大主意に至ては異なることなく、何れの國に於ても同一てある、此仁義禮智信を離れて外に決して德行の徵すべきなく、五戒を持たないては三途の苦を免るゝことはない、德行とは心に五常を守りて失はぬのが德て、身に行ふのが行てある而して其の本義は同じいが、其の形式の變るのは、例へば支那に於ては手を歛め拱いて上に擧げるのを禮式とするが、吐蕃と云ふ國て（今の西藏なり）は手を散らして下に垂れるのを禮としてある、これは一例を擧げたのて世界各國に於ける禮式の如きは異樣異種て野蠻人の中には鼻と鼻とを合すのを禮としたり後に倒れるのを禮とする等のこともあるこれらの形式は一てない、所變れば品異るが其の根本に至つては皆な同一て、ある宗密禪師は之れをいふて、五常と五戒とを合せ、不殺生は是れ義なり、不邪婬は是れ禮なり、不妄語は是れ信なり、酒肉を飲噉せざれば神氣清潔にして智を益すなり、

吐蕃は今の西藏地方なり

といふたのである、

上品の十善、及び施戒等を修すれば、六欲天に生じ、四禪八定を修すれば、色界、無色界天に生ず、故に人天教と名く。

註。題中に天と鬼と地獄とを標せざるは、界地同じからずして、見聞及ばざれば、凡俗尚ほ末を知らず、況んや背て本を窮めんや、故に俗教に對して且く原人と標せり、今佛經を叙すれば理宜し具に列すべし。

此の話をするに就ては、一寸須彌山の事を話さねばならぬ、此の須彌山は印度の古い地文説で、釋尊は此の地文説を應用して説明せられたのであるが、須彌山とは梵語で蘇迷盧と云ふて、金、銀、瑠璃、水晶の四つの寶を以て出來て居る山で其の高さが八萬由旬と云ふ事であるから、我が國の里數にすると、三百二十萬里だ此の山の周圍に七重の金山があつて、これを七金山と云ひ、一々の山の間に七重にめぐりて、香水の海があり、七金山の外圍に大鹹水海とて鹽水の海があり、此海の外圍に鐵圍山と云ふ山がある、此鐵圍山と七金山と須彌山とを九山と云ひ、香水海と大鹹水海とを八海と云ひ、合せて九山八海と云ふ、さて此の大鹹水海の中、須彌山七金山の四方に當りて四州とて四つの國がある、此の四州が即ち人間の住所とし、東を弗婆提州、南を閻浮提州、西を俱耶尼州、北を鬱單越州と云ふのて、われ〳〵の住むてをるのは此の南閻浮提てある、此の須彌山の半腹に四王天あり、東が特國天、西が廣目天、南が增長天、北が多聞天て、これを天上界の初りとし、この四王天の上が忉利天て、これが三十三天に分れて居る、其の中央が帝釋天の居る所て其の四方に八天づゝあるから、四八三十二天これに中央の帝釋天を加へて三十三天となるのてある、此の三十三天並に四王天は未だ須彌を離れぬのてあるから之れを總稱して地藏天と云ひ、これより上の天を空藏天と云ふ、元來天と云ふのは、婆娑論に「光明照耀の故に天と名く」とあるのて、こゝに光明と云ふのは智慧の事てあるから智慧の光が明らかて人間のやうに闇黒てないと云ふに外ならぬ、それてあるから四王天の境涯ては未だ全く愛慾を捨てたのてはないが、人間より餘程薄くなつたのてあるさて其の上の三十三天の境界ては精神上の愛情は未だ全く去る事は出來ぬが、肉欲は全然ないと云ふ、空居天の方は虚空の中にあつて彼の日月の下界

を照らすが如くに、われ〳〵人間を指導してをる境涯で、此の一番下なのを夜摩天と云ふので、欲境に逢ふと暫く婬を行する事あるも、これに執着するやうなことはない、其の上が兜卒天で、これは精神が清淨で婬心などは起さぬが未だ全く避けて了うといふことは出來ない、其の上が化樂天で、これは自身には決して婬欲はないが、他から誘惑せられて思はずも行ふことがあるといふ其の上が他化自在天で、世間の心はないが、世に同じて事を行ふので、婬心の如きは了然として超然して居る。以上、四王天、忉利天(三十三天)、夜摩天、兜卒天、化樂天、他化自在天の六つは欲情は薄いが、未だ全く脱することが出來ぬから、これを欲界の六天と云ふ、此の六天、欲界に屬するとは云ふものゝ、欲情が少ないから心清らかにして福樂である。さて此の六欲天に生するには如何にするかと云ふに、上等の十善を作さねばならぬ、善にも矢張り惡の如く上中下の品等があつて、下品は修羅に生れ、中品は人間に生れ、上品は天上に生れるのである、修羅とは梵語で阿修羅で、常に猜忌の心を以て相爭ふ境界に、昔の印度人の信仰によると、須彌山の東西より一千由旬の外にあるとか、大海の下二萬一千由旬の所にあるとか云ふが、兎に角高慢の心のものゝ越く所としてある、優陀那日輝上人の佛法大意抄に、「人ありて仁義五常を行ふとも、たゞ他に勝らんことを欲し、嫉妬、自慢、自大、高舉の心つよきものは此道に落るなり」とあるのでも明らかである、今ま人間以上に生れるには、上品即ち上等の十善と施戒等とあるのは布施持戒忍辱精進禪定智慧の六波羅密、及び其の他の善行を總稱したので、布施とは施し合ひ、持戒とは佛の戒律を保ち、忍辱とは忍はシノブ辱はハヅカシメ辱しめを忍ぶ即ち忍耐のことである物事を耐へ忍び、精進の精はクワシク進はスヽムで今の言ていへば努力勉强すること、禪定と心を靜める事、智慧とは正しき知見を開く事で今日の語ていへば布施(博愛)持戒(規律)忍辱(忍耐)精進(勉强)禪定(靜慮)智慧(智識)の六つこれは凡夫より悟の岸に至るの要具として之れを六波羅密といふて居るのである、此の六波羅密等を修すれば六欲天に生ずるのである、此の六欲天の上に尙ほ色界と無色界とがあつて、色界とは欲情が少しもなく、全く外界の爲めに心を動かされない境界で、無色界とは最早や世の中の道理を明らめて無想の地位に達したので、色界には尙ほ肉體がある

四禪（以上色界）
一有こと界善對二無欲善し欲界と何に治のれ惡は法す無の靜の對ず離び任て生離の靜三をし靜慮に慮苦樂忘樂れ至な界あに樂苦樂四み離の靜慮に慮喜樂樂に樂苦樂樂樂喜樂樂樂

業不動業とは、四禪八定の如き禪定の業を指したのである、其の名けて不動といふのは、善業とか惡業とか云ふのは、其の心が散らついて居るけれども、四禪八定に至つては實に不動であつて散らつくやうなことはないからである。さて此の業の結果を受けるのには其の時間によつて三種に分つことが出來る三種とは現報と生報と後報とで、現報とは現世に於て善若くは惡を爲し、直ぐに現世に於て其の報を受けるのである、世間の人が因果といふことを常に此の現世のみと見るものであるから説明の出來ないことも多いのであるが佛敎は前さにいふ如く三世を通貫して此の因果を説くのであるから今生に善惡をなして、今生では其の果を受けず來世に其の報を受けるのがある、之れを生報と云ひ、今生に善惡の業を造つて、今生には勿論、來世にも其の報を受けずズット後ちに至つて其の報を受けるのがある、之れを後報と云ふのである、此の三時の業報のことは何にも生前死後にのみ考へるに及ばぬ現在吾等が日常見聞し得る例に於て考へて見ても容易に其の理を知ることが出來る譬へば酒を呑んで直ぐに醉ふのは其の結果が直に見へるから其の時には何とも

大實積經に曰く、假令百劫を經るとも、作すべき業は、亡失するの所なし、因緣の時節、過去の果報、自ら受くと。

なく明日になつて、二日醉をするのは先づ生報のやうなもので、若い時から酒を飲んだ結果、年老いてから中風などになるのは後報と見ることが出來る、此の如く其の報を受くるに遲速はあるが、一旦爲したる業は必らず其の果報を受ざることは出來ない。今、人天敎では現在の我が身を以て過去の業因の結果とし、之れを以て身の本として議論を立てるのであるから、單に天命とか自然とかなどゝ云ふて居たのよりは高尙であるが、まだ之れを以て人身の根原を究め盡くしたとは云へぬ、されば之れを詰つて、

今之を詰りて曰く、既に造業に由りて、五道の身を受くるとならば未審し、誰れ人か業を造り、誰れ人か報を受くるや、若し此の眼耳手足能く業を造るとならば、初て死するの人は、眼耳手足宛然たり、何ぞ見聞造作せざるや、若し心が作ると言はば、何者か是れ心なるや、若し肉心と言はゞ、肉心には質あり、身內に繫がる、如何ぞ速かに眼耳に入て、

外の是非を辨ぜんや、是非知らずんば、何に因て取捨せん、且つ心と眼耳手足とは、俱に質閡をなす、豈に內外相通じ、運動應接して、同く業緣を造ることを得んや。

既に業に依て人間、地獄、修羅、餓鬼、畜生等の五道の身を受くるとならば、誰れが業を造つて誰れが其の報を受くるのであるか、若し此の眼とか耳とか手とか足とかゞ業を造るのであるならば、今死んだばかりの人には、眼も耳も手も足も其まゝにあるではないか、其儘にありながら見ることも出來ず聞くことも出來ず動くことも出來ないのは如何なる理由であるか、手や足や目や耳が造るのでない、これのものを伴ふ心が造るのであると云ふならば、其の心とは如何なるものであるかそれは人間の體內にある肉心であると云ふが、若し肉心といふならば、それは形があつて體の中にあるものである、形のあつて體內にある者ならば何うして眼や耳に入つて外界の善し惡しを辨別する事が出來やうぞ、之を辨別する事が出來なければ、何うして善を取り惡を捨てる事が出來るか、全體佛敎て心を說くのには、三通りあつて、一に肉團心と云ひ、之れが

肉團心とは五臟のことなり
緣慮心とは中央八識なり
八種心とは八識のことなり
三集起心とは三識なり
四阿賴耶識とは粗心なり
如來藏とは眞心なり

今云ふて居る肉心て、父母所生の此の肉體の中にあるもの、二には緣慮心、三には堅實心と區別して其心を說くのは非常に高尙て且つ緻密てあるが、今は暫く普通の肉心のみ丈けを擧げて、肉心は體內にあるのてあるから、目や耳や手や足とは互に質閡と形のあるのてあつて別々に相隔たつて居るてはないか、其の隔てたるものが何うして相通ずるか、殊に眼耳手足は外に現はれて、居つて心といふものは內にあるのてある、此の內にある心と外にある眼耳等とは、何うして互に通じ合ふて運動應接して業緣を造ることが出來やうぞ、と一應揶揄したのてある、

若し但だ是れ喜怒愛惡、身口を發動して、業を造らしむと言はゞ、喜怒等の情は乍ち起り乍ち滅して、自ら其體なし、何を將て主となして、業を作るや、設し、此の如く別々には推尋すべからず、都て是れ我が此の身心、能く業を作るものなりと言はゞ、此の身已に死せば誰れか苦樂の報を受

質閡とは隔てゝ同じ物質に阻つて通ずるなり、閡とは止るなりとあり。

くるや、若し死後に更に身ありと言はゞ、豈今日の身心、罪を造り福を修して、他の後世の身心をして、苦を受け樂を受けしむることあらんや、此れに據らば則ち福を修するものは屈甚だしく、罪を造くる者は幸甚だし、如何ぞ神理此の如く無道なるや、故に知る但だ此教を習ふ者は業緣を信ずと雖も身の本に達せず。

イヤ其のやうな物質的の肉體的の心てなく、主觀的の喜んだり怒つたりすることが本となつて、それが身や口などを動かして業を造るのてあると云ふかも知れないが、此の喜んだり怒つたりする情は乍ちに起り、乍ちに消えて、今怒つたかと思へば直ぐに笑ひ、笑ふかと見れば直ぐに悲しむと云ふやうに常住不變の本體といふべきものがない、其の本體がなければ何が主となつて業を造くるのてあるか、イヤそんなに別々に尋ねては困る凡て此の身と心とが一結になつて業を造るのてあると云ふてあらうが、然らば現在此の世に造つた業の果報は、此の身が死んて了つたならば、誰れが受けるのてあらう、それは現在の身のみてなく、死後に於て未來の身を受けて生れ變るのてあるから、其の生れ變つた身が受けるのてあるといふてあらうさすれば此世に於て善をしたり惡をしたりしたものが其の身に死んて未來に受けた身や心が苦樂を受けると云ふことになつては、何んだか自分と違つたものが結果を受けるやうに考へらるるてはないか、此教理に依る時には、福を修するもの屈すると甚しく、罪を造るもの幸ひ甚して此の世て善をなし乍ら死して、生れ變つた他人が其の樂報を受け罪を造つたものが死んて生れ代つた他人が苦報を受くるといふことになつて、福善を修したものが損し罪惡を犯したものが幸ひとある、即ち我が身が今日福善を修しながら後世未來の他の身が其果報を受けるとすれば、福の仕損になり、今日我が身が罪惡を造つても、來世には他人が其罪の果を受けるなれば、ツマリ罪の造り得惡のし得になるてはないか、神明の道理は決してそんなに無道なものてはなからうそれ故に此の教を習ふものは業緣といふことは解つたが、まだ人身の根本に達したと云ふことは出來ない

發微錄に曰く、人天三乘の次は世の業緣を信ずと雖も、惡業より惡を知らず、此れ身の本ざるにして、次の小乘の教は、此の惡を說く

と排斥したのである。

## (二) 小乘教

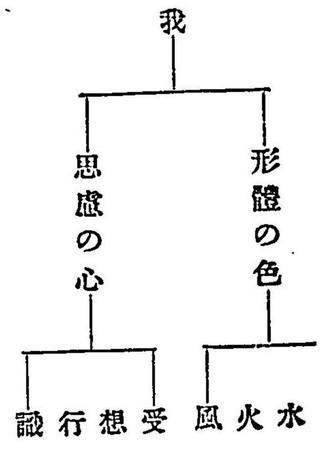
二に小乘教とは、説く、形體の色、思慮の心、無始より來た因緣力の故に、念々生滅し、相續して窮りなし、水の涓々たるが如く、燈の焰々たるが如し、身心假りに合して一に似たり常に似たれども凡愚は之を覺らず、執して我となす。

さて次ぎの小乘教では人間の身體と云ふものは地水火風の四つから出來て居ると云ふ、地と云ふのは堅いと云ふことを代表し、水と云ふのは濕と云ふ事を代表し、火と云ふは煖と云ふことを代表し、風と云ふのは動くと云ふことを代表して居るので、これを堅、濕、煖、動といふ、此の四つは何物にもあるが、我〳〵の身體に於ても亦此の四つある、即ち骨や肉のやうなものは堅、血や汗のやうなのは濕、躰温のやうなものは煖、呼吸のやうなものは動、それを代表させて地水火風といひ、此の四は何れにも行き渡らぬことがないから、大と名けて四大と云ふのである。此の四大が假りに和合して吾人の身體と云ふものは出來たので、此の四大の元素を除いて別に我と云ふものはない、

よしもなく地水火風をかりあつめ
我と思ふぞおろかなりける

て、あるべからものをあると思ひ、此の四大假和合の中に常一主宰の我ありと思ふのは吾等の迷執に過ぎない、生理學者の説に依ると、人間の身躰は七年目毎に全く變化して了ふと云ひ、化學者なども人間の身體は元素と元素の集りに過ぎないと云ふてはないか、否な單に人間の身躰のみてはない、天地萬物は悉く原因と之を助くる事情即ち緣とによつて出來たもので、因緣を離れて外に何もあるべきてない、維摩經には「因緣の法、我なく人なく衆生なし」と云ひ、又「この身泡の如し、久しく立つを得ず、是の身幻の如し顚倒より起る、此の身夢の如し、虚妄より生ず、此の身影の如し、業緣より生ず」などゝある。即ち天地萬物、は因緣の假和合、これを離れて何の求むべきてない、これは眼に見ゆる肉體ばかりてない、眼に見えない心といふものを、穿鑿しても先きに云ふた所の肉團

心は形質のあるものであるから勿論四大の和合してあるが、無形の心も受想行識の四つより成つて居るので受とは領納の義で、ウケル、オサメルと云ふ意であるから、眼で色を見、耳で聲を聞き、鼻で香を嗅ぎ、舌で味ひ、身で觸れた所を心に受け込む即ち感覺の作用である、想とは思想の義でオモフと云ふ意味、即ち受けた事を美だの醜だのと思想するのである、行とは遷流造作の義とあつて、思想したことに就て、身を動かし口を動かし、意を動かしてゆくのを云ふので、決意決心して行くも之れに含めることが出來る、識とは了別の義で、眼で見、耳で聞きしたことを一々分別してゆく認識的作用を云ふのである、詳しくいへばわれ〳〵の心には諸種の作用があるが、其の主なるものを擧ぐれば此の四の集りてある、これを肉體の色を加へて色、受、想、行、識の五蘊といふ、蘊は積集の義とあつてアツメルと云ふやうな意だ、又五蘊のことを五陰と書くこともあるが、陰は蓋覆の義でツヽムと云ふやうな意である、兎に角、我々の身心は此の五のものから組織せられて居るもので、我と云ふのを圖表すれば




四大は一切無生、染以來種種顛倒迷惑の人、猶四方流易し、如妄を認めて自身の塵を自己の心の六塵を相と爲す

てあつて、斯う云ふものゝ集つて假りに生じたものであるから、別に我といふ一つのものゝ存在して居るのではないと說くのが此の敎の主意である、昔支那の有名なる學者で且つ文章家であり詩人であつた蘇東坡が、金山寺の佛印禪師の處へ往つた時、禪師は恰も多くの弟子たちに入室と云ふて、一人々々に室內へ入れて其人〳〵の悟りの見解を言はせて見る、早く言はゞ秘密に試驗するやうな事をして居られた、そこへ、何の室內もなく東坡居士がヅカ〳〵と入るから、禪師は突然「此間に貴官の坐處なし」、この室にはお前さんの坐る所も腰を掛ける物もないぞ」と云はれた、すると東坡居士は「且つく和尙の四大を假

りて以て禪床となさん」、宜しい別に坐る所も腰をかける所もないならば、貴僧の身體を其の儘拜借して椅子にても蒲團にても致しませう」と云ふと、佛印禪師は、「話頭を一轉し貴官の結めて御座る玉帶は誠に結構な品と見受けるが、拙僧が今お前さんにお問ひ申したい事がある、若し其の答を滿足にすれば好し、若しも答が出來なかつたならば、其の玉帶を拙僧に渡すと云ふことにして貴いたい、さすれば拙僧はそれを當山の什物にしやうと思ふ」と妙な相談を持ちかけた、乃て東坡居士は委細承知とばかりに玉帶を解いて机の上に置き、サア何んでも御問ひなされと構へた、時に佛印禪師は、「山僧四大本と無し、五蘊有に非らず、何を以てか禪床となす、即ちお前さんは私の身體を坐り場所にすると言はれたが、私の身體は四大五蘊の因緣が假りに和合したもので、畢竟其の本性實體のあるものではない、然るに貴官は此の色受想行識の五蘊、地水火風の四大和假合にして其の本性實體の無いものを何うして座り場所とする事が出來るか、サア其道理を速に答へて見よと問はれた、時に流石の東坡居士も頓と答へる事が出來ず、口をムヅ〳〵さして居ると、其の中に佛印禪師は笑つて侍者を呼び、「此机の上にある玉帶を持つて往つて當山の什物とせよ」と云はれたと云ふが、これは四大五蘊のこと說明するに面白い話だ即ち形體ある此の身體も、いろ〳〵に思慮する此の心も別にあるのではなくて、無始の昔から因と緣とのかけ合せて出來、此の因緣の力に依て、前の四大と後の四大と移り變り、心の方でいへば前念が滅ずれば後念が起り、起りては滅し滅しては起ると云ふやうに、我が心は念々に生じては滅し、滅しては生じ、何處までも續いて行くので、心理學者の所謂意識のプロセス (Proces) で、恰も水の流れのやうに極まり盡くる處がなく、我が身體を組織せる物質も、一日一時も同じ姿はなく、生滅變化して極まる所はあるものでない、それを水の涓々たるが如く燈の焰々たるか如しと云ふたので、涓々とは流注して絕えざる貌、焰々とは火の燃ゆる姿である。

一體佛敎に於ては其の根本思想として、萬物は變化するといふことをいふので、之を諸行無常の語を以て現して居る、諸行とは諸はモロ〳〵行は遷流の義で變化といふこと無常とは常無しで、常に變らない相とてはなく、時々刻々變

化するものであるといふ義で、これは萬物に通ずるのであるから我が心身とても此の理を外れず變々化々し行くもので、昨日の我れと、今日の我とは其の心も身も同じものでないとする。此の立脚地から云ふても何處にも我れといふものゝあるべきはない、昔希臘のヘラクライタスといふ哲學者は、足を川の流れへ投じて、初め足を投ぜし時の水は既に此の水に非ずと云ふたといふことがあるが、諸行の無常なるは其通りに一瞬一刻も常の相はない、それを同じ水と思ふて執着して居るやうに、身も心も變化するのに、それを常住不變の我があるやうに執着するのが吾々の迷執である、此の諸行無常と云ふことは二通あつて、一を一期無常と云ひ、一を刹那の無常と云ふ、一期の無常とは、生きて居るものが死ぬ、出來たものが潰れると云ふやうに時間的に區劃したのをいふので、刹那無常とは、一刻一瞬の其の間にも少しも變化せぬと云ふことはない時々刻々死の運命は近づきつゝあるやうなもので、小野小町が

面影のうつらで年のつもれかし
たとひいのちに限りありとも

諸行無常
諸法無我
涅槃寂靜
を以て佛教の三法印とし、他の宗教と異る標とする

と云ふても左う都合よくはゆかぬ、朝の紅顏は夕の白骨となつて、面影も刹那々々に變化して行く、刹那と云ふのは極く僅少の時間を云ふので、毘婆舎論の中には、一晝夜の間には六十四億九萬九千八十の刹那があると云ふ、此の極く僅かな刹那の間といへども、常住不變のことはなく、生あり滅あり變化しつゝあるので丁度蠟燭の燈火に譬ふれば、其の蠟燭の盡きてしまうて火の消ゆるのは一期無常であるが、其の燈火は一刹那たりとも同じのではない、前のが滅して後のが出來、後のが滅して又後のが出來前滅後生前滅後生と相續してゆく、其の相が速かであるから一つの燈火の塊りがあるやうに思ふのであるが、其の實、燈火といふ實體があるのではないこれを刹那無常と云ふ、かくの如く天地萬物は悉く時間的に變化して決して常住不變のものがあるのではないと云のが諸行無常の道理である、諸行無常の方は時間的にいふのであるが更に空間的に見れば、已にいふた如く四大と五蘊とが因緣に依て假りに和合して出來たもので、因緣を離れては即ち我といふものゝあるべきものでない之を佛教では諸法無我と云ふ、此の如く時間的からいふとも、空間の上からい

ふとも我といふ定まつたものがあるべきてないのに、凡俗愚人の誼は此道理が解らないて、無常變遷の我を常住と思ひ、因縁假和合の我を、眞に我ありと思ふ、之れが抑も根本の誤りてあるのてある。

此の我を寶とするが故に即ち貪(名利を貪り以て我を榮す)、瞋(違情の境を瞋り我を侵害せんことを恐る)、痴(非理に計較す)、等の三毒を起す、三毒意を擊ち、身口を發動して一切の業を造り業成りては逃れ難し、故に五道苦樂等の身(業の所感)三界勝劣の處を受く(共業の所感)、受くる所の身に於て還て執して我となし、還て貪等を起し、業を作り報を受け、身は則ち生老病死、死して復た生じ、界は則ち成住壞空空にし復た成る

此の無い所の我を有ると思ひて寶物の如く大切にして、此の我を守らうとするから我の氣に入るものは之を愛して貪り、我の氣に入らぬものは腹立ちてこれを斥け、自分勝手の考を起して茲に正しき理を見ることの出來ない愚

大藏法數に三毒といふ、毒は害なり、能く貪瞋痴世の善心を破壞するが故に名く

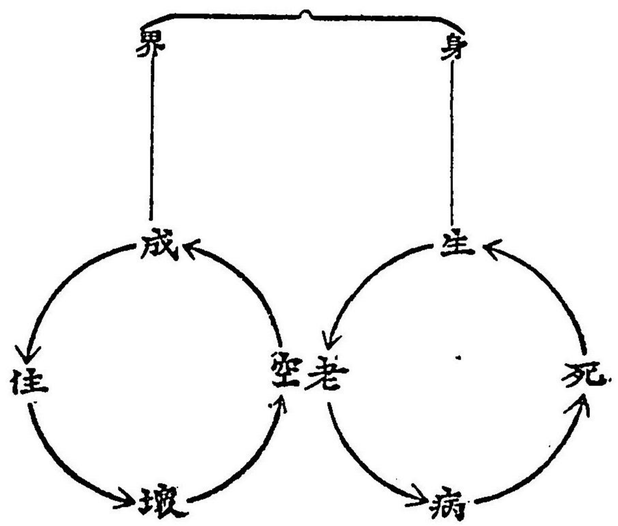
喧記に食は有と具と深と清淨を苦と性て性と苦と具は苦と性て瞋と苦と性て瞋と苦と性て

議論述に有と有と有と

原人論は人間の身五蘊と造業と正報と依報とを解説したものである。正報は人間の身五蘊と造業と正報と依報とを解説したものである。正報は人間の身五蘊と造業と正報と依報とを解説したものである。正報

を壞といひ、とし滅然物をなきを滅といふ、

かく成住壞空、成住壞空と轉々して極まる所がないと云ふが、佛敎の一切萬物變化を說く方法であるが、已に云ふが如く世界も此の四劫をくりかへすのである、宗密禪師は本書の自註に佛敎の世界創造說を述べてあるが、それは後






に詳しく講ずることとしてこゝには、吾々の住む所の世界にも亦成住壞空の四期があつて、決して一定不動のものでないといふことをさへ認めて置て貰へばよい、宗密禪師が殊に玆に佛敎の成住壞空のことを詳しく說かれたのは儒道二敎にありては、此の世界の未だ成らざる空劫時代を指して虛無の大道と云ひ、混沌の一氣としただけて更に其の空劫の以前に遡つて壞あり住あり成あり其又以前に空あり成ありなどゝ無限に渡りて論及して居らぬから、こゝに佛敎の優勝なるを示さんとて說かれたものと思はれる、已にいふ如く小乘敎は佛敎の淺い處てはあるが、然も儒道二敎の世界を說くのに較べると勝れて居ること萬々てあると云ふことに力を入れて云はれたのてある。

劫々生々、輪廻絕へず、無終無始にして、汲井輪の如し、都て此の身の本は是れ我ならずとは、謂く此の身は本と色と心の和合により、是れ我ならざることを知らざるに由るなり、因りて相をなす。

論ふ曰く問ふ解に和合して心即ち身なり、是れ我那ぞ是れ我なりと執ずるなら曰く答へ曰く者ふ妄情なれば則ち智慧なれば則ち無なる。

これは讀んで字の如くて別段講述するほどのこともない、劫とは詳しくは劫波といふ梵語で分別時節と譯して、成劫住劫壞劫空劫といふ、時間的區劃でこの界の方からいへば劫より劫と廻り身より云へば生より生と廻り〳〵て輪の如く、始もなく終もなきことさながら井戸の釣瓶の轆轤の上り下りして定まりなきが如くてあると云ふたのである、これが宇宙人生の當相である、然らば何故にかく生死輪廻して止ることなきかと云ふに、其の根本は凡て此の身の本は我と云ふものが無いに、之れをあると思ふて、其の無我なることを知らざるに職因するのである、此の我なしといふことを知らぬ惑から業を造り業により苦を生じ苦によりて惑ひ惑ふて業を造り、業によつて苦を生じ輾轉極りなきこと前に說く如く即ち色には地、水、火、風の四大、心には受、想、行、識の四蘊が集つて我と云ふ相を成じたのに過ぎないので、之れを除いては終に別に我と認むべきものはないのである。

今、推尋分析するに、色に地、水、火、風の四あり心に受、想、行、識の四あり、若し皆な是れ我ならば、即ち八我を成せん、況んや地大の中に復た衆多あり、謂ゆる三百六十段の骨、一々各別なり、皮毛筋肉、肝心脾腎、各相ひ是ならず、諸の心所等も、亦各同じからず、見は是れ聞ならず、喜は是れ怒ならず、展轉して乃至八萬の塵勞あり、既に此衆多の物あり、知らず定んで何者を取て我となさん、若し皆是れ我ならば我は即ち百千にして、一身の中多主紛亂せん、此を離れて外に復た別法なし、翻覆して我を推すに、皆な不可得なり。

これらの分析も尚ほこれ血肉なり分說なり

そこで此の我と云ふものを推し究め、尋ね分けて見ると、色即ち體には地、水火、風の四あり、心には受、想、行、識の四ありて假りに和合して成立して居るのである、かく之れを何れも我とするならば地も我、水も我、火も我、風も我である、受も、想も、行も、識も皆な我となるから、我が八つもあることとなる、更に其の地大の中にても色々あつて、骨にも三百六十段あり、一々皆な別なものであるし、皮とか毛とか筋とか肉とか骨とか、肝の臟、心の臟、脾の臟、腎の臟等皆な一々別々

なもので、何れが我といふものはない、心の作用に見ても約して受想行識の四といふたが、之を一々細別すれば、心王とか心所とかいふものになつて、それが又一々別々であつて、見ると云ふとは眼識の作用である聞くと云ふことゝは違ひ、喜ぶと云ふことゝ怒ると云ふことゝは決して同じ心の作用ではない、此の如く漸次に推して行くと、乃至八萬の塵勞ありて、頗る多いものになる八萬とは詳しくは八萬四千といふて、これにいろ〳〵説明はあるが要するに大數を擧げたので、此の數限りも知れぬ程の澤山な塵勞とて塵とはけがれたること、勞とは苦勞の種となるいろ〳〵の心の作用がある、これを一々に我として見ると遂に我の數が八萬四千もあるといふ樣になるのである、既に斯く多くのものがあるから、其の中何れを取つて我とするか、若しこれが皆な我であると云ふならば、我が百も千もある事になつて、自分一身の中に主人公が澤山出來て、勞ひ主人公と主人公との爭ひが起つて亂るゝてあらう、さればと云ふて此の四大とか四蘊とか乃至は八萬四千の塵勞を離れて別に我を成すべき處はないのであるからだん〳〵推窮し、翻覆と繰返し〳〵し我と

析して極微細に至れば極にて其の細に入れば終に異なる空に至るとは、析して空に至るといふことをいふ

俱舍論に心王と心所とを分つて心王とは心、眼、耳、鼻、舌、身、意の六識と六大と心所に從つて大地に二十法あり、大地に十法あり、大地に十法あり、大地に

て灰身滅智し、方に諸苦を斷ずと。

さて上に述ぶる如くして我を求むるに不可得なることを知ると、此の我なるものは四大や四蘊の衆多の因緣の假りに和合して出來たもので、元來我と云ふ一物があるのではないといふことが解る既に我れといふものがなかつたならば、自分に我がない訣りでなく、他人にも亦他人と認むべき主體のあるべきものでないことが解る、それを本文には「元と我人なし」と云ふたので、我とは自分のこと、人は他人のこと、既に我もなく又他人もないと云ふことが解れば誰れの爲めに貪慾を起したり、瞋恚と腹を立てたり、將た又誰れの爲めに、物を盜んだり人を殺したりなどするのであるか、其の反對にナゼ布施をしたり持戒をするのであるか、已に我もなく人もなければ、善をも惡をもする必要はないではないか、此の所に註に「苦諦を知るとあるが、全體小乘教の修行は苦集滅道の四諦を立てるので、此の世は即ち苦、三界は火宅の如くで、朝から晩まで人間には別に樂しみと云ふものがない、會まそれがあるとしても直ちに其の反對に苦みがある、何故に此の如く苦みがあるかといふに、それはありもせぬ我

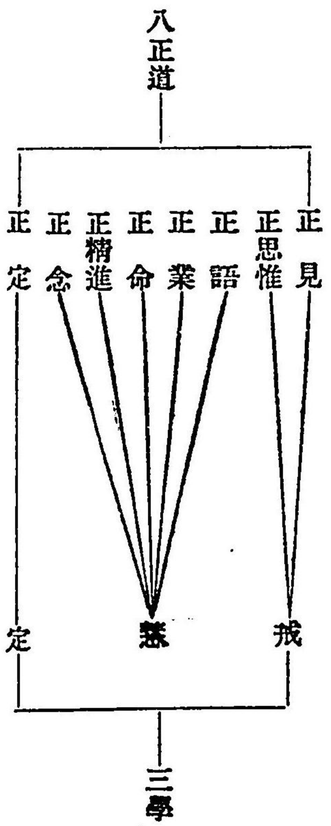
永嘉大師曰く、大五陰一四大、我に人あり、ならず、合して和合し、亦無し



を實に有りと執着して種々の迷の原因を造るからである、之を集諦といふ、即ち先きに話した四大四蘊八萬の塵勞等が集つて起るのである、さて然らば如何にして此の如き迷が起るのであるかと云ふに、それは自分の心を三界有漏の善惡に滯らすからであるといふ、三界といふは先きにいふた慾界色界無色界、有漏といふのは煩惱の漏れがあると云ふことで、此の漏のなくなつたのを無漏といふて居るので、云はゞ相對的の善だの惡だの憎だの愛だのの爲めに心を動かすことで、善とか惡とか云ふは迷の上のことで善に對して惡、長に對して短、黑に對して白と云ふやうに物を相對的に差出して見るので絕對平等の上では、これら相對的のことを超越してあるからかゝる差別のことはない、然るに今は有漏と迷ひの境界であるから、相對差別の心を去らず、此の上に心を滯らして絕對平等の上を見ることが出來ぬから此の苦を生ずるのである、此の相對的見解を離れてしまうたのが集諦を斷じたのである、此の四諦の中の前二諦即ち苦諦と集諦とは迷の原因と結果とを指したので、初めの苦諦は之れ迷の結果、後の集諦はこれ迷の原因である、此の迷の原因を斷ずるのは何

滯は留なり、凝なり、今心を三界の有漏法に留めずして、偏に出離を求むるをいふなり、

うするかといふに、それには四念處觀といふことが必要だ、念は心で觀ずることで其の觀する相手となるものが處て先づ第一に此の身は父母の遺體を取つて出來たもので、立派なやうだが其の體は不淨なものであると觀じ、二は此の世に於て我が身心に受くる所のもの皆な苦なりと觀じ、三に心も身も無常なるを觀じ、四に我といふものなき無我を觀ずるので茲ては主として無我觀をなし、法の假和合の外に我れと云ふものゝないと云ふことを觀じて、專一に之を修しさへすれば迷ひの原因を斷ずることが出來ると說てある、尙ほ此の外に小乘敎では、八正道を說いて、八通りの悟りの修行に由て迷ひを斷ずることが出來るといふ序であるから此の八正道の名を擧げると正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の八て正見とは、われ〳〵の知見をして宇宙の眞理に離れぬやうにしてゆくことで、即ち四諦の道理に離れぬ見解を持つこと正思惟とは、正しく宇宙の眞理を思惟分別すること、正語とは、正しき言語で、裏面からいへば虛僞の言語を離るゝことで、妄語や惡口や兩舌等の罪過を犯さぬのが此の正語正業と云ふのは殺生や偸盜や邪淫などの惡行を離れて正しき業を爲すこと、正命とは正しき生活法で多くの供養を受けんが爲めに出家らしからぬ行を爲るなどは正命でない、正精進とは、正しく勉勵すること、正念とは、意を正しくしてゆくこと、正定とは、正しき禪定を修することである、而してこの中正見と正思惟とは慧で、正語、正業、正命、正精進、正念の五は戒、正定は定である。




此の八正道は、迷を去りて悟に行く道で、これが悟の原因たる道諦で、其の結果として滅諦を得るのである、滅諦といふのは小乘佛敎の理想たる涅槃で、空々寂々たる境である、それは既に無我を觀ずるから、貪ると云ふ心も瞋ると云

ふ心もなく身や口や意の業と云ふものが止まつて我の空なる事が確實に知れて、絶對平等なる眞如のことを悟る事が出來る、これを諸業と止息し我空眞如を證得すといふたのである、小乘敎では悟の結果を此の滅諦とし、惑業苦を滅し盡くして再び生死の輪廻の苦に陷らないのを極致とするので、それには須陀恒、斯陀恒、阿那恒、及び阿羅漢と云ふやうに次第するのであるが、今は前の三を略して阿羅漢丈けを上げたのである、阿羅漢とは梵語で之を支那に譯して無學と云ふ、無學とは最早や學ぶべき事なしといふので、佛敎の修行をなし遂げた所で又之を無生とも譯して最早や生死の苦を脫離して三界に生を受けぬと云ふ意味をも有し、或は又殺賊とも譯して煩惱の賊を殺して了つたと云ふ意味をも持て居る語であつて、一言で云へば阿羅漢とは、修行功を積むて諸々の煩惱の賊を殺し、三界の繫縛を離れて、最早や學ぶべき餘地を殘さぬやうに至つたので此の阿羅漢の果報を得れば、惑業苦を斷じ盡くすが、尙ほ現に受けて居る身や心があるから之れを有餘涅槃といふは更に灰身滅智とて身も心も皆な薪がつきて自づと火の消えたやうに何も後に殘ることなく、未來に再び身を受くべき業因を斷滅し盡くしたのを無餘涅槃といひ、こゝに寂滅と寂はシヅカ、滅はナクナルで空寂たる樂を受くる、之れが小乘敎の極果である。一體佛敎で其の究竟目的たる涅槃を說くに就ても小乘と大乘とは大に其の趣きを異にして小乘の方は今云ふ通り灰身滅智で、寂滅の樂を得るのであるが、大乘の涅槃は、四寂の義で、眞善美として具はらざるなきが四、僞惡醜として滅せざる無きが寂とも見る事が出來る、圓滿具足の境である大乘の涅槃を知らず、灰身滅智の小乘のみを見て佛敎を厭世敎などといふのは大な誤である。

佛敎は世界を四種に分ち、器世界、如來藏界、名色界、世間界、器世界、物器世界、世界、世界、器界、世界、器界、器界、器

の生死輪廻の本となり吾々人類の根源となるものはないと云ふのであることれによりて原人の理がつきたてあらうか、乞ふ宗密禪師が次ぎに難詰する處を見よ。

今之を詰りて曰く、夫れ生を經、世を累ねて、身の本となるものは自體須く間斷なかるべし、今五識は緣を缺けば起らず(根境等を緣となす)、意識は時ありて行せず(悶絕と睡眠と滅盡定と無想定と無想天と)、無色界天には此四天なし、如何ぞ此身を持ち得て、世々絕ゑざらん、是に知る此教を專にするものも、亦未だ身を原ぬる能はず。

さて宗密禪師は此の小乘敎を詰りて、凡そ身の根本となるべきものは、必らず過去より未來に亘りて、幾億萬年の昔より、幾億萬年の末まで引き續いて、生れ變り死に易るとも斷ゆる時のないものでなければならぬ、若し中途で斷絕するものであつたならば、生前死後と引き續けて行ける道理がない、今、此の小乘敎では、色心の二法及び其の上に起す貪瞋痴を以て身の本とするのは前に說いた通りであるが、此の身心の上に於ける眼、耳、鼻、舌、身の五識といふものは、其の外緣たる色、聲、香、味、觸、の五境がなければ、其の働きが起らぬので、見るべき色境のない時には、眼識の働きはなく、聞くべき聲境のない時には、耳識の働きはない、乃至鼻識でも、舌識でも、身識でも其の通りであるから、五識といふものに間斷のないものとは云へぬ、五識は起らぬことがあるが意識は働かぬ時はないと云ふかも知れぬが、此の意識といふものも、悶絕して氣を失ふた時には全く其の働きが止り、睡眠して夢をも見ないやうな場合には此の意識の働きはない、それのみならず、禪定に入つて心の働きを止めた時には此の意識の働きがない、例へば聲聞や緣覺の修する滅盡定といふのは眼耳鼻舌身意の六識を全く生ぜしめざるので、此の時には意識も生ぜぬし、外道の修する無想定といふものは、一切の心想を生ぜしめざるので、此時も意識の働きはないし、色界の中の無想天といふのにも全く六識の働きはない、かくの如く意識にも斷絕する場合があるのだから間斷なきものとは云へぬ、心の方は此の通り斷絕す

るのであるが物質的の四大が繼續するのであるかといふに、無色界には此の四大の身はなく受、想、行、識の四蘊あるのみだといふから、これも間斷なきものではない、かく色の四大も心の六識も間斷あるものとするならば、如何にして此の身を持ち續けて、過去、現在、未來の三世に通じて絶えざらしむることが出來るであらう、此の小乘教は六識を説いて其の以上を説かぬのであるから、これだけでは到底、人身の根原を究めることは出來ない。

（參照）原人論自註に宇宙開闢のことが書いてあつたが、講述の順序で先きに略したので、こゝで講述することとする、

（註）空劫より初めて世界を成すとは、頌に曰く空に大風起りて傍らに廣がること數無量なり、厚さ十六洛叉、金剛も壞ること能はず、此を持界風と名く、光音、金藏の雲、布て三千界に及び、兩車軸の如くに下るも風に遏められて流るゝことを聽さず、深さ十一洛、叉始めて金剛界を作す。

洛叉は梵語、億の義に當る と

こゝに頌とあるは世親菩薩の俱舍論世間品のことであるが、文は必ずしも俱舍論の頌の通りではない、俱舍論は頌と本論とに詳しく世界の開闢が説いてあるが、今は要を採りましたので、世界は成、住、壞、空、成、住、壞、空、と輾轉するのであるから、現世界の成る前は前の世界の壞して後の空劫であつた、此の空劫の時代には晝夜もなく日月もないのであるが、此の空界に大風が起つて四面に吹き廣がること、數無量とあつて幾億萬里なるや量るべからざるほどで、其の厚さは十六洛叉とて十六億萬由旬ほどあつてこれを風輪と名け、堅きこと他に比類なき金剛のやうなものでも之れを壞ることが出來ない、之れを持界風といふ、此の風輪の上に、色界第二禪天なる光奇天の空中に金藏とて金色の雲布き廣がりて三千大千世界に廣がる、三千といふは同じ日月の下にある世界千を小千世界といひ、此の小千世界の更に千集りしを中千世界といひ、其の又千集りしを大千世界といふので、空間の大なるを形容したのであると見てよい、今、金藏の雲此の空間に廣りて、大雨の下ること

俱舍論の頌に曰く、世間を安立すること、輪數も下風に居る、其の量の廣さ無數なり、厚きこと十六洛叉、

車軸の如く、非常な勢ひを以て風輪の上に注ぐか、風輪の力強きこと前にいふ如くであるから風の力に遏められて流るゝことが出來ず、泡のやうになつて其の深きこと十一億萬由旬、これを水輪といふ、業風、此の水輪の上を擊て金輪となり、こゝに此の世界の始は出來たのである。

次第に金藏の雲、雨を澍て其の内に滿ち、先づ梵王界乃至夜摩天を成す、風、清水を鼓して須彌七金等を成す、滓濁は山地四洲及び泥犂と鹹海の外輪圍と爲る、方に器界立と名く、時に一增減を經たり。

かく三輪の成りし上にも、尙ほ金色の雲は大雨を金輪の上に澍きて其の内に滿ち溢れしめて、欲界の頂上に至り、こゝに其の上なる色界初禪の梵王界が出來、それより欲界の頂上たる他化自在天、化樂天、兜卒天、夜摩天等が出來、次ぎに風が起つて其の清水を鼓動するに從つて金輪の上に、世界の中心たる須彌山が出來、此の須彌の外邊を十重に圍むで居る七金山等が出來、此の

次ぎに水輪の上にあること一億二十萬由旬、深さ八萬由旬、廣さ三十二億三千三百四十二由旬、周圍三倍半、之れに從つて金輪の上に成りたる須彌山、七金山、鐵圍山、大海、四洲、五障、六持、七海、鹹水、三惡趣、地獄、畜生、閻羅王、人間、天、百億日月、千億須彌、百億四天王、千億忉利天、十億夜摩天、億兜率天、億化樂天、億他化自在天、億梵王、億梵衆、億梵輔、億梵世、億梵王宮、億梵衆宮、億梵輔宮、億梵世宮、億梵王殿、億梵衆殿、億梵輔殿、億梵世殿、億梵王座、億梵衆座、億梵輔座、億梵世座、億梵王床、億梵衆床、億梵輔床、億梵世床、億梵王帳、億梵衆帳、億梵輔帳、億梵世帳、億梵王帳上、億梵衆帳上、億梵輔帳上、億梵世帳上、億梵王帳上網、億梵衆帳上網、億梵輔帳上網、億梵世帳上網、億梵王帳上網上、億梵衆帳上網上、億梵輔帳上網上、億梵世帳上網上、億梵王帳上網上鈴、億梵衆帳上網上鈴、億梵輔帳上網上鈴、億梵世帳上網上鈴、億梵王帳上網上鈴上、億梵衆帳上網上鈴上、億梵輔帳上網上鈴上、億梵世帳上網上鈴上、億梵王帳上網上鈴上鈴、億梵衆帳上網上鈴上鈴、億梵輔帳上網上鈴上鈴、億梵世帳上網上鈴上鈴、億梵王帳上網上鈴上鈴上、億梵衆帳上網上鈴上鈴上、億梵輔帳上網上鈴上鈴上、億梵世帳上網上鈴上鈴上、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵王帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴、億梵衆帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵輔帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵世帳上網上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上鈴上、億梵王帳上網上鈴

を分ちて主を立て、臣佐等を求め、種々差別あり、十九增減を經たり、前を兼ねて總じて二十增減して名けて成切と爲す。

以上を宇宙開闢論と見れば、之れは人類の原始より社會の成立にまで說き及ぼしたもので、色界二禪の光奇天は、身に光明あつて飛行自在で喜樂を食とする身分であつたが此の世界の成立した當時には、既に天の福分が盡きて人間界に下生し、初めは尙ほ幾分天上界の德が存して居つたから、自然の地を味つて居つた、此の地味甘きこと醍醐のやうであつたがだん〳〵乾て餅のやうな地の皮を生じた、これを地餅といふ、諸人爭ふて之れを食ひ、其の味に愛着の心を生じたから地餅は隱れて、次ぎに林藤といふものが生じたこれは葡萄のやうなもので、味ひ頗る美てあつたから、之れ亦諸人の貪り食ふ所となつて盡き、其の後に粳米を生ずることゝなり、朝に刈れば、夕に生じて銷盡することなかりしが諸人之れを取つて初めて穀食することゝなり穀食するが故に身光は全く滅し大便小便のことあり、男女の形も別れ愛慾の心いよ〳〵現れて、爭ひ刈りて止むことなきに至りて、粳米は最早生ぜず、人と田を分ち境を定めて耕して食ふことゝなる、さて田を分ち境を定むると、各々自己の田を護りて、他の田を侵し、爭ふて止むことがない、そこで之れを制するの主を立てゝ治むることゝなり、田の開け、人の增すに從つて一人にては治め難く、之れを補佐する臣下を要することゝなり、此に於て人に貴賤上下の別を生じ、其の別に從つて住む所の家室城廓等いろ〳〵の區別を生ずるに至つたのである、かくして社會の狀態を成さむには十九增減を經たといふのであるから、これは又非常に長い時間で、之れに前きの一增減を加へて二十增減之れを成切といふのである、前の宇宙開闢說でも、此の社會成立說でも何にも此の文句に執着して見るには及ばぬ、これは印度の創世說で、もとより今日科學者の所謂星雲進化の順序や、社會學者の所謂社會進化の道程と同一でないが、他の古代國民の傳說が單に神に歸したるに比しては、其の開闢說も其の成立說も、餘程合理的であると見ることが出來る、其の宇宙の開闢を說て空切に大風起り火雲を現じて漸次水となり地となり

しといふは、今日の科學者が星雲運動して熱を生じ、此の火の塊散つて地球となり、冷却して水を生じ地を成したりといふに類し、社會の成立を說て初めは自然物を食ひしもの漸次土着の狀態となりて統治の關係を生ずるなど今も昔も變らない觀察が多い。

議して曰く、空界刼の中是れ道敎には之れを指して虛無の大道といふ、然れども、道體は寂照靈通にして、是れ虛無にあらず、老子或は之れに迷ふか、或は權りに設て務めて人欲を絕たしむるならん、故に空界を指して道と爲す、空界の中、大風とは即ち彼の混沌の一氣なり、故に彼れいふ、道一を生ずと金藏の雲といふは氣形の始め即ち太極なり、雨下て流れずといふは陰氣凝るなり、陰陽相合して方に能く生成す。

こは俱舍論の世界開闢說を支那の儒道三敎の世界開闢說に會通したので、此の筆法で行けば今日の科學の說も會通することが出來る、少々無理な所があると思ふが、文の通りに御話すると、佛敎では空刼より世界が出來たといふのは、道敎で宇宙の本源を虛無の大道より生じたといふたのと同じことのやうであるが、空刼の空は大道の本躰となるべきものではない、大道の大體たるや決して空刼の空の如く何にもない貌ではなく、空にして有、即ち眞空妙有で、寂とシヅカにして鋭に塵なきが如く、しかも能く照と萬物を映じて靈妙にして通達自在、有無に關せぬものでなければならぬ、然るに此の大道の本體を以て全く何にもない虛無とするのは、大なる誤りで、若し全く無ならば如何にして有を生ずることが出來ようぞ、老子は或は迷つて此の空界を以て道としたのではなからうか、或は又世人が專ら有に執着するを救はんとて權りにかくの如きの說を設けて人慾を絕たしめんとて、此の空界を指して道としたのではなからうか、今、空界の中に大風起るといふのは、彼の儒道二敎で謂ふ所の混沌の一氣である、されば之れ陽氣の形に兆すの狀で所謂大極のことである、雨下て流れずといふは陰氣の凝つたので、混沌の一氣此に於て陰と陽との二となる狀況を示したものと見ることが出來る。

易決欠の地に天の簡を太太あ太太易樂り太太と大象れの極已
の約い未、一ふ易樂り氣分氣の極初始にとれ
命ふ分之氣中大中氣大象れの極已
は役ざ未易
形のる
質太も分氣
已極の

に具る、太極圖說に極動を生じて陽を生ずるとあり、陰を極つて

梵王界乃至須彌とは彼れの天なり、淨濁とは地なり、即ち一、二を生ずるなり。二禪、福盡きて下生すとは、即ち人なり、即ち二、三を生じて三才備れり、地餅より已下乃至種々といふは、即ち三、萬物を生ずるなり、此れ三皇已前穴居野處し、未だ火化あらざる等に當る、但、其の時文字記載なきを以ての故に、後人傳聞明かならず、展轉錯謬して諸家の著作、種々異說あるのみ、佛敎、又通して三千世界を明して大唐に局らざるに緣るが故に、內外の敎文、全く同じからざるなり。

色界の初禪たる梵王界より他化自在天、化樂天、兜率天、夜摩天などは地上に關係なき空居天、須彌山の頂上たる三十三天、中央たる四天王の如きは之れを地居天といふのであつて、梵王乃至須彌といふたのは儒道二敎で所謂天のとて、淸き者は上つて天となり、濁れる者は下て地となるといふのは支那の開闢說であるから淨濁は地なりといひ、こゝに混沌の一氣分れて天地の二となる、二禪天、福盡きて下生すといふのは人のことで、中に盤古氏があつたといふ支那の說に當る、こゝて天地の二は中に人を生じて三となり、天地人の三才は全く備つた、地餅より已下乃至種々の差別ありといふまでは、盤古氏の後、伏羲、神皇黃帝の三皇の時代以前には、人、未だ家屋を造らずに穴居野處して未だ火を以て食物を化熟することを知らなかつた原始狀態に當るといふ、支那の歷史では有巢氏といふ人が出て初めて木を構へて巢を造る、即ち家屋の初を生じ、其の次ぎに燧人氏といふのが出て人に火食を敎へたといふのてある、此の時代には、もとより文字もなければ記載するといふこともなく、唯だ語り傳へ聞き傳へたのてあるから、充分明かてなく、甲から乙、乙から丙と展轉して、いろ〳〵錯謬と誤り間違へて來たから其の說一定せず、諸家の著書に種々の異說があるのてある、且つ佛敎は宇宙全體即ち三千大千世界を通じての開闢を明すのてある、支那の說は支那だけに局られ居るから、佛敎のいふ所(內)と儒道二敎の如き支那の敎の文(外)とは全く同じくないのてあるが、粗ぼ相似て居るのは前に示した如くてあるとて、宗密禪

師は印度の開闢說と支那の開闢說とを會通しようと企てたのである。

住とは住刼、亦、二十增減を經、壞とは壞刼、亦二十增減あり、前の十九增減に有情を壞し、後の一增減に器界を壞ち、能壞の者は火、水、風等の三災なり、空とは空刼、亦二十增減の中、空にして世界及び諸の有情なきなり。

世界及び萬物の悉く成就したる其の儘の狀態にて二十增減の長時間に存す、之れを住刼といふ、それより漸次に壞れて行くので、初めの十九增減の間に飢饉とか、疫病とか、刀兵とか諸種の災厄起りて一切の有情は悉く滅して後の一增減の間には火水風の三災とて、初めに日光四倍の熱となり、此の日の數增して七となり、須彌も大地も悉く火焰を發し諸の世界一時に滅するので、これを宗密禪師流に今日の科學に會通すれば、地球の熱漸次に減じて終に大陽の引力の爲めに吸收せられて星雲の昔に還る狀ともいふことが出來よう、此の火災は初禪天に及び水災は二禪天、風災は三禪天及び四禪天



以上には諸災及ばずといふのである、かくの如くにして世界は壞して空となる、これを空刼といふので又二十增減、其の間、世界も人類も禽獸も草木もない、此の空刼から又成刼となり、住刼となり、壞刼となるといふ風に輾轉して止む時なしといふが、佛敎無始無終說の根底である、併し讀者は常にこれ之れ佛敎中の淺劣なる小乘敎の所談であるといふことを忘れてはならぬ。著者は次ぎの自註に「道敎は只だ今の此の世界のまだ成らざる時の一度の空刼を知て、虛無混沌の一氣等といひ、名けて元始と爲して、空界已前に早く千々萬々遍を經て、成、住、壞、空終に復た始まることを知らず、故に知る佛敎法の中の小乘淺々の敎たも、已に外典深々の說に超ることを」といふて居る、これは讀んで字の如くで、別に講ずる要はない。

『一切の法の自性は本來寂滅、自性涅槃なり、涅槃の故に自性は
認むべからず、故に自性なしと說く、諸法は衆生が相ありと計
執せるが故に有り、然れども之れ假名にして實無なり、諸法は
因緣より成りたるものなれば假有にして實無なり（解深密經）』

無始常然を法爾といふ法爾

# 四、斥偏淺第二下

## （三）大乘法相敎

三に大乘法相敎とは、說く、一切の有情無始より以來、法爾として八種の識あり、中に於て第八阿賴耶識は是れ其の根本なり、頓に根身、器界の種子と變じ、轉じて七識を生ず、皆な能く自分の所緣を變現して、都て實法なし。

これより愈々大乘敎に入つたので、其の大乘敎の中で諸法有數の相を說き萬法唯識の道理を談ずるのが、此の法相敎で、唐の太宗の時に彼の有名な玄奘三藏の高弟たる慈恩大師といふ御方が玄奘の敎に從ひ、唯識論によつて一宗を開かれたので、又唯識宗ともいひ、日本に於ても奈良朝の時代には盛んに行はれたので唯今も遺つて居る法隆寺や興福寺は此の宗の御寺です、さて此の法相敎では人間の本源を如何やうに說くかといふに、先づ一切の有情とて生

きとし生けるものは、無始とて何時からといふ限りなく、天然自然と八種の識を持て居るといふ、八種の識とは一には眼識、二には耳識、三には鼻識、四には舌識、五には身識、六には意識、七には末那識、八には阿賴耶識で、此の中第六識までは前きの小乘教に於ても說たが、其の上に七八の兩識を說くのが此の教の優秀なる所である。眼、耳、鼻、舌、身、の五識は心理學で所謂感覺的作用を掌るので、色聲、香、味、觸の五境を緣として起るもので、云はゞ心の門のやうなものだ、此の心の門より入るものゝ上に就て、いろ〳〵の分別を起して行くのが意識で一寸見ると心の主人のやうであるが、其の實は玄關番位な所で未だ主人たるの地位を得ることは出來ない、心の主人と云はれるのは阿賴耶識で、阿賴耶とは梵語、漢譯して藏識又は種子識といふ、これは一切諸法の種子となるべきものを悉く此の識の中に貯藏して居るからで、此の主人と玄關番との間にある執事とか番頭とかいふ役を務めるのが末那識、末那も梵語で譯して我見識ともいひ、意識の分別した所を相續して行く潜在的なるもので、これが根本平等なる阿賴耶識の上に差別を起して我といふ考を生じて行くものである、天然自然にかくの如く八種の識があるのであるが、其の中にも第八の阿賴耶識は根本で、此の阿賴耶識で無始以來貯藏して居る種子から眼、耳、鼻、舌、身、等の形骸と山河草木國土等の器界との種子を轉變生出して、それが更に轉じて眼、耳、鼻、舌、身、意の六識と第七の末那識とを生じ出すので、是等の七識は皆な各々眼識は色を變じ出で、耳識は聲を變じ出し、鼻識は香を變じ出すといふやうに、それぞれ自分の所緣を變現したので、此の以外に別に實法と認むべきものはないといふのが、此の法相教の立脚地である。されば此の教によりては一切萬物は皆な阿賴耶識から變現したといふので、阿賴耶識には萬物の發現すべき種子を持て居るので、これがわれ〳〵の目に見らるゝやうな根身器界の狀態になつたのを現行といふので、即ち阿賴耶識の天然自然と持つて居る種子なるものより轉じて、今日われ〳〵の見る如き萬有の現行となり、此の萬有の現行が又新に阿賴耶識の種子に薰附して後の萬有開展の種子となるので、之れを唯識論には「種子、現行を生じ、現行、種子に薰じ、三法展轉して因果同時なり」とあつて、初めに現行を生ずる種子を本有の種子といひ、後に現行より薰付したのを新薰

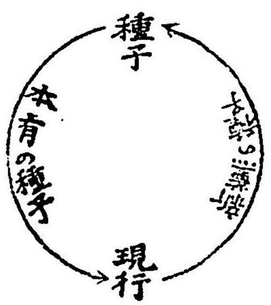
宗鏡錄に阿賴耶は惡識を含藏するほこと失藏寶藏なし、一切法を持つ猶如貧人の藏を失ふが如し。

とは自然といふが如し。

又いふ、既に善惡の種子を含藏すれば、此の惡法は生ずるよりほか出ることなく、善法は一切諸法の種子となるべきものを發生する地盤となる。猶如大地の木の種子が發芽して萬物を生ずるが如し。

を繰ず、

の種子といふ、即ち




の如き狀態で、宇宙萬有の現行は悉く阿賴耶識の種子より展開したのである。さて又此の阿賴耶識を初め八種の識には四分といふことがある。これが又實に萬法變現の狀態を示すに適當な敎理である。四分といふのは、相分、見分、自證分、證自證分のことで、相分といふのは客觀的に他の境を寫象する作用で、月を見て心内に其の影を宿すやうなもの、之れを主觀的に認めて行くのが見分其の認めた所を、それに相違なしと認知するのが自證分、其の自ら證知したのを更に證するのが證自證分で、例へば花を見て花を心に寫すのは相分、花を見て居ると知るのは見分、我が見て居ると認むるのが自證分、我が見て居るに相違ないと認めるのが證自證分のやうなもので、阿賴耶識の上から云へば、眼、耳、鼻、舌、身、意の六識は相分、第七の末那識は見分に過ぎないので、吾等が客觀の存在として居るものも、其の實は阿賴耶識の中の一部分であるから心内の法はあり、心外の心はなし、心の外に實の法といふものはない、萬法は悉くこれ唯識の所變である、昔、元曉法師は唯識所變の道理を究めんとて諸方を行脚し、行き暮れて、とある野原に出て、こゝに一夜の宿を求め、咽喉が渴したので、流れの水を掬つて呑んだが、其の水清涼にして實に美であつた、さて翌朝日出てゝ見ると野原と思ふたのは、死屍を捨てる所で、清涼の水だと思つたのは、死屍から流れ出る膿汁であつた、昨夜は清しと思ひ今は穢れたりと思ふ、淨も穢も心からで、心生ずれば種々の心生じ、心滅すれば髑髏不二なりとて唯識の理を悟つたといふ話がある、善惡邪正も皆な心から、心の以外に何にもない純唯心の見地に立つのが此の法相敎である、さて然らば如何にして識より變ずるかといふに

如何んか變ずるや、謂ゆる我法と分別しつゝ熏習せし力

の故に、諸識の生ずる時に、變じて我法に似たり、第六七識の無明覆ふが故に、此を緣として執して實我實法と爲す。

これは阿賴耶識より萬法を變生する狀態を示したので、我といふは我といふものがあるといふ我見、法といふは其の我の相手となる一切諸法、この我といふものも、法といふものも、二つながらあるべきものでなく、悉くこれ阿賴耶識から變出したものであるのを、我だの法だのといろ〳〵に分別をして、これに執着をして來たのが、丁度、梅花の下を過ぎて衣袂爲めに芳しく、糞、臭の傍にありて身も亦臭氣あるが如く、阿賴耶識に薫習した力に引かれて、眼、耳、鼻、舌、身の五識を初め第六第七の識を生じて、何となく實に我といふものがあり、法といふものがあるやうに思はるゝので、眞にあるものでない、此の眞にあるものでないのを前の五識は唯だ色聲等を理想のまゝに見聞するだけで、執着することもないが、第六の意識や、第七の末那識が思慮分別を起す時に、無始刼來の無明とて迷の爲めに覆はれて實我實法ありと執着するに至るので、恰も畜工が自ら幽靈の畜を描いて置きながら、これを眞の幽靈と思ふて驚き恐るゝやうに、もと〳〵自分の造り出したものを外にありと思ふに迷ふて居るので、昔、山寺に鬼の出る室があつた一人の僧が、之れを退治んと其の室内に入つて居ると、他の一人は又同じ意て夜陰に其の室に入らんとすると、内の僧は必定、鬼の來りしならめと、戸を堅く押へて入れじとする、外の者は鬼の中に居て入れじとするならめと互に押合ひ夜明けて互に顏を見合すと、鬼ではなくて同宿の僧であつたといふ話がある、われ〳〵が自分の心から迷ふて實我實法ありと執するのは、此の同宿の僧を鬼と思つて爭ふたのと、同じ道理である、此の道理は唯識甚深のことだが先きにいふた種子と現行との關係や四分のことを味へば大略了解することが出來るであらう、

患と夢との者の如き、患と夢との力の故に心、種々外境の相に似て現ず、夢の時には執して實に外物ありと爲す、寤め來れば方に知る、唯だ夢の所變なるを、我が身も亦爾り、唯識の所變なり、迷ふが故に、我及び諸境ありと執し、此に

由て惑を起し、業を造り、生死窮りなし。此の理を悟解せば、方に知る、我が身は唯識の所變にして識を身の本と爲すを。

例へば大患重病のものが熱の爲めに心昏迷していろ〳〵の者を見、又夢を見るものが、夢中にさま〳〵の境を見る如き、これ病氣とか夢とかの力で、心に種々外境の相を現ずるので、夢を見て居る時には、其の夢に見る所の山河大地も、人物動作も、實に外にあるものと執着して居るが、審めて見ると、唯だこれ夢の變出した所で、別にそんなもののあつたのではないやうに、我が此の身も亦此の如く、八種の識就中阿頼耶識の中に現はれたもので、此の以外に別に根身器界のあるべきではない、それを無始劫來の無明の爲めに覆はれて、我とか人とか、山河大地のやうな諸の境界をもあるものと執着し、此の我法の二執によりて惑を起し、此の惑によつて業を造り、此の業によつて生死の苦を受けて、生より死、死より生と輾轉して窮ることなく、何時までの生死の苦を受けるのであると說くのが、此の法相敎の大旨であるから、此の道理を充分に悟解すれば、

證道歌に、「夢中迷悟有人論、覺後方知大千空、六夢中、百年光景如流電、」

唯識論に、「夢若無所變化者、應如夢中見諸境、」

成唯識論に、「如夢中見諸境等、」

文字に、「夢中見諸境、」

我が身は唯識の所變で、阿頼耶識こそ、眞に身の本といふべきものであるといふことを知ることが出來る、然らば此の法相敎によつて人間の本原を究むることが出來るか否か、不了の義、後に破する所の如しとあつて、次ぎの大乘破相敎に於て之れを批評してある。

## (四) 大乘破相敎

四に大乘破相敎とは、前の大小乘法相の執を破して、密に後の眞性空寂の理を顯はす。

(自註)破相の談は唯だ諸部の般若のみにあらず、徧く大乘經にあり、前の三敎は次に依て先後す、此の敎は執に隨て即ち破す、定れる時節なし、故に龍樹は二種の般若を立つ、一には共、二には不共、共とは二乘同じく聞を信解す、二乘の法執を破するが故に不共とは唯だ菩薩のみ解す、密に佛性を顯すが故に天竺の戒賢、智光の二論師、各〻三時敎を立て、此の空敎を措く、或はいふ、唯識法相の前に在りと、或はいふ後に在りと、今の意、後を取る。

前にも説いたように、法相宗は小乘教と大乘教とに分れて、大乘教は中觀部と有部とに分れて、有部は小乘教と共に小乘教に屬するものであるが、中觀部は大乘教に屬して、大乘教の中に同じく空を説くものであるが、中觀部は空を説くのみであるが、有部は空のみならず、空と共に實有をも説くものである。

今まで話して來た大乘法相敎は、諸法差別の相を説くことに重きを置て來たが、此の破相敎は諸法本來空寂の理を説くのである。勿論前にいふた小乘敎も法相敎も、衆生の迷執を破して空といふことを示すのであるが、小乘の方では五蘊とか四大とかいふ法執が遺つて居つて、まだ五蘊本來空なり、四大もとは有ることなしといふ、法執をも破つて行く大乘の眞空とは趣きが違い、同じ空を説いても、析空といふと、分析に分析を重ねて終に空に歸するといふので、大乘の如く眞空にして妙有なりといふ體空の道理を説くのでない。法相敎は四大だの五蘊だのといふ法執を破して萬法唯識唯だ阿賴耶あるのみといふのであるが、此の大乘破相敎は其阿賴耶識のみに執着して居るのをも破つて、眞に空寂の理を示さんとするので、先きの大乘法相敎では、客觀界は悉く空であるとは云ふが、未だ識を立て主觀を空とは立てぬ、此の破相敎は客觀も空なり主觀も空なり、一切空なりといふので、之れを宗旨にすると三論宗で、破邪顯正を標榜して、邪執を破りて、空寂の正理を顯すのが主眼であるから、こゝに前の大小乘法相の執を破りて、密に後の眞性空寂の理を顯すといふてある、密にとあるは此宗の目的は主として前の法執を破るにあつて、これをさへ破れば眞如の本性空寂なるの理を顯すことが出來るとして、重きを破邪に置くからである、一體此の破相のことを主として説くのは、大品般若、放光般若、金剛般若等諸部の般若經であるが、般若經の中のみならず、華嚴經でも、法華經でも、涅槃經でも、大乘の經典と云はるゝものゝ中に破相のことのないのはない、されば先きに擧げた人天敎、小乘敎、法相敎に至るまでは説述の順序によりて淺より深に入つたのであるが、此の破相敎に迷執に隨つて破して行くのであるから般若の時だけ説いて他には云はぬと云ふのではなく、釋尊得道の初めより涅槃の夜に至るまで、迷執あるもの毎に此の破相の談を試みられたので、定れる時節があるのではない、故に八宗九宗の祖師と仰がるゝ龍樹菩薩は、般若には二通りあつて、一は共般若といふて聲聞乘や緣覺乘即ち小乘のものの法執を破るのであるからこれら二乘のものも共に聞て信じ解することが出來るが、他は不共般若といふて、唯だ大乘菩薩の修行の上の談で、唯だこれらの菩薩のみが其の眞理を悟り、密かに眞性を顯はすのであつて、二乘と共にするのではな

大智度論に曰く、得道の夜より涅槃に至るまで、常に般若を説くと

龍樹は西曆二世紀の頃即ち

佛滅後六百年代に出た天竺の智光とか戒賢とかいふ大德は佛一代の教を、大乘小乘に通じ、不共の方は大乘教のみなのである、此の龍樹菩薩の後に出た天竺の智光とか戒賢とかいふ大德は佛一代の說法を三時に分ち、戒賢論師は初時に阿含等の小乘教を說き、次ぎに般若等の空教を說き、第三時に解深密經等を說て唯識の道理を示すといひ、智光論師は初時に阿含等を說くとすること、と戒賢と同じく、第二時に唯識法相を說き、第三時に眞空の教を說きたまふとし、戒賢は法相を、後とし、智光は破相を後として居るが、今は智光の立る如く後にしたのであるといふのが自註の大要である、これは前の大小二乘法相の執を破し、密に後の眞性空寂の理を顯すからである。

將に之れを破せんと欲して、先づ詰りて曰く、所變の境、既に妄ならば、能變の識、豈に眞ならんや、若し一は有にして一は無なりと云はゞ、則ち夢想と所見の物と應に異るべし、異ならば則ち夢、是れ物ならず、物、是れ夢ならず、寤め來りて夢滅して其の物あるべし。

此の教は大小二乘の法相の執を破するのであるが、先きの法相教に於て畧ぼ小乘教の執を破して唯だ阿頼耶識あるのみと云ふて來たから、こゝには此の法相教の執を破すので、彼の法相教では內外の諸法は皆な阿頼耶識の變出した境であつて眞にあるべきでないといふ、既に其の變出したものが眞にあるべきものでない妄境であるならば、之れを變出した所の阿頼耶識といふものも亦眞にあるべきものでないのではなからうか、若し阿頼耶識のみはあつて、これより出た萬法といふものがなくて、皆な夢中の境のやうなものであるとするならば、夢を見て居る心と、其の夢に現はれた種々の物とは異なるものとなる若し異なるものとせば、夢と物とは別々であるから、寤めての後は夢はなくても、其の物だけはある道理ではないか、こゝに一人あつて夢に金を拾つたとせよ、拾つたと見て居るのは、夢想、拾つた金は夢物、夢想と夢物と異ならば、夢寤めても金だけはある筈ではないかといふので、法相教では心有境無といふのであるから、夢はあるが、夢の中のものはないといふのだが、此の破相教で

古來此の夢の喩をに解する、莊子に蝶子、蝶と夢なりとの例を以て物を解せんとせる

は夢その者も實にあるべきものでないと云ふことを云はんとて此の譬を持ち來つたのである、更に一歩を進めて、

又、物、若し夢にあらずんば、是れ眞物なるべし、夢、若し物にあらずんば、何を以てか相と爲さん、故に知る、夢みる時も則ち夢想と夢物と、能見所見の殊なるに似たるも、理に據るときは、則ち同一虛妄にして、都て所有なきことを、諸識も亦爾り、皆な假りに衆緣に託して自性無きを以ての故に。

とある、夢の中の物、即ち拾つた金が夢でないとすれば、眞物でなければならず、拾つたと見た夢が、夢中の金でなかつたらば何を以て夢の中に現はれ相とすることが出來やう、即ち夢外に金なく、金を離れて夢がないのではなからうか、成る程、夢を見て居る時は夢中の想と、夢中の物とは別々で、一方は見て居るもの、他方は見られて居る物となるであらうが、窮めて見れば、見たと思ふ夢も、夢の中に現はれた物も共に虛妄のことで、都て眞にあるのではない、夢物とは客觀の境が空ならば夢想なる主觀の境も空であるから、萬法は唯識の所現であるから空といふ、其の識といふものは夢想の如く空なのではないか、

一切空（夢）
　主觀空（夢想）
　客觀空（夢物）

阿賴耶識を初め八種の識といふものは、皆なこれ因緣の和合によつて假りに出來たものである、これには四緣といふことがあつて、一には親因緣、これは識の種子で、此の種子の現はれるのには眼、耳、鼻、舌、身、意の六根によらねばならぬ、此の六根能く識を發するに增上の力あり、これを二の增上緣といふ、この六根によつて緣とせらるゝ色、聲、香、味、觸、法の六境は識の發動の緣となる所のもの、これを三の所緣緣、さてこれら心の作用といふものは前念は後念を引き、それからそれと相續するもので前の念によつて後の念を生じ、これによつて又後の念を生ずるので、識といふものは皆なこれらの因緣によつて出來たもの

て、此の以外に識の自性といふものがあるのではない。

故に中觀論に云く、未だ曾て一法として因緣より生ぜずといふこと有らず、是の故に一切の法は是れ空にあらざるなし、又云く因緣所生の法は、我れ說く即ち是れ空なりと、起信論に云く、一切の諸法は唯だ妄念に依て而も差別あり、若し心念を離るれば、即ち一切境界の相なし、經に云く凡そ所有の相は皆なこれ虛妄なり、又云く一切相を離るゝを即ち諸佛と名くと、是に知んぬ。心境皆空は方にこれ大乘の實理なるを、若し此に約して身を原ぬれば、身は元と是れ空なり、空は即ち是れ身の本なり。（此の如き等のこれ大乘藏に遍し）

これは大乘の經論によつて、今述べた道理を證明したので、龍樹菩薩の中觀論には未だ曾て一法として因緣より生ぜざるはなして、有形の色法も、無形の心法も此の宇宙間にあり、とあらゆる一切萬象一つとして因と緣との和合によつて出來ないものはない、されば此の因と緣とを離れては別に何にもあるのでないから、これを空といふ、されば同書に、因緣より生ずるの法は、我即ち是れ空と說くとあつて、因緣と離れて自性といふものがないから即ち空と云ふので、馬鳴菩薩の大乘起信論には、一切の諸法といふものは、吾等の心の迷に即ち妄念によつていろ〳〵な差別を生ずるので、若し此の心の上に起つた妄念といふものを離れてしまへば一切境界の相なしとある、更に御經の上の證據を上げると、金剛經の中に、凡そ有りと有らゆる相は皆なこれ虛妄なもので、一切の相を離れたのが、即ち諸佛と名くるのであるとある、此くの如きは大乘の經典中には實に多くの文あるもので、かく經論の證明するが如く、心も空なり、境も空なり心境皆な空なりといふのが大乘敎の實理である、されば之れによつて身の本を尋ぬると、身の元といふものは畢竟空である、空が身の本であるといふことになる、これで果して原人の眞趣が解るであらうか、否、

今、復た此の敎を詰りて曰く、若し心境皆な無ならば、無と

佛相と三十二いふこれ

故に、化なるものの如く、幻なるものの如しをもて假りに依りて、取るに佛を見るものあらず

知るものは誰ぞ、又若し都て實法なくんば、何に依て諸の虛妄を現ぜん、且つ世間虛妄の物を見るに、未だ實法に依らずして能く起る者あらず、如し濕性不變の水なくんば何ぞ虛妄假相の波あらん、若し淨明不變の鏡なくんば、何ぞ種々虛假の影あらん

心も眞なり、境も空なりと云ふならば、此の空なり無なると知るものは誰てあらう、誰が此の無なりと知るものはなけらねばならぬのてはないか、此の知るものがなければ空といひ無といふことも解らぬ、凡そ虛妄といふのは實の法に對しての語て、實の法がないとしたならば何によつて虛妄が現れやう、世間の虛妄のものを見るに、實在のものがなくて起るものはない、例へば波は虛妄だといひ、假相だといふが、是れは濕性不變とて濁つても澄んても、流れても、止つても、變らない濕ひといふ改めざる性を持て居る水といふものがあるからて、波といふものは此の水の上に起つた假りの相て、實にあるべきてないから、虛妄なり假相なりといふのて、水がなかつたらば何うして此の虛妄假相の波が起らう、又例へば鏡の上に映つた影は皆な虛假のものだといふが、此の虛假の影は、淨とキヨラカ、明とアキラカなる鏡の上に起るのて、鏡がなければ虛假の影も起らぬ、即ち波は因緣によつて生じ、影も因緣によつて出來るのて空と云へるが、それには水たり鏡たる不變のものがあるからて、今萬法の相を一切空なりといふのは道理てあるが、空なりと云ひ得る根本實性がある筈てあるといふのが詰責の本旨てある。

又前に說ける夢想と夢境と、同じく虛妄なることは誠に言ふ所の如し、然れども此の虛妄の夢は、必ず睡眠の人に因る、今既に心境皆な空ならば、未審し、何に依てか妄現せん、故に知る此の敎は但だ執情を破して、亦未だ明かに眞靈の性を顯さず、故に法華經に云く、一切の空經は是れ有餘の說なり、大品經に云く、空は是れ大乘の初門なり。

成る程夢想も夢境も共にこれ夢中のもので虚妄であるのは大乘法相敎を破するが爲めに前に掲げた如くであるが、此の虚妄の夢といふものは睡眠の人があるからで、睡眠して居る人がなければ夢といふこともない筈だ、今若し心も境も皆な空であるならば、睡眠の人もないといふのと同じであるから、夢を見る筈がない如くに、虚妄といふものを現出する筈がないそれであるから此の敎では唯だ法に執着する妄情を破することは出來るが、これだけでは明かに眞實靈明の法性を顯はしたものとは云へぬ、鏡の曇を去り、月の雲を拂ふには適當だの、其の鏡に萬象の影を映すの理を說かず、其の月の光が千江水あり千江の月となることを示さぬ、此の鏡、此の月に向て研究するのが、大乘であるから、これは未だ權大乘たるを免れぬ、羅什三藏の弟子の僧顗といふ人は、これを實大乘なる法華や涅槃に比べて「般若其の虚妄を除き、法華一究竟を開き、泥洹其の實化を示す」といふて居る、般若は即ち此の破相の敎、法華と泥洹(これは涅槃といふも同じ語)とは實大乘、中にも法華經は釋尊出世の本懷を示して佛敎究竟の實理を顯揚したもの、涅槃經は吾々をして眞理に悟入せしむるの化導であるといふので、此の破相敎即ち般若の法門は虚妄を開くので、未だ實理を示したのでない、毎度引き出す例であるが、天桂禪師が寒山、拾得の贊に寒山、拾得に對して「拂ふべきほこりもないに箒持つ、人の心ぞ塵となりぬる」といふたのは此の破相敎の見地で、これに對して拾得が「掃ふべきほこりもないといふものを拂はんための箒なりけり」といふたのは、眞空にして妙有なる實理を示したと見ることも出來、蜷川新左衞門が一休を訪ふた時に、一休が「何物かさし上げたくは思へども達磨宗にて一物もなし」といふたのに對して、新左衞門が「何物も無きをたまはる心こそ本來空の妙味なりけり」といふたのも、亦此の眞空妙有の道理を示したとも見られる、無一物の處、無盡藏、花あり月あり、樓臺ありて、眞空にして妙有なるが大乘の實義であるから、單に空といふただけではまだ究竟の說とは云はれぬ、されば こそ法華經の中には一切の空經は是れ有餘の說なりとあつて、一部分だけは說いてあるが、其の餘の義は未だ說き盡くして無い、餘あるの說だといひ、大品經には空はこれ大乘の初の門とあると、經說を引て自說を確めたのである。

上の四教展轉して相望めば、前は淺く、後は深し、若し且くこれを習ふて、自ら未了と知る、之れを名けて淺と爲し、若し執して了と爲さば即ち名けて偏となす、故に習ふ人に就て偏淺といふなり。

上來、人天教、小乘教、大乘法相教、大乘破相教と述べて來たが、皆な後のから前のを見れば前は淺劣で、後のは深く勝れて居る、即ち小乘教は人天教よりは深いが、法相教よりは淺い、法相教は小乘教よりは深いが、破相教よりは淺い、其の又破相教も次ぎの一乘顯性教から見れば淺劣を免れない、それに是等の教を習ふて、自ら之れは未だ充分に悟の開けない教であるといふことを知つてくるから、之れを淺といふので、若し此の教に執着して眞實の悟が開けたやうに思へば、即ち偏とかたよつたのである、それであるから、之れを習ふ人の機根の上て偏淺と名け、一々之れを斥けて來たのであると、斥偏淺第三を結むだのである。

# 五、直顯眞源第三　佛の了義教を習ふ者

## (五)　一乘顯性教

これからが此の論に四篇ある中の第三の直顯眞源といふので、直に大乘佛教の眞理、原人の根源、即ち一切衆生の眞性を顯すとの義で、これまでのは佛教には相違ないが、まだ決了したる眞理ではなかつたが、此の篇は眞實決了の眞理を示すのです、

五に一乘顯性教とは、謂く一切の有情皆な本覺の眞心あり、無始已來、常住にして清淨、昭々として昧まされず、了々として常に知る、亦佛性と名け、亦如來藏と名く無始際より妄想之れを翳ざして、自ら覺知せず、但だ凡質を認むるの故に、耽着して業を結んで生死の苦を受く。

これは僅かの字であるが、殆んど此の數字の中に大乘佛教の眞理を言ひ盡くしたと見ることが出來る、五にいふたのは斥偏淺の初めに一に人天教、二に小乘教、三に大乘法相教、四に大乘破相教とあり、其の次ぎに一乘顯性教もあるので、一乘といふのは聲聞とか緣覺とかいふ二乘でもなく、聲聞緣覺菩薩の三乘でもない、唯一佛乘で、宇宙萬象皆な其の儘に佛陀であるといふ眞性を顯はすの教であるから一乘顯性教といふたので、此の一は二とか三とか對する一でなく、絕對の一即ち全一である、さて此の一乘顯性教では一切有情即ち生きとし、生けるものは、皆な本覺の眞心として、本來其の儘に諸の僞妄を離れて覺りの心を持つて居るので此の本覺の眞心は無始以來即ち無限の時間を通じて、常住として變化することなく、淸淨として汚れたこともなく、昭々と明かにして昧まさるゝこともなく、丁度、明かなる鏡、其の上に映る影には生滅もあり、變化もあるが、其の鏡の體は常住で、しかも其の上に何が映つたからとて汚れるといふことはないやうに、淸淨で、しかも昭々として昧まされず、花來れば花、鳥來れば鳥と映じて行く了々とはあり〳〵といふ義で、常にあり〳〵と宇宙萬象の

拂破諸緣
般若經に
いふ眞心
とは
僞妄を離れて
なる體に
なる故に
僞れる
妄なる
味なし



狀態を知覺して居る、即ち眞空にして妙有なる靈體で、今は本覺の眞心といふたが、又佛陀とも云へば、如來藏ともいふ、佛性といふのは佛と同じ性質といふこと佛とは詳しくは梵語の佛陀、支那に譯して覺者といふので、宇宙の靈體を悟つた御方といふことであるが、其の佛の性とわれ〳〵衆生の無始以來持て居る本覺の眞心といふものとは異るものではないから、此の本覺の眞心のことを又佛性ともいふのである、如來藏といふのは、詳しくは如去如來といふて眞如から來て眞如に去るといふ義で、われ〳〵が眞如と合一し得た名であるが、此の如來の性を收め藏して居るといふ點から本覺の眞心のことを如來藏ともいふのである、かくの如く本覺の眞心だの、佛性だの、如來藏だのといふたが、それは外にあるのではない、われ〳〵人間が無始已來備へて居るのである、かく無始已來備へて居りながら、迷ひに迷ひ來つて有りもせぬものを有りと想ひ、無いと云はれぬものを無いと思ふ如き間違つたる思想、即ち妄想の爲めに翳と掩ひ隱くされて自ら昭々了々たる本覺の眞心を持て居ることを覺知せず、但だ此の如き凡夫の形質のみを認めて、これを愛着して、其の本を知らず、

論は性は覺
解即本
佛義ち義
に の
生 一 有 照 義 性 無 し 本 性 覺 は
は 切 り 故 は ず ふ く あ 時 な 即 の
て 法 る に 無 性 く し る 情 い 義 り
い に あ が 察 を 情 と 又 と 異 に
は ひ り 情 に 覺 情 無 は 本 る
ふ 佛 、 萬 な を 知 い 情 ふ 義 な 覺
佛 あ 性 有 る す 今 佛 ぶ 即 い 覺
性 り 法 て 局 る に 性 に 本 な
性 と 有 な 義 は 通 の 義 る 説
は 法 果 は 全 來 藏 出 如 離 法 如
本 な は 藏 は 出 如 離 法 如
覺 る ふ 來 に 來 來 に 來 來
の の 來 如 の 藏 の 來 藏 來

凡夫としての行ひを爲るものであるから、亦凡夫として受くべき生死の苦を受けるのである。例へば此に家重代の珍寶ともいふべき茶碗がある、其の値數千金であるが、何日からとなく其の珍寶たることは忘れられて犬や猫の餌を與るものに使はれて居る、犬や猫の餌を與るものと心得て居るから、洗ひもせねば滌ぎもせず、汚れたまゝにして置くのと同じことで、これが家重代の珍寶と解れば洗ひ淨めて桐の箱にても收めるのであるが、知らねばこそ犬猫の食器として居るのであり、われ〳〵は無始以來、家重代の珍寶ともいふべき本覺の眞心即ち佛性といふものを持つて居りながら、妄想の爲めに掩ひ隱くされて、其の珍寶たることを知らず、犬猫の食器と思ふて、食器相應な取扱ひをして居るから、永く洗ひ淨めらるゝことがなく、生死流轉の苦を受けねばならぬのである。

大覺之れを愍みて、一切皆空と說き、又靈覺の眞心淸淨なること、全く諸佛に同じと開示したまふ、故に華嚴經に云く、佛子一衆生として如來の智慧を具有せずといふことなし、但だ妄想執着を以て、而も證得せず、若し妄想を離れば、一切智、自然智無礙智、即ち現前することを得ん。

大覺といふのは佛のことである、佛はわれ〳〵が無始以來立派の佛性を持ちながら、それと知らずに迷ひに迷ふて居るのを愍れみたまひて、それは犬猫の食器でない、家重代の珍寶ぞよと示し下さるので、此のことを法華經の中には長者窮子の喩を示して說き明されてある、それは長者の一子が幼少の時に家を出て他國に流浪し、乞食となつて己れの親の長者の家の軒の下に立つた、親は之れを見つけて、これは我が子ぞ、巨萬の富ある此の家は汝のものぞと、直に之れを讓らうとしたが、子の方では、自分が、そんな長者の子であるとは知らず、生れながらの乞食と思ふて驚いて逃げ出した、そこで親はいろ〳〵に工夫して、先づ之れを自分の家の奴僕に使ひ、それから種々に導いて、過ぎし昔を思ひ出させ、終に其の家を相續さしたといふので、此の乞食といふのは、われ〳〵お互が但だ凡質と認めて、耽着して業を結び、求めて生死の苦を受けて居るのに喩へたので、之を愍みていろ〳〵に導いて與れる親は即ち大覺世尊である。

されば佛はいろ〳〵に御苦心なされて、或は一切皆空とて破相の談をなされて、吾等が心に掩はれて居る妄想の法執や、凡質を認めて、耽着して居る我執を拂ひ、乞食てはないと示し、或は長者の子ぞ、そのまゝにして巨萬の富を持つて居るぞと說くが如くに、吾等が持つて居る靈妙なる本覺の眞心といふものは、清らかにして佛達と少しも異らぬものぞ、と示し下された、これが抑も佛敎の根本思想て、佛と衆生即ち吾等とは其の本源に於ては全く同一のもので、佛にあつても增さず、衆生にあつても減ぜざるのが、此の靈覺の眞心即ち佛性て、本論の著者宗密禪師の最も信仰して居らるゝ華嚴經の中には、佛子一衆生として如來の智慧を具有せざるはなしとある、佛子といふのは一切衆生のこと、一切衆生は終に佛の位を紹ぐべきものてあるから、斯く云はれたのてつまり一切衆生は皆な佛の智慧を具へて居るといふ御語て、涅槃經には同じ意義を、一切衆生には悉く佛性ありと仰せられてある一切衆生悉有佛性、吾等も亦佛と同じ性を持つて居るのてある、然るに此の如く淺ましく迷ひに迷ふて居るのは何故かといへば、次ぎの文句に、但だ、妄想、執着、を以て、而も、證得せず、とあつて

法華經講話

曰佛衆生世間の人のを見て、浮世の迷ふ、し見てしと迷ふ、現にすめを佛生の共ら開佛以字開れあま出るん見にふ現てしと浮し見て衆佛曰法
し世るん悟のを文のず示はなあ示こりふ現がとを佛、し世めをなめを佛生世く
たにがとら知しに大更にたりるのゝ、、し故欲示の衆たにん得るて開て衆、めを佛生世
ま出故欲し見て衆ぎに止ゞ、所二に之とたにすさ知生ま出とせこ濟か知しは諸に

即ち無始以來の妄想の爲めに掩はれて自ら之れを確かに見屆けることが出來ないのに過ぎない、されば此の妄想をさへ離るれば、もと〳〵持つて居る佛の智慧は現はれ出るといふのが、こゝに引用せられた華嚴經の文意てある。一切智、自然智、無礙智といふたのは共に佛の智慧のことて、これを詳しく話すには始覺と本覺のことを云はねばならぬ、本覺といふのは、しば〳〵いふ如く、われ〳〵の本來持つて居るサトリて、佛と同じものてあるが、それが曇り曇つて今日の我が心となつて居る、此の心の曇りを取り去つて、もとの本覺の通りにして行くのが始覺て、本覺は鏡の明かなるが如くてあるならば、其の鏡の曇りを去つて明かにして行くのが始覺てあるから、始覺の究極する所は本覺と同じくなる、これを始本不二といふ此の始覺の智慧が一切智、本覺の智慧が自然智、始本不二なる所が無礙智てある、妄想さへ離るればこれらの智慧は皆な現前して、佛と同じ働きが出來るのてあるから、梵網經には汝は當成の佛、我は已成の佛といふ語があつて、一切衆生は當に成るべきの佛、即ち佛の候補者て、佛は已に成られたのだ、彼の平家物語に「佛もむかしは凡夫なり、我等も遂には佛

ふ、
し知て衆生
るとら見し佛
ん入あたにがし出故欲ふ現にすめに
ゝとせりま
なせし、

なり、いづれも佛性具せる身を、へだつるのみこそ悲しけれ。」とある如く、佛も昔は凡夫にて、凡夫も終には佛たり而山和尚は平易なる喩を設けて、佛は甘干の柿にして、吾等は澁柿の如し、澁柿は澁いけれども、日の光に晒せば、澁そのまゝに甘干の柿となると云はれて居る、さてこゝに引用せられた華嚴經には

便ち一塵大千の經卷を含むの喩を擧げ、塵は衆生に況へ、經は佛智に況ふ、次の後に又云く、爾の時に如來、普く法界の一切衆生を觀じて、而も是の言を作す、奇なる哉、奇なる哉、此の諸の衆生、云何ぞ如來の智慧を具有しながら迷惑して見ざるや、我れ當に敎ふるに聖道を以てして、其れを永く妄想を離れて、自ら身中に於て、如來の廣大の智慧を見ること、佛と異ることなきを得せしむ。

とある。一塵、大千を含むの喩は、華嚴經の本では頗る長いのを、こゝには一言に約めて其の要をいふたので、一塵とは一微塵のことで極く細かいもの、大千といふのは先きに云ふた三千大千世界のことで、限りなく大なるもの、しかも此の細かい一微塵の中に、此の大なる世界に等しき經卷を含むで居るといふ喩がある、大體此の華嚴經の敎旨は事々無礙といふことに立脚して、宇宙萬象は相互に關係して離るべからざるもので、一の中に多を含み、多は一に攝すといふ甚深な敎理で、一つの塵の中にも、天地宇宙の大眞理を含み、天地宇宙の大眞理も亦一の塵の上に現れるといふ妙用を說いて居るのですが、こゝに喩へたのは一塵といふたのは衆生、大千の經卷といふたのは佛の智慧で、われ〳〵一衆生の中にも佛の智慧を含むで居るのは、恰も一塵の中に宇宙の眞理を含むで居るのと同一の理によつて說明することが出來る、此の譬喩の次きの後の方の文句に、如來即ち佛が普く法界とて一切諸法の限りない世界といふことで、今日の語でいへば宇宙とても申しませうが、此の宇宙間にあらゆる一切衆生を見渡したまふに、奇なる哉、奇なる哉、此の諸の衆生は、佛と同じ智慧を持つて居りながら、本に迷ひ末に惑ふて何故それを見ないのであらうと仰せら

華嚴經に曰く、爾時世尊、如來大智慧海、普入一切衆生心海、普入一切諸佛國海、普入一切諸佛菩提海、普入一切諸佛大力海、普入一切諸佛大莊嚴海、普入一切諸佛大神通海、普入一切諸佛大自在海、普入一切諸佛大法輪海、普入一切諸佛大無畏海、普入一切諸佛大慈悲海、普入一切諸佛大不共法海、普入一切諸佛大不可說不可說海、普入一切諸佛大不可說不可說不可說海、普入一切諸佛大不可說不可說不可說不可說海、普入一切諸佛大不可說不可說不可說不可說不可說海、普入一切諸佛大不可說不可說不可說不可說不可說不可說海、普入一切諸佛大不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說海、普入一切諸佛大不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說海、普入一切諸佛大不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說海、普入一切諸佛大不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說海、普入一切諸佛大不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說海、普入一切諸佛大不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說海、普入一切諸佛大不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說海、普入一切諸佛大不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說海、普入一切諸佛大不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說海、普入一切諸佛大不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說海、普入一切諸佛大不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說海、普入一切諸佛大不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說海、普入一切諸佛大不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說海、普入一切諸佛大不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說海、普入一切諸佛大不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說海、普入一切諸佛大不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說不可說海、普入一切諸佛大不可說

位に擧道とあるは浮土門に對するのである、廣く義ず、佛の道を指したるなり、

れた前きの譬喩でいへば一塵の衆生の中に大千の經卷たる如來の智慧あるの義だ、そこで佛は、我當に教ゆるに聖道即ち佛の道を以てして、永く妄想を離れて、自から五尺の身體、五十年の生命たる、其の身の中に立派に如來の廣大の智慧、佛と少しも異ることのないものゝあることを見せしめんと仰せられてある、以上が第五の一乘顯性教の大旨である、此の大旨によつて如何か原人を談ずる、宗密禪師は評していふ。

評に曰く、我等多刼より眞宗に遇はず、反て身を原ることを解せず、但だ虛妄の相を執して、凡下を甘認す、或は人、或は蓍、今、至教に約して、之れを原ねて、方に本來是れ佛なることを覺る、故に須らく行は佛行に依り、心は佛心に契ふべし、本に返り、源に還りて、凡習を斷除し、之れを損し、又損し、無爲に至らば自然は應用恒沙なる、之れを名けて佛と曰ふ、當に知るべし迷悟同一眞心なるを、大なる哉、妙門原、

眞宗とあるは浮土の宗の義にあらず、眞實なる宗旨といふだけの意なり、

人此に至る。

今までは詰りて曰くとあつて、詰責して來たが、これは詰るべきものでないから評して曰くとした、多刼とは刼は刼波で時間のことであるとは已にいふた如くて、我等は此のながい時間に亘りて眞實なる佛法の宗旨に遇はず、いろ〳〵に苦心しつゝ、近くこれを我が身の上に原ねることを知らず、但だ虛妄の相に執着して、先きに擧げた長者の子が乞食となつて其の乞食の相に執着して金品が欲しいと彷徨て居るやうに、甘んじて凡夫下賤と認めて、元來立派な長者の子、即ち諸佛如來同等の身であることを知らず、或は畜生であると思ひ、或は人間であると思ひ、或は修羅、或は餓鬼、或は地獄、或は天上と六道虛妄の相に迷ふて居つたのであるが、今、幸に至極したる教によりて其の本を原ねて、本來これ佛たることを覺ることが出來るやうになつて、長者の子たることが解つた、已に長者の子たることが解つた以上は、前の乞食の折のやうな行ひをも乞食の折のやうな心をも止めて、長者の子らしき心を持ち、長者の子らしき行ひをせねばならぬ如く、本來佛たるを知らず、して甘んじて凡下と認めた昔こ

そ、心も行ひも麁末にしたれ、已に佛なるを知つた以上は、其の行ひは、佛の行に依り、其の心は佛の心に契ふやうにして、其の根本たる佛に返り、其の源泉たる本覺の眞心に還りて、無始以來、其の本性を掩ひ、原質を隱くして凡下の身なりと認むるの習慣を作りし煩惱妄想を斷ち去り、除き了つて、其の除き了つた、斷ち去つたといふ心をも殘らぬやうにすれば、其の行、其の心、そのまゝに佛と同じやうになつてしまう、此の佛と同じやうになつたのが、無爲の境てす、之れを損し又損しとあるのは、老子の語て、之れを損じといふのは凡習を斷除するのて、次ぎの又損じとあるのは、其の斷除するといふことをも斷除して行くのて、此の心がある間は未だ眞の無爲てはない、或る人が本來佛たる此の身を凡下と認めて居つたのを恥ぢて、夢さめて見れば恥かし寢小便」といふた、これは面白い、併し、これてはこれを損しただけて、恥かしといふ心が殘つて居る、これが殘つて居つては眞に無爲てはないから、之れを叱して、「恥かしと未だ夢さめぬ寢惚坊」といふたといふ話がある、此の恥かしいといふ心もない、これが眞の無爲だ、古人の語にも眞忠は忠を忘る念々これ忠なり、眞孝は孝を忘る、念々これ孝なりとあつて、これが忠義だ、孝行だといふ間は未だ眞の忠孝てはない、忠といひ孝といふのも忘れて、初めて全身これ忠孝、一舉一動これにあらざるはなしといふ、大極上々無爲の忠孝と云はれるのてある、此の境に至れば殊更らに斯く〳〵しやうといふ心はなく、自然に應用自在て、孔子の所謂心の欲する所に從て矩を越へざる妙を得ることが出來る、恒沙といふのは印度の大河ガンヂス河の沙の數限りなきが如き萬般のことに接しても自由自在に本覺の眞心を應用して行ける、これが出來れば即ち佛て、佛といひ、衆生といへば大變異つたものゝやうてあるが、決して別なものてはなく、われ〳〵お互が其の本源に、立ち還つて、凡習を斷除しさへすれば、應用恒沙となつて佛となるのて、悟つた佛、迷へる衆生と別のやうだが、其の本を尋ぬれば同一眞如の法性から出たのに外ならない、此の道理が即ち一乘顯性敎の原人論て、華嚴經の中には、心と佛と衆生と是の三、差別なしともあつて、迷悟同一の眞心、何をか迷ひ、何をか惑はん、大なる哉、顯妙なる實大乘の敎、原人の論も終に其の本源に至つたのてあるといふのが宗密禪師の評てある。

（參照）迷だの悟だの、佛だの衆生だのといふから此の原人論を以て何だか我田へ水を引いたやうで、未だ其の本源を究めたと思はれぬ御方があるてあらうが、佛敎は一切萬有を以て其の本體は一とするので、衆生のみが同一てない、萬有悉くこれ其の體一、山河大地も、草木禽獸も、土石も、瓦礫も其の相は異れりと雖も、體に至つては一とするので、しかも此の同一なる體と、千差萬別の相とは異なるものてなきこと、猶ほ波と水との如く、波は千差萬別の相があるが、皆な悉くこれ同一の水て、水を離れて波なく、波を離れて水はない、差別即平等、平等即差別、水即波、波即水て、千差萬別なる宇宙の現相は、其の儘に同一平等の本體てある、小乘敎や、大乘法相敎は此の差別の相に迷ふて居つたので、大乘法相敎は同一平等の本體だけを見て差別の相を破したのてあるが、此の一乘顯性敎に於ては本體即現相、現相即本體と立てゝ、本體は悉くこれ眞如て其の上に現れたのが萬法もあるから萬法の本は眞如てあると說きて、近世の哲學者のいふ現象即實在の議論の上に、萬有を觀察して行くのてある、此の道理を人間の上に及ぼして其の相は人間てあるが、其の體には眞如と同じものてあるといふのが、先きにいふた本覺の眞心てある、眞心といへば心といふことに偏して即心即佛とは見るが、此の身は全く別なものだと思ふ、これは隨分他の宗敎などてもいふことて、靈魂は立派なものてあるが肉體といふ牢獄に囚はれて其の自由を欠くといふ考があつて、心を貴びて體を賤むといふ風は印度の波羅門敎や、中世の基督敎にもあつて苦行や斷食の修行も起つたのてあるが、大乘佛敎に於ては心のみならず、此の身も亦佛と同じもので、即身即佛の義を談じて居る、これらのことを詳しく說くと面白いのてあるが、こゝには唯だ身も心も其の本源に於ては佛と同じものてあるといふことを云ふに止めて置く、即ち體は一にして相異るが宇宙萬有の狀態てあるといふ立脚地から原人を說明して來たのが此の宗密禪師の立論の大旨てある。さて此の本文の終りに著者は「自註」を加へて讀者をして疑ひなからしめんとせられた、古人は之れを稱して「殘疑の註」と云はれた、さつと其の文を解して置かう、

然るに佛、前の五敎を說きたまひて、或は漸、或は頓、若し中

下の機あれば、則ち淺より深に至り、漸々に誘接す、先づ初教を說て惡を離れ善に住せしめ、次ぎに二三を說て染を離れ淨に住せしめ、後に四五を談じて相を破して性を顯し、權を會して實に歸す、實教に依て修すれば乃ち成佛に至る。

一乘顯性教に於て原人の義窮るなれば、何故に佛は前に擧げた人天より破相に至るまでの不了義の教を說かれたのであらうかとの疑を起す人があるであらうが、佛の教には頓漸の二がある、漸といふのは漸次に修行して進み進んで佛になるのであり、頓といふのは一足飛びに成佛するのである、何故此の二があるかといふに、中根下根といふて根機の劣つて居るものでは、一足飛びに佛になることは出來ないのであるから、小學校から中學校、中學校から大學校といふ風に漸々に誘導接化して行かるゝので、先づ初めに人天教を示して惡を離れ善に住せしむるやうにする、併し唯だ惡を離れ善に住するだけが佛教の目的ではない、佛教では此の善惡を超越したる無爲淸淨の境に到らねばならぬのである、次ぎに二といふのは小乘教、三といふのは大乘法相教を說て我執や法執の染とケガレを去つて淸淨の地に止らしめ、さて其の次ぎに四と破相教、五と顯性教によつて、虛妄の相に迷ふて居るのを破つて眞性を顯はして、佛と同じ境に進ましむるのである、大內靑巒居士は面白い醫喩を以て之れを說明して居られる、こゝに一人の肺炎患者があるとして、其の病人が日々に痩せ衰へて咳が出て苦しい、此の咳が出なければ樂であらうといふのであり咳止めの工夫をするのが人天教の勸善懲惡、其の咳は何から起るかといへば肺炎といふ病氣から起る、そこで醫藥の力で治さうとして居る所が小乘や大乘法相教、これで病氣は治つたが未だ藥を止めることは出來ぬといふのでは、未だ十全健康の者とは云はれぬ、そこで四の破相教によつて醫藥といふ相を破して、醫者の藥もいらぬといふ十全健康の身になつたのが本の佛となつて見れば先きの咳止めの人天教も治肺の醫藥とも云ふべき二三の教も皆なこれ成佛の手段に過ぎなかつた如く、漸々と權とカリの教を會して實教に歸せしめ、此の

實教によつて修行して成佛に至ると、かくの如き順序が必要てある。若し上上根智なれば、則ち本より末に至る、謂ゆる初めより便ち第五に依て、頓に一眞心體を指す、心體既に顯れば、自ら一切皆な是れ虛妄にして本來空寂なるを覺す、但だ迷を以てす故に、眞に託して起る、須らく眞を悟るの智を以て、惡を斷じ、善を修し、妄を息め眞に歸すべし、妄盡き眞圓なる是れを法身佛と名く。

中根下根の者は漸々に修行して行くのてあるが、上々の根機のものは一足飛びに先づ悟を開いて、それから修行するのて、末より本に至らず、本より末に至つて、先づ其の本源たる第五一乘顯性教によりて宇宙萬象の本體本源たる一眞心體を指して、さて、此の心體が顯るれば、自然と一切の現相は悉くこれ虛妄てあつて、其の本來は眞如法性て空々寂々たるものてあるといふことを覺知することが出來る、此の一切空寂の理が大乘破相教、此の本來空寂のものが如何にして千差萬別の相が現はれて居るのてあるかといへば、無始以來の迷ひの爲めに此の眞如法性に依り添ふて、さま〳〵の相を顯して居るのて、これを但だ迷を以ての故に眞に託して起るといふ、此の迷を以て起つて行くのてあると知るのが大乘法相教てあるそれてあるから一足飛びに眞理を悟つた智力を以て、如何なる惡をも斷じ、如何なる善をも修して、無始切來の薫習し來たる諸種の妄想を息めて、一眞實體に歸するやうにするがよい、かくして妄想盡きて眞實の圓かなる、これを法佛と名く、かく妄盡きて眞圓かなれば、天地萬物悉くこれ法性法身の佛陀となつて、おもしろや散るもみぢ葉も咲く花もおのづからなる法の御姿て盡天地、盡乾坤、悉くこれ佛となる、これが上々根機のものゝやり方て直に佛となつて佛たる行ひをして行く一乘顯性教の妙味てある。

『佛曰く今より已後、我が諸の弟子相傳へて道を行ぜば、即ち是如來の法身、常に世にありて滅せざるなり　（遺教經）

佛身は法界に充滿し、普く一切衆生の前に現れ緣に隨ひ感に赴きて周からざること靡し、而も恒に此菩提座に處り給へり　（華嚴經）』



## 六、會通本末第四

前の斥くる所を會し同じく眞源に歸す

上來述べた所を此の一篇で結ぶのが會通本末で即ち原人論の結論ともいふべきもので、末といふのは第一の斥迷執と、第二の斥偏淺、本といふのは第三の直顯眞源で、前きの斥くる所を後の一源に歸するので、先きの儒道、人天、小乘、法相、破相は一乘顯性教に至るの道筋、此處に至りて見れば、先きに歩み來る所のものは皆なこれ途中の風光で、棄つべきものでないことが解る、會は理の聚つて遺すべからざるをいひ、通は理の行くとして礙る所なきをいふ。

眞性、は身の本たりと雖も、生起蓋し因由あり、端なく忽ち身相を成すべからず、但だ前宗の未了に緣る、所以に節々に之れを斥けり、今將に本末會通せんとす、乃至儒道も亦是なり。

原人論の本旨は一乘顯性教で盡きたのであるが、此の佛性といひ、如來藏と

いふ一源から何うして此の身を生じたといふ手順に至つては未だ明かでない、これを說き明すのが本篇の眼目で、これによつて初めて原人論の要點が明になるのである、先きにいふた如く身の本は眞如法性であるが、眞如法性から直に身となるのではない、それにはそれ〳〵生じ起すべき因緣あり由緒がある、決して因緣も由緒もなく忽焉として出來るものではないが、但だ前の迷執や偏淺の方は未だ充分に此の道理を了畢して居るのでないから、後によりて前を一々に排斥して淺より深に進んだのである、京都に行くべきを箱根山を以て終りとし、大井川を以て行き止りとし、又は靜岡や名古屋が京都だと思ふものがあるから、それを斥けて來たが、今本たる顯性敎即ち目的地たる京都へ來て見れば、箱根の山も、大井川も、靜岡も名古屋も皆な其の道筋であつたと會通して大乘より小乘、小乘より人天、否、佛敎以外の敎たる儒敎や道敎も亦其の途中であつたと知る、豈に曾にこれらの敎のみならんや、基督敎も進化論も皆な會通してしまうといふのが此の見識である。

（會通とは俗にヒトヨツトといふが如し、）

謂く初めは唯だ一眞の靈性にして不生不滅、不增不減、不變不易なり、衆生無始より迷昏して自らこれを覺らず、隱覆に由るが故に、如來藏と名く、如來藏に依るが故に、生滅の心相あり。

これから以下は馬鳴菩薩の名著「大乘起信論」の意を採つて釋せられたので、大乘起信論では、われ〳〵と互の根本、大乘の法體となるべきものを淸淨の一法界心とし、此の一心を二門に分ちて心眞如門、心生滅門としてある、心眞如門といふのは變易せざる宇宙の本體で、心生滅門は變々化々する宇宙の當相である、そこで初め唯一眞の靈性といふのは、起信論に所謂法界大總相法門と名けられ、此論には前に眞源とか一眞心體とか云はれたので、唯一とは絕對の全一、眞とは妄に分ちていひ、靈とは靈妙不思議の作用で、性とは人々本具の自性、此の一心には體と相と用との三つがあつて、其の體をいふ時は絕對全一、平等であり、不變であるが、其の相即ちスガタは相對で差別で變化もある、其の又相に從ひてそれ〳〵の作用のあるのが用、例へば此處に土瓶がある、其の體は

起信論に曰く心性は不生不滅なるに平等なる寛大なる性質あり、と、唯一心なるが故に名に眞如と名ずく。

といへば土、土といふ點では茶碗も花瓶も同じことたが、其の相は全く違ふ、違ふに從つて土瓶には土瓶の用あり、茶碗には茶碗の用がある、この體相用の三つは宇宙にあらゆる萬物に行き亘つて備はらざるがないから之れを三大といふのて、今唯一眞の靈性も亦此の三を具して居るのて。

一心
- 心眞如―體大
- 心生滅
  - 相大
  - 用大

と見るのが起信論の說明てある、されば其の體の上から見れば、此の唯一眞の靈性といふものは不生不滅、不增不減、不變不易てある、先きの破相敎は唯だ此の體を見て相と用とを忘れ、湛然たる眞如の靜的方面を見て動的方面を逸したのてあるが、兎に角われ〳〵衆生の本源は聖凡其の歸を一にする本性があつて、生滅增減、變易のないこと猶ほ大海の水の如くてある、然るにわれ〳〵衆

發微錄には先きの例に、睡眠によりの夢は虛妄のずの睡眠は因れ必ずの人すれば、と、覺即ち性、睡を眠へ、識に夢を驗ふと識と。

生は無始より迷睡と迷ふて夢を見て居るやうに、己れの本體本性は此の唯一眞の靈性なることを覺らず、其の大光明を隱とカクシ覆とオホヒて自ら知らないのてある、如來藏といふのは先きに亦佛性と名く、亦如來藏と名くとあるのと同じて佛性といふたのは、吾等は皆な佛陀となることの出來る性を持て居るといふ點から名け、如來藏といふたのは如來の性を藏めて居るといふ意てあるが、此の藏に能藏、所藏の義もあり、又覆藏とてオホヒカクス義もある、今は其の如來の性を覆ひ隱して居るをいふたのて、この如來藏によつて生滅の心相がある、猶ほ滔々たる大海に無明の風吹き來りて生滅の波を起すやうなものてある、水なければ波なし、唯一點の靈性の水によつて生滅妄想の波を起したのてある。

所謂、不生不滅の眞心と生滅の妄想と和合して、一に非ず、異に非ざるを名けて阿賴耶識と爲す、此の識に覺不覺の二義あり。